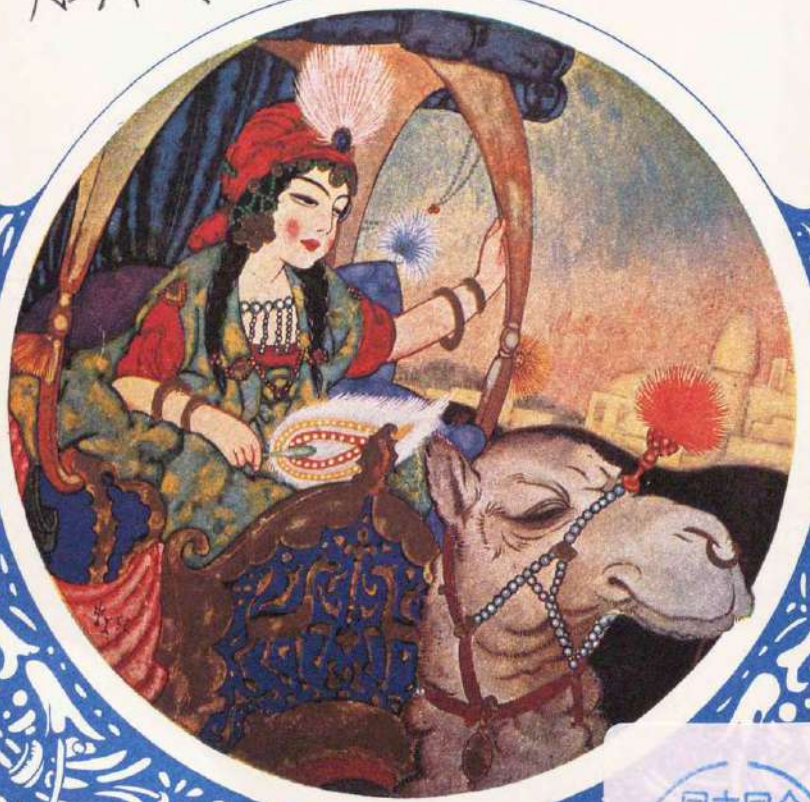
Z32-B88

金の星

九月号

K2A-25



第五卷・第九号

国立国会
8. 3. 26
図書館

大正十一年六月十三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）　大正十二年八月八日印刷納本　大正十二年九月一日發行

Kodak Color Control Patches
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Kodak Gray Scale
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
© Kodak, 2007 TM: Kodak

快よき夏の滋強飲料

カルピス

まごころ
こめた
おくりもの

■問合 三宅驥一理學博士
■製造元 東京ラクトー株式會社
■發賣元 東京ラクトー株式會社
■發賣店 酒場・文房具店・藥品
■販賣元 小壺、大壺、滋用壺、あり

581

この夏は？ 皆さまでお伽の國に避暑シマショ

巖谷小波著（文部省認定通俗圖書）
オトギウタエ
四六倍判全三冊定價各八十錢 送料各八錢

巖谷小波校閲 鹿島鳴秋著（文部省認定通俗圖書）
オハナシ
四六倍判全五冊 定價各一圓 送料各八錢

巖谷小波著
日本一の畫噺
四六半截 三十五冊 定價各廿五錢 送料各四錢

鍋井克之著（文部省認定通俗圖書）
家庭教育 **子供博覽會**
四六倍判全一冊 送料八錢 定價九十錢

巖谷小波著（文部省認定通俗圖書）
日の丸お伽文庫
四六半截全五冊 定價各四十錢 送料各四錢
■第一集兎の軍使■第二集桃の子福者■第三集龜の命■第四集虎の明神——第五集 お伽大會——

鹿島鳴秋著（文部省認定通俗圖書）
お伽十五夜物語
四六判全一冊 定價一圓五十錢 送料十二錢
■遠いへ空 ■母と子 ■星 ■空 ■エス物語 ■海の歌 ■春を見すに
——其のほか九つ——

內海月杖著（文部省認定通俗圖書）
孝子畫噺
四六別判全二冊 定價各九十錢 送料各八錢

同氏著（文部省認定通俗圖書）
家庭日本歷史
菊判全一冊 定價三圓八十錢 送料廿七錢

石川理學博士 藤澤衛彦共著（文部省認定通俗圖書）
動物畫噺
四六別判全一冊 定價一圓二十錢 送料八錢

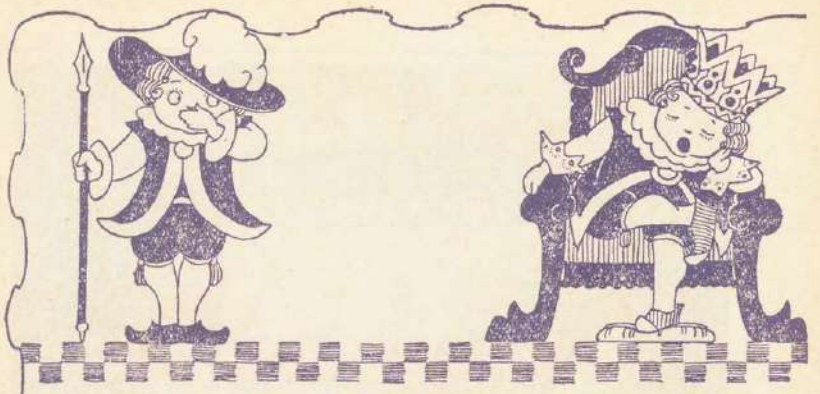
鍋井克之著
教育 **動物顏合せ**
定價六十錢 送料十二錢

東京日本橋通
丸善株式會社
（振替東京五番）

東京神田駿河臺下（振替東京二八一六番）
東京芝三田一丁目（振替東京一一八五二番）
東京丸ノ內ビルヂング（振替東京一一一番）
大阪東區博勞町北通（振替大阪七四番）
京都三條通（振替大阪一七三番）
名古屋 榮町（振替名古屋一〇二九番）
橫濱 辨天通（振替東京七四番）
福岡 上西町（振替福岡五千番）
仙臺 國分町（振替仙臺一五番）
札幌 北八條西四丁目（振替小樽一〇八〇〇番）

目次

女王様のお歸り（表紙・原色版）……蕗谷虹兒
お城の眞夜中（口繪・三色版）……寺内萬治郎
長柄の橋（童謡）……野口雨情
同作曲（作曲）……本居長世
ウソツキ彌次郎（童話）……小島政二郎
天邪鬼（小話）……齋藤佐次郎
ドン・キホーテ繪物語……水島爾保布
主人と下男（童話）……藤森淳三
蜘蛛が雲を生んだ話（傳說）……藤澤衛彦
馬車屋と雀（童話）……中島孤島
馬鹿のイワン（世界名作物語）……山野虎市
まき子さんのお乳（童謡）……若山牧水



鼻利物語（童話）……秋庭俊彦
ハンニバルの話（歴史物語）……楠山正雄
鐵のお城へ（童話）……三宅房子
牢破り（長篇童話）……西條八十
八面大王（童話）……大塚靜也
佐渡ケ島（童謡）……野口雨情
（附錄）
長篇物語 **鈍栗山**（第八回）……沖野岩三郎
アラビヤン・ナイト號豫告……（九〇）
畫の月（童謡）……（九一）……野口雨情選
苗屋（幼年詩）……（九六）……若山牧水選
花の寫生（自由畫）……（九九）……山本鼎選
死だつぱめ（綴方）……（九九）……編輯部選
通信……（一〇四）
讀者だより……（一一〇）

お城の眞夜中（日繪解說）

王女を救ひに來た王子とお伴の者は、寢ずの番をしてゐましたが、眞夜中になると、不思議な眠りにおそはれてしまひました。と、忽ちに恐ろしい爺さんが現れて、王女を攫つて行かうとしました。

（『鐵のお城へ』を御覽下さい。）

兒童の綴方

定價一冊 五十五錢（郵稅一錢）六冊前金壹圓四拾七錢十二冊前金貳圓八十八錢（郵稅共）

唯一の兒童藝術擁護雜誌

少年少女藝術の王國

九月號

諸君！諸君は、自分の書いた小說や、童話、童謠、和歌、俳句、自由畫などを自由自在に雜誌へのせたくありませんか。

えらい先生達が、いろいろな雜誌へ、きれいなさし繪でお出しになるやうに、自分の書いたのが雜誌へ出たらどんなに愉快でせう。

しかし、どの雜誌でも、諸君の投書の出る領分はごくわづかの頁です。これは諸君の爲に大變お氣の毒な事です。

ところが「兒童の綴方」はあべこべです。「兒童の綴方」は皆さんのやうな投書家ばかりの樂しい世界です。どの頁もみな、諸君のつくられたものばかりです。尋常一二年の小さい人でも、文章や童謠、自由畫などをドシドシ出してゐらつしやいます。それにはいちいち久米先生が繪をかいて下さいます。

選評

東京高師教官　飯田恒作先生　千葉春雄先生　田中豐太郎先生

ごほうびにはうつくしいメタルをお送りします。

兒童の綴方はどこの學校でもクラス中でとつて下さいます。そして月々全國の學校から競爭で山のやうな投書がきます。

それで五月號からは今までよりも、もつと、もつと紙面をひろげまして、前よりもたくさんの投書を出すことにしました。そして、諸君がたがひに、作品の評をしあふのです。

こころみに本號を見て下さい、誰がどんな小說や童話、童謠、自由畫などを出してゐますか、なかにはキット皆さんのお友達もゐらつしやるでせう。

さあ、さあ、諸君も負けずに「兒童の綴方」を自由自在にお使ひ下さい、えらい先生達がお書きになつたやうにして出せますから。

發行所　東京銀座市二ノ京橋區五一　培風館　電話京橋六七三七・四　振替東京三六一五・三七一六二三

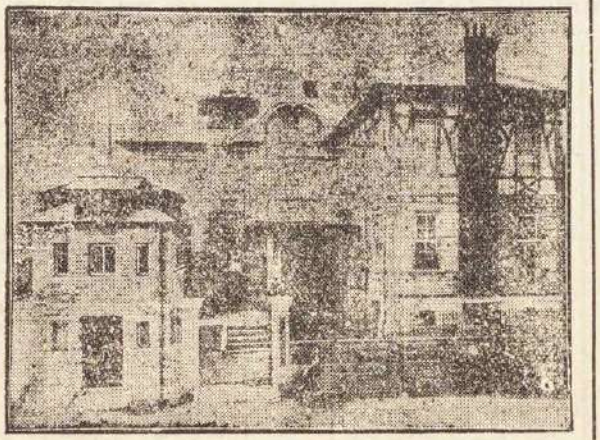
天下の青年は何故に爭ふて

大日本國民中學會に入會する乎——

■講義が新いから
■會費が廉いから
■指導が良いから
■學制が正いから
■基礎が固いから
■講師が善いから
■卒業が早いから
■成功が慥だから

會長 尾崎行雄

學監 文學博士 遠藤隆吉
顧問 理學博士 山内繁雄
新渡戸博士 三宅雄二郎
井上博士 浮田和民博士
岡田前文部大臣



一人前の男となるには
どうしても中等教育を受けなければいけない。中等教育の學力のない者はどうしても生存競爭の勝利者たることは六ケしい。併し家庭の事情で中學に入れぬ者も決して失望するには及ばない、中學校に行かずに中學卒業同樣の學問をする方法がチャンと出來てゐる。それは創立以來二十年の古い經驗のある講義錄で有名な大日本國民中學會の通信教授法である。

東京駿河臺（お茶の水電車通り）
大日本國民中學會
振替東京四二〇〇 電話 神田三〇〇二 神田三〇〇三 神田三〇〇四

⊙創立以來二十一年記念大特典提供
目下新學期開講 入會の絶好機

■講義錄見本つき
規則書無料進呈

雨情先生の童謠教育論

定價四十錢 送料二錢

（最新刊）

「童謠の正風とにどんなものか、教育上どれだけの効果があるか」といふことを正確に知るには、童謠教育の創始者である、野口雨情先生の述べられた本書によるより外にありません。

本書は四六判七十頁の小册子ではあるが、よく童謠の眞髓を極め誰にもわかる樣に一々實例を擧げて說かれてあります。

野口雨情先生序
高野盛義著
童謠作曲 童謠踊りの指導 定價一圓廿錢 送料六錢
翠野柳太郎著
野口雨情先生補遺
童謠教育の新研究 定價一圓廿錢 送料六錢

雨情先生 黑田正甘著 童謠教育の實際 價一圓廿錢 送料六錢

雨情先生 正午社編 傑作集 純童謠 影繪のお國 價一圓廿錢 送料六錢

雨情先生 童謠研究部編 傑作撰集 兒童童話 ゆきぼうし 定價七十錢 送料六錢

雨情先生 兒童劇作部編 若柳校 童謠集 蝙蝠の唄 定價九十錢 送料六錢

藤田紫水編 新作童謠 銀のつぼ 定價九十錢 送料六錢

雨情先生 波正明著 松 童謠と曲畫集 玉虫と人形 定價一圓 送料六錢

雨情先生 須川明正作曲 松 課外の讀み物 可愛らしい童謠のお話と劇 定價七十錢 送料六錢

著者は童謠教育に就いて教育會長より表彰されたる人、說く處必ず實際とのそつのなく、體ひ合せで實地採導上より發達した生きた經驗なり、業績なりを發表し、世界の研究資料に供したものである。

本居、中山兩先生曲譜八面初山冬木兩氏童謠畫十一葉。東京を初め全國の各大家と、全國の若き作家たちの敢て世に問ふ傑作を集めたもので、「童謠私觀」の二論文と、二百餘種の童謠圖書が附いてあります。

著者は永い間教育界に居て子供達を指導する爲めに新作された二百餘編が本書である、童謠を作らうとするものには絶好の參考書である。

斯界の大家雨情先生曰く、今日迄に日本國中を通じて若柳校の童謠ほど傑出した者はない、眞に本書は全國兒童の創作として第一に發表された大膽な童謠集である。

小學校兒童がふだんの生活をうたつた土の詩である。土の上から生れて來たものでなければほんたうの日本の童謠とは言はれませんが、小供さん、捨てはかういふ童謠を見なくてはなりません、本文中には兒童畫が澤山あります。

著者は童謠教育に就いて教育會長より表彰されたる人、說く處必ず實際とのそつのなく、體ひ合せで實地採導上より發達した生きた經驗なり、業績なりを發表し、世界の研究資料に供したものである。

山田耕作先生曲 蕗谷虹兒先生裝幀 須川駿太郎先生作曲 眞情あふるゝ五十編の童謠とオフセット印刷の挿繪數十枚と、作曲とが入つて居るから子供さんの方には勿論、先生方にも一般童謠愛好者にも最好の良友である。

著者はそれに在來の童謠集に慣らされて迷せる童謠を作り兒童及一般の爲めに面白く童謠趣味を吹せんと意を用ひ兒童劇に至りては無趣味なる今日の學校教育と其の兒童の育と遊び眞に情操教育にして大いに人情美を發揮す。

發行所 東京市麻布區東京振替口座 神田一番 東京市麻布區錦町一ノ一番地 米本書店

金の星

九月號

◇金の星童謡曲譜集 第三輯（全部伴奏附）定價金八十錢 送料十三錢

本居長世作曲
野口雨情作謡

水島爾保布裝幀

青い空

菊判美本
上質刷
本文廿二頁

内容
青い空。つばめ。雨夜の傘。でんゝ蟲。雀の酒盛。
呼子鳥。

第三輯は本居先生の名曲ばかりでありますが、特に「青い空」「呼子鳥」の如きは、先生の名曲中の名曲として全國の津々浦々にまで歌はれてゐるものです。全部伴奏附でありまして、此の中には特に此の輯のために先生が作曲された未發表のものが澤山に入つて居ります。

第四輯
お人形さんの夢
定價八十錢 送料十三錢
（近刊）

第五輯
子守唄
定價八十錢 送料十三錢
（近刊）

野口雨情先生著
童謡十講（四版）
定價金八拾錢 送料十四錢

金の星出版部
東京上野公園下 谷前
振替東京六一六六 電話下谷七〇一八二 番三一番

長柄の橋

本居長世作曲

Andante[M.M.♩=92]

こーこは　おほきかの　ごこのまし
ながらの　はーしは　ひこばし
きーじも　なかずば　うたれま

f

ちらい　こーこはながらの
きこ　じきじなーくなし
こ　じこもなかずば

p

まちつづきおおおお
きやられまない

f

こーわいおおこわい

p　f　rit　p

きじきじなーくなきじなくな

p　f　rit　p

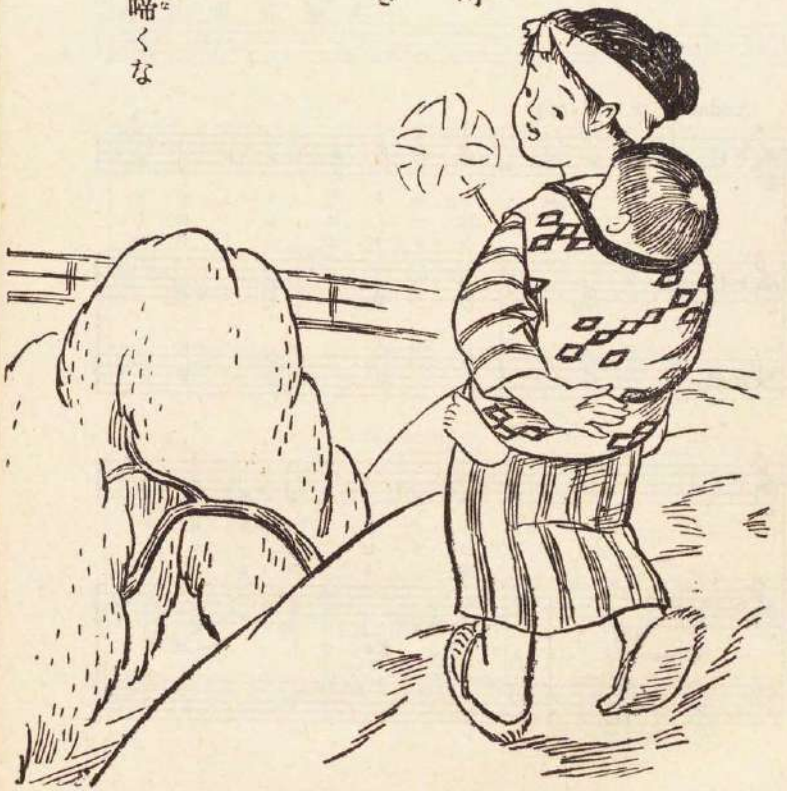
長柄の橋

（名所めぐり童謡の七）

野口雨情

ここは大阪の　どこの町
ここは長柄の　町つづき

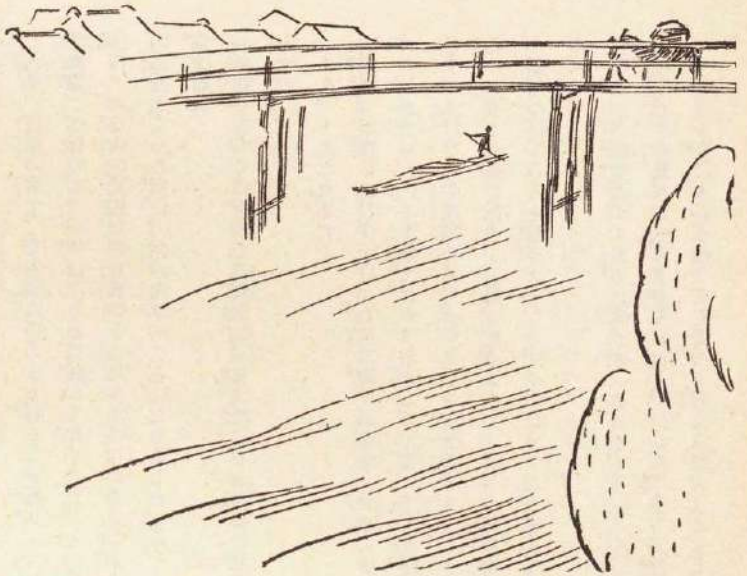
長柄の橋は　人柱
雉子　雉子　啼くな　雉子啼くな



雉子も啼かずば　打たれまい
この兒も泣かずば　遣れまい

おー　おー　恐い　おー恐い
雉子　雉子　啼くな　雉子啼くな

（大阪市外長柄の橋は、人柱の傳說にて名高い橋であります。）



ウソツキ彌次郎

小島政二郎

昔、まだこの東京が江戸と云はれてゐた時分のこと、淺草に彌次郎といふ大工の棟梁がゐました。この人は何よりも嘘をつくことが大好きで、しじゆう罪のない嘘ばかりを云つては人を笑はせて喜んでゐました。

或年、仕事の用で、その頃人のあまり行かない蝦夷（今の北海道）へ行つて、一年ばかりゐて歸つて來ました。その挨拶に、お出入の呉服屋の旦那のところへ來て、いろ〳〵向ふの話をしてゐる間に、話が火事のことになりました。すると、彌次郎は

『旦那。あちらに行つてゐた間に、私は珍らしい火事を見ました。』

『ふん、どんな火事だ。』

『或晩、炬燵にはひつていゝ心持で寢てゐると、夜中にチヤン〳〵チヤンといふ半鐘で目がさめました。聞くと、摺半鐘です。江戸ッ子の度胸を見せるのはこゝだと思ひましたから私はいきなり飛び起きて片肌を脱ぎました。さうして威勢よく駈けつけてみると驚きましたネ。やつぱりそれが燃えてゐるんで……。』

『そりやァ蝦夷だつて火事は火が燃えるんだらう。』

『役所だか宿屋だか知りませんけれど、ばかに大きな二階家で、もう十分に火がまはつてしまつて盛んに燃えてゐました

が、見てゐる間に棟が燒け落ちる時なんざァ、實に面白うございました。』

『人の家の燒るのを見て面白いなんて云ふ奴があるものか。』

『私は火事が好きですから、顔が焦げるやうなのを我慢して、すぐ近いところまで行つて見てゐましたが、そのうちに、ばッと火が動かなくなつてしまひました。』

『うん。』

『變だと思つてゐると、わい〳〵云つて働いてゐた人達が、お互に、もう大丈夫でございます、今年はいゝあんばいに早く凍りました……。』

『なんだい、凍りましたと云ふのは？』

『火事が凍つてしまつたので……。』

『馬鹿なことを云ひなさい。火事が凍るなんてことがあるものか。』

『私も變だと思つて猶見てゐると、近所の家では折角持ち出した荷をまた持ち歸つてもとのやうに片附け出しました。手傳に來てゐた人達も野次馬もいつの間にか一人もゐなくなつてしまつたかと思ふと、どの家でもバタ〳〵戸を締めて寢てしまひました。氣になるから、あくる朝早く起きて行つてみると、まだそのまゝ火事が凍つてゐるぢやァありませんか。火事のそばは一層寒いのには驚きました。ふるへながら見物してゐると、そこへ木挽だの人夫だのが大勢やつて來て、その火事を切つて車に積んで持つて行くのです。どうするのだらうと思つて聞いてみると、海へ捨てに行くのだと云ふのです。そりやァどうも勿體ない話だ、それを安く讓つて下さるまいかと云ふと、たゞ上げませう、なんなら持ち運びの入費ぐらゐ出してもよござんすと云ひます。私はゞたと思ひましたネ。』

『何がゞただ？』

『昔、珊瑚珠の見世物が淺草の奥山にあつて大層はやつたさうでよね。』

『うん。』

『それから思ひついたのですが、蝦夷の火事を持つて歸つて見世物にしたらさぞ儲かるだらうと思つたんです。』

『成程。』

『それから牛を五六匹と牛方を十人ばかり雇つて、こをれ曳

き出して海をわたつて青森から奥州とだん〳〵やつて來ました。』

『ふん〳〵。』

『ところが、困りました。』

『どうして？』

『ふうッと南風が吹いて來ると、牛の背中で火事が溶け始めました。』

『そりやァ大變だ。』

『牛は火を背負つて狂ひ廻つてゐる間に、みんな燒け死んでしまひました。それを見た牛方は、おれ達の命の親の牛をみんな燒き殺されてしまつた日には、明日から食つて行くことが出來ない、どうしてくれるのだと恐しい權幕で詰め寄つて來ました。金をやりたくとも金はなし、私は困つてしまつてドン〳〵逃げ出しました。足の早いのでは自慢ですから、野だらうが山だらうがメチャ〳〵に逃げて、もうよからうと思つて振りかへつて見ると、知らない間に大層高い山に昇つてしまつてゐました。あとで聞くと、それが南部の大恐山ださうで……。』

『そりやァ有名な山だ。』

『そのうちに、だん〳〵日が暮れてあたりが薄暗くなつて來ました。生憎月のない晩で、これは困つた、どこかに人家はあるまいかと探しましたが、どこにも見當りません。仕方なしに、細い山道をこは〴〵行くと、やがて林の中の廣場へ出ました。』

『うん。』

『向ふを見ると、微かにあかりが見えます。その時の嬉しさと云つたらありませんでしたね。今までの疲れも何も忽ちのうちに忘れてしまつて、ドン〳〵駈け出しました。すると、そのあかりがだん〳〵大きくなつて來ました。』

『フーン。』

『一丁ばかり手前まで行つてみると、あかりと思つたのはさうではなくて、一間半も火がカラ〳〵と燃えあがつてゐるのでした。』

『山火事だつたのか。』

『私も初めはさうかと思ひました。しかし、近寄つてみると、さうでもなくて、焚火をしてゐるのでした。しかも、そのま

はりを取り巻いてあたつてゐる奴等がよくありません。熊の毛皮を着た奴だの、山刀を腰にさした奴だの、どれもこれも熊坂長範の子分みたやうな奴ばかりが二三十人もゐました。」

『それは驚いたらう。』

『えゝ。しかし、かういふ時に弱味を見せてはならないと思ひました。それに、かう見えても私は腕に覺えがありますから、落ち着き拂つて……。』

『冗談ぢやァない。腕にお前はどんな覺えがあるんだ。』

『日頃の大力をあらはすのはこの時だと……。』

『おい〳〵、何が大方だ。いつか家の女中が澤庵石をおろしてくれと云つてお前に賴んだら、一ばん小さな石さへ持てなかつたぢやァないか。』

『あの時は體の工合が悪かつたので……。』

『なんだか變だな。』

『第一、いざと云ふ時になると、侍氣が出ます。』

『あんまり侍らしくもないが、どうした。』

『先んずる時は人を制す……。』

『なか〳〵むづかしいことを云ふな。』

『大きな煙草入を出して太い煙管に一ぱい詰めて、大勢ゐる中へぬつとはひつて行つて力みました。』

『なんと云つた？』

『卒爾ながら火を借りたい……。』

『芝居のやうだな。』

『さうすると、サゝお附けなさいと云ひました。で、わざと悠々と二三服吸つてから、煙草入を腰へさしかへしながら、大きにお世話であつたと行かうとすると、旅人待つたと聲をかけられました。』

『フーン。』

『何か用かと私が振り向くと、知れたことだ。こゝは地獄の一丁目で、二丁目のないところだ。懷にある金も着てゐる着物も置いて行け。いやだと云へば命はないぞと二三十人の者がバラ〳〵と私のまはりを取り巻きました。』

『それはいよ〳〵驚いたらう。』

『ところが、驚かない。落ち着き拂つて、さては貴樣達は一足二足の穿き物だなと云つてやりました。』

『なんだい、それは……。』

『めてさんざく（三足、山賊）といふ洒落です。』

『そんな最中に洒落なんか云ふ奴があるもんか。』

『ナニ、そのくらゐ落ち着いてゐるところを見せたのです。』

『それからどうした？』

『さうすると、山賊はおこりました。面倒だ、殺してしまへと頭がぶふと、二三十人の奴等が、てん〴〵に得物〳〵を引き拔いて切つてかゝりました。心得たりと私も一刀の鞘を拂つて、そばにあつた松の木を小楯に取つて、さあ來いと靑眼にかまへました。』

『うん。』

『私の體にスキがない。二三十人もゐながら、誰一人として打ち込んで來るものもありません。誘ひのスキを見せてやると、鐵の棒を振りかぶつた奴がブーンと打つて來ました。ヒラリと體をかはすが早いか、私が横に拂ふと、相手は腰を切られて打ち倒れました。』

『大層な腕だな。』

『二度目に打つて來る奴を、ガッチリ鍔許で受けました。ところが、刀の疵があつたと見えて、バチリとそこから折れてしまひました。』

『おや〳〵。――それはさうと、職人のくせにお前よく刀なんぞ持つてゐたな。』

『そりやァ道中をするんですから、用心のために持つてゐました。』

『なか〳〵えらい心掛けだ。それからどうした？』

『これには流石の私も弱りました。しかし、どうにも仕樣がありません、懷に短刀は持つてゐるんですけれど、九寸五分ではとても叶ッこありませんから逃げ出しました。』

『おや〳〵。』

『すると、あとから山賊どもが追つて來ました。つかまつては大變と逃げて行くうちに、道が盡きて、目の前に見上げるやうな大岩が突つ立つてゐました。得物はなし、相手は大勢その上道がふさがつてしまつたといふのですから、全く私の進退はこゝに谷つてしまひました。』

『可哀想に……。』

『しかし、ぐづ〳〵してゐる暇はありません。私はやにはにその三間四方もある岩に手をかけるが早いか、ユサ〳〵と二

ゆり三ゆりしたかと思ふと、目よりも高くさし上げました。」
『恐しい力だな。』
『さし上げた岩を山賊めがけて叩きつけようと思ひましたが考へました。』
『うん、どう考へた。』
『二三十人もゐる山賊が、この岩一つでみんな死んでくれゝばいゝが、若し死に殘つたら大變だぞと考へました。こつちには外には得物がないのですから……。』
『成程。』
『さう考へたから、私はその岩を小脇に抱へました。』
『嘘をつくにも程々にしろ。三間四方もある岩が抱へられるか。』
『ところが、いゝあんばいにそれが瓢箪岩で、眞中のところが括れてゐました。』
『ホホう。』
『抱へておいて、山賊めがけてその岩を千切つては投げ千切つては投げ……。』
『冗談も休み〳〵云つてくれ。岩が千切れるか。』

『それが出來立て柔かつたので……。』
『人を馬鹿にしてゐる。』
『まあ、お聞きなさい。―― 私が千切つては投げ千切つては投げる岩が雨のやうに降る。或者はそれに當つて死ぬ、或者は怪我をする、たうとう山賊どもは叶はないと見てとつたか、蜘蛛の子を散すやうに逃げ失せました。ほッと一息ついて、もとの焚火のところまで歸つてみると、まだ火が盛んに燃えてゐます。今夜はいつそこゝで明かさうと思つて、ドッカと腰をおろして休んでゐるうちに、鼾が暖まつたせいか疲れが出てコックリ〳〵居眠りを始めました。』
『大膽だな。』
『そのうちに、ゴーッといふ山鳴りがしたかと思ふと……。』
『どうした。』
『仁田の四郎が退治した榛名三間もある雄の大猪が、牙を鳴らし鼻息を吹いて荒れて來ました。何百年たつたか分らない大古猪で、こんなものを相手にしたことはありませんから、三十六計逃げるが一ばんと考へ、見るとそばに杉の大木のあつたのを幸、一生懸命にそれへ昇りはじめました。だん〳〵上へ昇つて行くと、梢の方でエヘンといふ咳拂ひの聲がしました。振り仰いで見ると、眞赤な顏に羽根の生えた天狗が羽根團扇を持つて控へてゐました。上が天狗で下が猪これには私も進退が谷りました。』
『よく谷る男だな。それからどうした。』
『どうにも仕方がないので、暫くこゝにゐたらなんとかなるだらうと度胸を据ゑました。そのうちに、驚いたことに杉の木がグラ〳〵動き出しました。』

『うん。』
『下を見ると、猪が鼻面で木の根を堀つてゐるぢやァありませんか。これはテッキリ木を倒して俺を食ひ殺すつもりだなと思ふと、生きた心地はしません。そのうちに、もう木は半分倒れかゝつて來ました。天狗は羽根があるから飛んで行つてしまひましたが、私はどうすることも出來ません。えゝ、どうでもなれと思つて上から狙ひを定めて猪の背中をめがけてパッと飛びおりました。』
『うまく飛びおりられた

か。」

『えゝ。私が馬乗りに乗ると、猪の奴め、振り落さうと思つて、しきりに跳ね上ります。振り落されては大變ゆゑ、何かつかまるものはないかと見まはすと、尻尾が目にはひりました。これはいゝものがあると思つて、ヒラリと身を躍らしてうしろ向きに乗りかへて、くる〳〵と手に巻きつけると、七巻半も巻けました。』

『そんなに猪の尻尾は長いものか。』

『何しろ猪が大きいから尻尾まで長いのでせう。さあ、この上は刺し殺すよりほかに仕方はない。私は懐に入れてゐた脇差を抜いて、柄まで通れと突き立てましたが、驚いたことには、年を經た猪のこととて、體に松脂をなすりつけては砂ッ場へころがり轉がり天日で干し固めた體なので、まるで鎧を着てゐるのと變りはありません。脇差なんかではとても刺し通せはしません。あゝ、俺もこの猪のために振り落されて牙にかけられて死ぬのかと悲しく思ひました。がしかし待てよ、いくら劫を經た古猪だつて急所を突けばまゐるだらうと思つて、やにはにギュッと急所を突きました。すると、ブル〳〵と手足をふるはして、流石の大猪もバッタリそこへ倒れました。

『存外脆いものだな。』

『しかし、獣はよく虚死をするものだと聞いてゐましたから、私は油斷をしずに急いで短刀を持ちなほすと、とゞめを刺すつもりで、腹をスーッと裂いて行きました。すると、中からオギャア〳〵と云ひながら、子が十六匹飛び出して來ました。

『十六匹？』

『えゝ、しゝの十六……。』

『冗談を云つてはいけない。しかし、をかしいな。さつきお前は雄の大猪が荒れて來たと云つたぢやアないか。雄が子供を生んだのかい。』

『あゝ、成程、すつかり忘れてゐました。こいつはいけない。旦那、さやうなら。』流石の彌次郎も、これには閉口して、ソヽクサと下駄を突ッかけるが早いか、ガラ〳〵ピシャッと格子をあけて表へ飛んで出たかと思ふと、どこへか見えなくなつてしまひました。

ハハハ……。

ハハハ……。

一頁小話

天邪鬼

佐文郎

弘法大師様は四國の國々をお廻りになつてゐましたが、ある時、金龍山といふ山の中にさしかゝりました。

すつかり日は暮れてしまつたのに、泊る家もないので、野宿をしやうと決心なすつて、大きな松の樹の根元に腰をお下しになりました。

すると、その時、ひよいと何か大師様の前に飛出した化物がありました。

よく見ると、それは天邪鬼といふ意地曲りの鬼でした。

『おい、坊主。この山を誰の山だと思ふ。お前は初めてこゝへ來たので知るまいが、これは俺の山なのだぞ。俺のゆるしなしには誰だつて此の山へ置くことはならないのだ。さア他所へ行け。行かなければ八ツ裂きにしてくれるから。』といつて、鋭い爪を出してにらみつけました。

併し、大師様は少しも恐れずに、

『それはすまない事をしました。ではすぐにこの山を去りますが、何をいふにも路は遠いし、それにもう日も暮れてしまつたし、この通り雨で衣もぬれてゐるから、衣を乾す場所だけ貸して下さい。』

と、丁寧にお頼みになりました。

さすが意地曲りの天邪鬼も、大師様があまり丁寧に頼むものですから仕方なく、

『では、衣をほす場處だけだぞ。それ以上は決して貸すことはならないぞ。』といつて、そのまゝ行つてしまひました。

大師様はその後で考へました。

『天邪鬼は悪いことばかりしてゐるから懲してやらう。』さうお思ひになつて、国の下に座禪をくんで、咒文をお唱へになると、忽ち山中の樹といふ樹に一ぱい衣が乾されてしまひました。

翌朝早く天邪鬼がやつて來ました。見ると山中に何處にも衣が乾してあるので、びつくりして、

『おや〳〵坊主め、よくもおれの山をとつたな。』と叫んで、いきなり大師様に飛びかゝらうとしますので、大師様は、

『天邪鬼さん、私は殺される前にお前さんの偉い力を見せてもらひたいのだが、一つ此の山だけの大さになつてくれませんか。』と、いひました。

『よし。』と天邪鬼は答へましたが、右といへば左、左といへば右といふ意地曲りの天邪鬼のことですから、山だけの大さになる代りに小ちやな〳〵ケシ粒ほどになりましたので、大師様はひよいとつまみ上げて持つてゐた鐵鉢（坊さんが手に持つて歩くもの）の中にふせて地面に埋けて了ひました。

天邪鬼は鐵鉢の下でどんなに暴れたことでせう。しかし、それ以來再び地上へ出ることがなくなつたので、旅人たちは安心して山を越すことが出來るやうになりました。（四國の傳說）

ドン・キホーテ繪物語

水島爾保布

（五）

その宿屋の亭主といふのは飛んだ劇甲者でありました。ドン・キホーテが自分のことを城主と呼ぶのでわざと城主のやうなしかつべらしい顔をして挨拶をしました。そして自分も若い時には矢張貴殿のやうに武者修行に出て惡魔の城を攻撃したり化物を退治したりしたなぞと、出放題の嘘つぱちをならべ立てたので、ドン・キホーテはすつかり感心して了ひました。

『御城主がさういふ名譽の方でゐらせられることは、某にとつてこの上もない幸ひで御座ります。何うか御城主のお手をもつて、某に騎士の稱號を授け下さい。今晩某は古への勇士の作法に從つて武器の見張りをいたすで御座りませう。』と、亭主の前へひれ伏してかう頼みました。

『如何にも承知いたして御座る。』と亭主は嚴に約束をしました。

（六）

ドン・キホーテはその夜は裏の廣庭の井戸の側に自分の鎧をおいてその見張りをして居りますと、泊合せた馬方の一人が馬に水をやらうと井戸の側へやつて來ました。見ると水槽の上には鎧がのせてあるので、いきなりそれをドサリと地面へ拋り出しました。

それを見たドン・キホーテは髮の毛が逆立つばかりに怒りました。

『無禮ものめが！』と、叫ぶと一しよに、手にしてゐた長い槍でもつて、その馬方の頭をガンといふ程撲りつけました。

この物音に驚いて、宿屋の亭主をはじめ泊り客の一同がドヤ〳〵とかけつけました。亭主はブンブン怒つてゐるドン・キホーテを和めて、武器の見張りはもう充分に見屆けたから、直ぐとこの場で騎士の稱號を授けようといひました。そしてドン・キホーテを庭に跪かせ、二人の女中に蠟燭をもたせて、自分は帳場に備へた大きな帳面をひろげ、口のうちで何か讀むまねをしながら、鈍でドン・キホーテの肩を峰打ちにしました。ドン・キホーテはかうして天下晴れての騎士になつたのでありました。

（七）

さて宿屋の亭主の城主は騎士ドン・キホーテにかうきゝました。

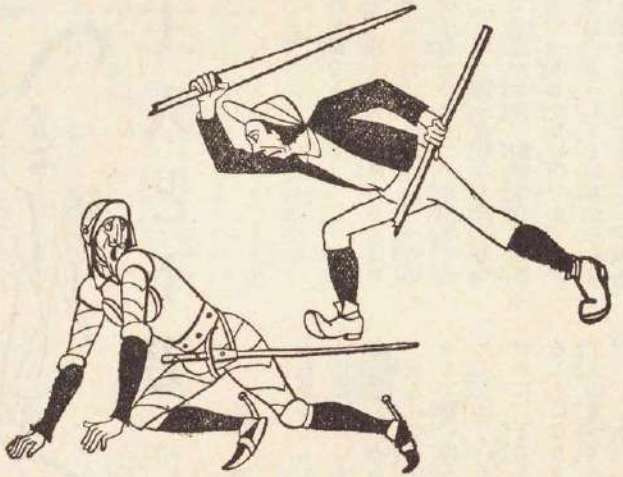
『貴殿は金子を御所持で御座るか。』

『某は一文半錢も持ち合せては居りませぬ。武者修行が錢金を携へてゐたなぞといふ事は、如何なる物語にも出ては居りませぬ。』と、ドン・キホーテは落着き拂つて答へました。

『いやそれはいけない。たとへ武士にせよ商人にせよ旅を致すほどの者は、金子はもとより薬膏のシヤツ位は御用意なされぬといふことは御座らぬ。』と、亭主は忠告しました。

ドン・キホーテはその場から直に出立する事になりましたが、城主からかういはれた言葉が氣にかゝつたので、一旦家へ引返し、シヤツその他のものを調へ、一人ぐらゐの家來も雇ひ入れた上で、本當の騎士としての旅に出ようと決めました。そしてもとの路を自分の村へ向つて引返しました。

しばらくしてドン・キホーテは日傘をかざしながら馬に乘つた旅の絹商人の一群に出會ひました。ドン・キホーテはその一群を自分と同じ旅の武士だと思つたので、槍をかまへ槍を差上げて大聲で呼びかけました。



（八）

『ラ・マンチヤの女王トボソのダルシニア姫を世界隨一の美人であるとお贊ひなされ。さもなくばこの道をお通し申すことまかりならぬ。』と、威猛高になつてかういひました。

『ダルシニア姫なんてそんな方は手前ども一向存じませぬ。』と、商人は取り合ひませんでした。そしてドン・キホーテを氣狂ひあつかひにして面白半分いろんな事をいつてからかひました。ドン・キホーテは烈火のやうに怒つて槍をしごいて突きかけましたが、生憎にも愛馬のロシナンテが石に躓いて前足を折つたので、いやといふ程地面へ叩きつけられました。商人に從つてゐた馬丁の一人はドン・キホーテの槍を引たくつて二つに折つべし折つて、その片方を獲物にして、まるで麥でも叩くやうにひつぱたいて、その儘どこかへ行つて了ひました。

へとへとになる迄デチのめされたドン・キホーテは、折よくそこを通りかゝた同じ村の百姓に助けられて、その日の夕ぐれに自分の村へ歸りつきました。（つづく）

主人と下男

藤森淳三

一

朝鮮のお話であります。

むかし、或る田舎に大層けちんぼな男がありました。その家には、一人の片輪者の下男がゐました。片輪者と云つてもこれは、隨分奇妙な人間もあつたもので、顔が半分、胴が半分、おまけに足まで一本しかないのです。だから、村では、どうしてその家がそんな片輪者を使つてゐるのだらうと不審がらぬ者もない位でしたが、實を云ふとお給金をやらないでも濟むので、けちんぼな主人はまアそんな下男でも我慢して使つてゐるのでした。

或る年のことでした。かねゞ〳〵出世をして都の役人になりたいと思つてゐた主人は、いよ〳〵その試驗を受けるために、下男を伴れて都へ旅立ちをすることになりました。片輪者の下男は主人の乘つてゐる驢馬の口取りをして行きました。

さうして、家を出て幾日目かに都近くまで來た時のことです。恰度お午頃でしたから主人は、

『おい〳〵、俺はあすこの茶店でしばらく休むから、お前は驢馬の番をしてゐて呉れ。』

さう云つて、驢馬から下りると、早やすんすん茶店の中へ入つてしまひました。

下男はぢつと主人の後ろ姿を見てゐましたが、やがて恨めしげにぶつ〳〵と何か呟いてゐました。それも道理、いつも主人は自分は一日に三度食事をするのですが、下男には朝と晩の二度しか食べさせないのでした。

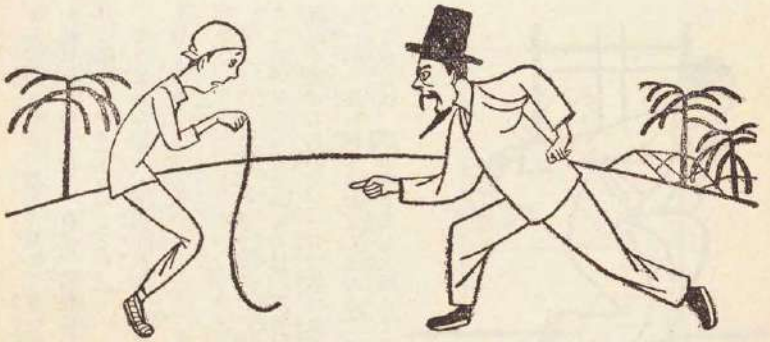
『屹度、主人はお酒を呑んでゐるのに違ひない……』さう思ふと、下男はむ

ら〳〵と癪に障つて來ました。けちんぼで、自分はお酒まで呑んで、召使には食事もとらせない主人が憎らしくなつて來ました。

『さうだ、それがいゝ。』

何んと思つたのか、下男はさう獨りごとを云ふと、急いで驢馬を市場へ牽いて行きました。そして、その驢馬を賣拂つてしまふと、そのお金で飽腹飲んだり食べたりしました。

さて、さうしてお腹がいつぱいになると、下男は非常にいゝ氣持になつて來ました。ぶら〳〵と、やがて主人のゐる茶店の近くへ戻つて來ましたが、主人はまだ中で食事をしてゐるやうです。前の小高い丘には、若草が青々として如何にも春らしい、のどかな景色です。下男はさつき賣つた驢馬の手綱だけを持つて、その丘へ上ると、草の上へ寢ました。そして間もなく、大鼾で寢入つてしまひました。



こちらは主人です。下男の姿が見えないものですから、何處へ行つたのだらうと思ひながら、ふと丘を見上げると、下男はそこで午睡をしてゐます。が、不審なことには、驢馬は一向影も形も見えません。驚いて、主人は丘を駈け上ると、

『こらッ！　起きろ！　起きろ！　驢馬はどうしたんだ？』

と、大聲にどなりながら、思ひきり下男のからだを蹴りつけました。

下男は吃驚したやうに、剽輕に跳ね起きると、手に握つてゐた手綱を振つて見せて、

『おや、どうしたんだらう？　驢馬は何處へ行つたんだらう？　私はこの通り、ちやんと手綱を摑んでゐたんですが——實はあまりお腹が空いたのでつひ眠つてしまつたんです。あゝ、あゝ、驢馬よ、出て來て呉れよう。』

と、云ひながら、あたりをうろ〳〵と

歩き廻つて、やがて草の上に坐り込んで、「おゝ〳〵、おゝ〳〵」と泣き出しました。

主人はもう、今にも下男を手討にしかねないばかりの見幕で、怒り立てました。

で、下男はそッと下から主人の顔を見上げながら、

『全く私の麁相でございますから、これから探してみます。日が暮れようとどうならうと、屹度探してみます。ですから、どうぞ命ばかりはお助けなすつて下さい。』

と云ふなり、早や立ち上つて走り出さうとしました。

主人は、まさかそれが謀りごととは氣がつきませんから、

『待て〳〵。貴樣はよく〳〵馬鹿な奴だ。今頃探したつて、わかる筈がないぢやないか。そんな無駄骨を折るよりも、もう仕出來したことは仕方がないから、早く代りの驢馬を買つて都へ行かねばならぬ。あゝ、實際、馬鹿につける藥はないッてこのことだ。』

そう云ひながら、下男を伴れてしほしほと丘を下りました。

二

主人と下男とは都へ着きました。がさてあの日からと云ふものは、下男は驢馬を逃がした罰で、一日二度の食事を一日一度に減らされてしまひました

これには、流石の下男も大弱りです

一日二度でさへお腹が空いて堪りませんのに、まだその上一度に減らされたのですもの、饑じくて〳〵辛抱も何も出來ませんでした。

主人は毎日勉強に一生懸命でした。もうぢきに試驗だと云ふので、夜もおちち〳〵眠らない位でした。今日も下男を呼ぶと、

『俺は勉強ばかりしてゐるのでお腹が空いて困るから、お粥を一椀買つて來て呉れ。』と云ひました。

今はどうか知りませんが、朝鮮では昔、お粥を賞つてゐたものと見えます——下男は早速、主人から云ひつかつた通りお粥を買ひに行きましたが、その歸りみち、それが食べたくて堪らなくなりました。『主人は自分だけ食べて俺には食べさせて呉れない……』さう思ふと、腹が立つて來ました。

そこでまた、下男は忽ちうまいことを思ひつきました。何んと思つたのか家へ入ると泣きながら主人の部屋へまゐりました。

主人はそれを見ると、

『なぜ泣いてゐるのだ？　何か理由があるのか。』と訊ねました。

すると下男は、憐れつぽい聲を出して、

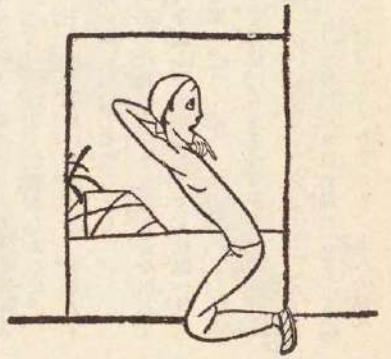
『はい、申譯のないことを致したのでございます。實は昨晩から風邪をひいてをるのですが、さつき歸りみちで、つひお粥の中へ鼻汁を落しましたので——どうぞ、御勘辨なすつて下さい。』

『何んだ？　鼻汁を粥の中へ落したと云ふのか。貴樣は何んといふのろまだ。そんな汚ないものが食へると思ふか、馬鹿ッ！　捨てッちまへ。』

主人はぷん〳〵怒つて、さう云ひました。

『どうも申譯のないことでして——はい、それでは捨てゝしまひます。』

下男は主人の部屋から出ると、ペロ



ッと舌を出して、そのお粥をうまさうに食べるのでした。

こんな惡いことが引續いて起つたためか、主人は不吉の神に取憑かれたといふわけでもないでせうが、間もなく役人の試驗には見事落第しました。さうなると、また主人は下男に當り散らしました。

『あの片輪め！　あいつのために運わるく落第したんだ。あいつめ、どうして呉れよう！』と、そればかり思案してゐました。

或る日、主人は下男を呼びました。

『おい〳〵、俺はまだ都に用があるから、お前はさきに歸つて呉れ。』

さう云つて、それから下男の脊中へは、「此奴めのために試驗は落第し、途中いろんなことでお金もたくさん費つた。だから、歸つたらすぐ籠に詰めて川へ沈めてしまへ。」と墨で書きました。

『いゝか。わかつたか。家へ歸つたら脊中を見せるんだぞ、大切な用事が書いてあるんだから——』

主人は下男に幾度もさう云つて、念を押すのでした。

三

さて、下男は歸るみち〳〵、一人旅で非常に暢氣ではありますが、たゞ氣掛りなのは脊中の文字でした。

『一體何んと書いてあるのだらう？

多分主人は、自分によくないことを書いたのに違ひない……』下男はさう思つたものですから、折よく通りかゝつた人に、背中を見て貰ふと、大へんです。そこで、その文字を消して、あらたに「此奴のためにいろ〳〵仕合せなことがあつた。家へ歸つたら財産を半分やるがいゝ。」と書いて貰ひました。そして下男は、元氣よく主人の家に歸つて來ました。

主人の妻は、下男の背中の文字を見ると、もちろん不審に思ひました。『どうして主人がそんなことを書いてよこしたのか、いくら何んでもこんな片輪者に財産を半分やれと云ふのは、何かの間違ひに決つてゐる。これには屹度何か理由があるに相違ない……』さう思ひましたから、兎に角主人が歸つてからといふので、下男にはいゝ加減なことを云つて、一日延ばしに延ばしてゐました。

五六日經つと、主人はしよんぼり歸つて來ました。主人は家へ入るとすぐ片輪者の下男の姿を見たものですからいきなり不機嫌な顏になつて、

『どうして、あいつを生かして置くんだ？』と、妻に叱りつけました。

妻はまた妻で、一向何んのことかわかりません。あべこべに自分の方から訊ねようと思つてゐた矢先きですから

『だつて、あなたはあいつめに財産を半分やれと、仰有つたぢやありませんか。』と、怪訝さうな顏をしました。

主人は一部始終を聞くと、見る〳〵眞ッ赤になつて呶鳴りました。

『あの片輪め！　また猿智慧を出して人を騙しやアがつた。すぐ此處へ伴れて來い。』

下男は、もうさつきから『おゝ〳〵おゝ〳〵。』と泣いてゐました。そして

『どうぞ命ばかりはお助けなすつて。』

と泣きじやくりながら、主人の前へ出ました。

しかし主人は、

『えいッ、貴樣のために俺は損ばかりした。さあ、これから川へ捨てゝやるから、さう思へ。』

と云ひながら、一本しかない手や足をぴん〳〵振つてもがいてゐる下男を無理無體にその場へ引き据えてから、用意の葛籠の中へ詰め込んでしまひました。

それから主人は、妻といつしよにその葛籠を擔いで、川へやつて來ました。見ると、恰度いゝ具合に、川べりには大きな柳の木がありました。で、その枝へ葛籠を括りつけました。

『よし〳〵、これでいゝ。もう今日は間もなく日が暮れるから、明日の朝やつて來て、葛籠の繩を切つてやらう。さうすれば、二度と再び此奴の顏を見ないでも濟むと云ふものさ。』

主人は妻とそんなことを話しながら

家へ歸つて來ました。

ところが、主人が川から歸つたその後のことでした。村でも評判の、心のふくない目腐され婆さんが、折柄川べりを通りかゝつて、柳の枝に吊してある奇好な葛籠を見つけました。

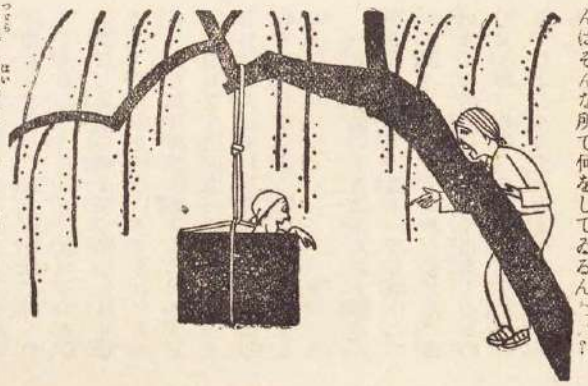
『ほう、へんなものがあるぞ。何んだか中に人がゐるやうぢやないか。』

目腐され婆さんはさう獨りごとを云つて、その葛籠の中を覗き込みました。

片輪の下男は、もうすつかり泣き疲れてゐましたが、それでもよつほど大膽な奴と見えて、うと〳〵と一と眠りしてゐたのでした。ふとその時、人の聲に目を醒しました。

見ると、評判の目腐され婆さんです。如何にも不審らしい顏附で、葛籠を見てゐるのです。――智慧者の下男はまた、咄嗟に何か思ひついたやうでした。

『お婆さん、今日は！』何氣ない調子で、さう聲を掛けました。



『はい、今日は！』

婆さんもそれに答へて、『時にお前さんはそんな所で何をしてゐるんだい？』

葛籠へ入つたりしてさ。』

すると下男は、にこ〳〵と笑ひながら、

『俺かね、俺はお呪ひをしてゐるのさ。實は此間中俺は主人のお供をして都へ行つてをつたが、途中で目を病つてね、いろ〳〵と治療をしてみたがなほらない。ところが、何んでも和尚樣の話では、此處でかうやつて川の水を眺めてゐると、どんな眼の病もよくなるッてお呪ひがあるさうだ。だから、かうやつてゐるのさ。』

『へえ、さうかねえ。』

婆さんは釣り込まれて、感心したやうにさう云つて『わたしは初めて聞いたよ。結構なお呪ひだねえ。それで眼の具合はどうかね。』

『それア、むろんいゝよ。昨日までは靄がかゝつたやうで何一つ見えなかつたが、今日はだいぶよくなつた。かうしてゐても、川の底にある小石がはつきり數へられる位だからねえ。』

目腐され婆さんは、ます〳〵感心しました。そして、自分もその葛籠へ入

つて、眼をなほしたいと思ひだしました。で、

『おたのみたが、わしにその葛籠を貸して貰へまいか。』と云ひました。

片輪の下男は、まんまと婆さんが自分の手に乗つたのを、心ではほく〳〵喜ひながらも、しかし、

『ふむ、そんなにたのむのなら、しばらく代つて上げよう。だが、ほんの一寸の間だけだよ。』

と、さも勿體らしくさう云つて、早速婆さんに縄を解いて貰ふと、今度は婆さんを葛籠へ入れて、元通りにしつかりとその枝に括りつけました。

『ぢやァ、お婆さん。俺は明日の朝早く來るからねえ。その時になつたら代るんだよ。』

『有難う、有難う。お蔭でわしの眼もよくなるだらう。』

下男は、婆さんのその聲を聞き捨てて、すぐ何處かへ見えなくなつてしまひました。

四

翌くる日になりました。主人の家では起きるとすぐ、主人が自分で川へやつて來ました。そして、物も云はずにいきなり葛籠の縄を切つたから堪りません。下男の身代りにさせられたあの何も知らぬ目腐され婆さんは、アッと云ふ間もなく川の底へ沈んでしまひました。主人はそれを見届けると、はじめて安心したやうに家へ歸つて來ました。

一方、片輪の下男はまんまと婆さんを身代りにして、遠くへでも逃げたのかと思ふと、さうではありません。何處までこの男は圖々しく出來てゐるのでせうか、その二日目、平氣な顔をして、ひよつくり主人の家へ姿を現しました。

家の者の驚きは云ふまでもありません。主人は呆氣にとられたまゝ、ほかんと口を開けて、目をきよろつかせて下男を眺めてゐますし、妻は妻で、てつきり下男の幽靈だと思ひ込んだのでせう。ぶる〳〵と慄へだしました。

しかし下男は落着いたものです。にこ〳〵と笑ひながら、

『いや、御主人樣。そんなに吃驚なさるにも及びません。私は別に怪しいものぢやありません。實は昨日、葛籠へ入つて川へ沈んだお蔭で龍宮へ行きました。ところが、龍宮では大へん私をもてなして呉れましたが、それにつけても、御主人樣の御恩を忘れることが出來ず、只今お迎へに、參つたわけです。』

と、如何にも丁寧な言葉で、出鱈目なことを云ひました。

主人は重ね〳〵の不思議に初めは夢かとばかり驚きましたが、しかし夢ではありません。しかも今度ばかりは、下男の云ふことをほんたうだと思はね

ばなりませんでした。何しろ、昨日川へ沈んで死んだ筈の下男が、今自分の前に立つてゐるのですもの、主人が下男の言葉を信じたのも無理がありませんでした。

『どうです？　御主人樣。龍宮へおいでになれば、どんなものだつてありますよ。たくさんな寶物や、お金や、それから御馳走も食べ放題なんです。』

下男は調子に乘つてます〳〵出鱈目を並べたてました。

もと〳〵けちんぼで慾深の主人は、今はもう少しも下男を疑はないで、だん〳〵その言葉に耳を傾けだしました。

『龍宮といふ所は話には聞いてゐるがなるほどいゝ所らしい。俺はこの年になつて、役人の試驗にも落第した。かうなつてみると、このまゝこの田舍で面白くない暮しをするよりも、いつそのこと、下男の云ふ通り龍宮へ行つて一生安樂に暮した方がいゝ。それがいい……』たうとう、主人はさう考へを決めました。

可哀想に主人は、慾が深かつたばかりに、また馬鹿だつたばかりに、下男の言葉をほんとうにして、妻や子供を伴れて龍宮へ行くことになりました。

その日の夕方、一昨日下男が主人にされたと同じやうに、三つの葛籠が川のそばの、あの柳の枝に吊されました。その三つの葛籠と云ふのは、一つは主人、もう一つは妻、そして殘りのもう一つには二人の子供が入つてゐるのでした。

『恰度この柳の木の下が龍宮へ行く道になつてゐます。私はもうよく道を知つてゐますから、後から行きます。では、一と足お先きへおいでになつて下さい。』

下男は川べりに立つて、葛籠の中の主人にさう云ひました。

そして、『ぢやァ、お前は後から來るがいゝ。』

と答へた主人の言葉が終るか終らないうちに、下男は先づ主人の葛籠の縄を切りました。

次に妻の葛籠、子供の葛籠といふ順に、忽ちのうちに、みな、縄を切りました。

どぶん、どぶん、どぶん、――高い水音を立てゝ、葛籠は川の底へ沈んでしまひました。

三つの葛籠は、何處へ行つたのでせうか。

下男の云つた通り、ほんたうに龍宮へ行きましたか知ら？　ことによると行つたかも知れません。

それにしてもあの智慧者の片輪の下男は、その後どうしたでせうか。それも作者にははつきりわかりません。

（をはり）

蜘蛛が雲を生んだ話

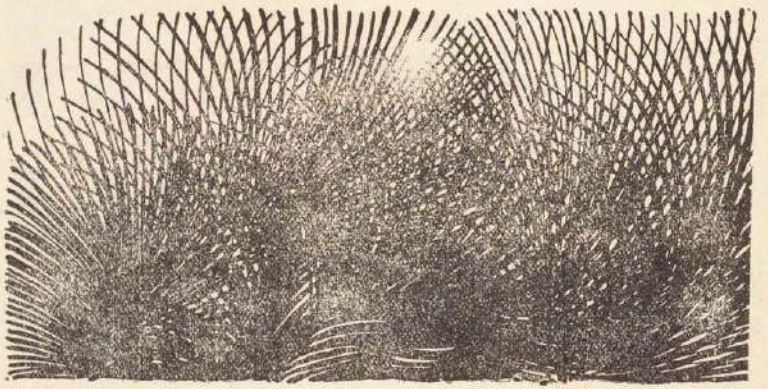
藤澤衛彦

與作といふ、或山の方の農夫が、畑で一生懸命仕事して居ると、すぐそこの川縁の木蔭から、

『助けてくれえ、助けてくれえ。』と叫ぶものがありますので、與作は、鍬をかついだまんま、かけ出して行つてみましたが、おかしな事に、そこらには、誰も居ないので、

『これはどうしたことだ、だれが、おれをだましたんだ。』と獨語しながら、自分の畑の方へ歸つて行かうとすると、今度は、すぐそこの叢から、いやな聲が聞えて來ました。駈けつけて、のぞいてみると、一匹の蛇が、一匹の蜘蛛を、今將に、食ひ殺さうとするところでした。與作は、ふと、

『もしかすると、此蜘蛛が助けを叫んだのかもしれない。』と、思ひましたので、鍬を打下ろして、其蛇をおどかしました。蛇は驚いて、逃げて行きました。蜘蛛は心なしか、その足で拜むやうな格好をしてから、こそ〳〵と逃げ出してゆきました。



その日の夕方、與作は、川縁であつた事件などは、とうに忘れながら、夕飯を食べて居りました。すると、だれかしらん、とん〳〵と、表の戸を叩いて、

『與作さん、與作さん。』といふものがあります。

『なんだい、今頃だれだね。』

といひながら、與作が表の戸を開けると、ついぞ見たことのない可愛らしい娘なので、與作がたまげて居りますと、

『私、あなたの所に、機を織りに來ました。』と、その女が申しました。

『はて、だれからたのまれて來たのかね。』と、與作が申しますと、

『峠の茶屋にたのんだことがあるでせうが。』と、女が申しました。

なるほど、考へてみると、いつかお茶屋の亭主に、女手がないで困るといふことをこぼしたことがあるので、それを思ひ出しました。すると、女は與作の心をちやんと知つてるやうに、

『その時、あなたは、機の織れるやうな、女が一人ほしいと言はなかつたかね。』と、又、たづねました。

『さうだ、そんなことをいつたことがある。』と、與作が申しますと、

『それで、私が來たのですよ。』と、女が申しました。

『それではまあ、よろしくおたのみ申します。』と、その日から、與作は、其女を家に置きました。

ところが、その女の働くことゝいつたら、とてつもない働き手で、機を織らせると一日のうちに、定つて八反織るので、

『偉い女だが、一體、まあ、どんなにして、お前はこの機を織るのかね。』と、與作がたづねましたら、

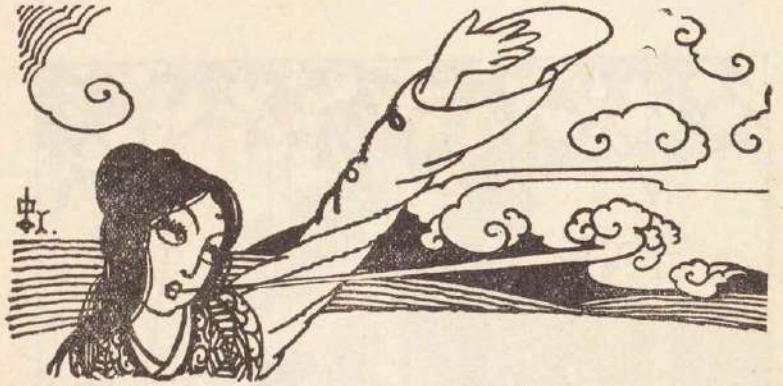
『それを聞いてはいけません。それに、私が機を織るところを、これからも決してのぞいてみてはこまりますよ。』と、女が申しました。

『なるほど、さう言はれゝば、まだ一度も、機を織つてるところは見ないのだが、一體、これほどの機を、どんなことをして織るのだらう。』と、見てはいけないと注意されてから、與作は却つてそれが見たくなり、或日、そつと家に歸つて、機場をのぞきみしましたら、女は口から絲を吐きながら、八本の手で機を織つてるので、それではこれこそ、いつか助けてやつた蜘蛛の、恩返へしに來て居るのだらうと、與作は思ひました。それで、與作は、

『かあいさうに、絲が足りないので、自分のお腹の絲まで出して足して居るんだ。あしたは、村中を歩いて、澤山綿を仕入れて來て、絲を紡いでもらふことにしよう。』と

その翌日は、朝早く、畑へは行かずに、山を越した向ふの村まで、綿を集めに參りました。

與作が澤山の綿を背負つて、山から歸つて來ました時、兼て、作與に怨みをもつて居た蛇は、木の上から與作の歸るのを見て居て、與作が、木の下を通りかゝつた時、



そつと、與作の綿の中に忍び込みました。

そんなこととは知らない與作は、それを、機場にかつぎ込むと、翌日は、又、畑に出かけてゆきました。

蜘蛛の女は、與作が綿をもつて來てくれたのを喜んで、それを紡ぐ代りに、どんどん食べ出しました。

大概、食べてしまつた時に、綿の中に蛇が居ることに氣が付いて驚いて窓から逃げ出しました。蛇はその後をどん〳〵追ひかけました。逃げ場に困つた蜘蛛は、一生懸命の力で、口から絲を思ひきり遠くに投げかけました。

長い〳〵蜘蛛の絲は、天までとゞきました。天の神樣は、かあいさうに思つて、その蜘蛛の絲をひつぱつてやりましたので、蜘蛛は、天にのぼつて蛇の難から免れることが出來ました。

『神樣、どうもありがたうございました。』

と、その後、蜘蛛がお禮をいつて歸らうとしますと、

『さて〳〵、お前も幸福の奴ぢや、これを緣に、又、たび〳〵天に來るがいゝ。』といつて、空に蜘蛛の網をかけることをお許しになりました。これで、蜘蛛も、何かお禮のしるしにと、與作のとこで、食べて來た綿を吐き出して神樣に差上げました。

いまでも、天にある雲は、その時、蜘蛛が、お禮に置いていつた綿がそのはじまりだといふことです。（をはり）

馬車屋と雀

中島孤島

（一）

あるところに一匹の番犬がありました。飼主の羊飼がわるい人で、食物を充分にくれなかつたので、番犬もとゝ〳〵辛抱がしきれなくなつて、ある日主人のうちを逃げ出して、悲しさうに、のそのそと歩いて來ました。

途中で雀にあふと、雀がかういひました。

『犬さん、君はなんでそんなに悲しさうな顔をしてゐるんだい？』

『僕は腹がへつてたまらないんだが、なにも食ふものがなくつて困つてゐるのさ？』

それを聞いて雀がかういつた。

『ちやァ僕と一しよに町へおいで、腹一ぱい食べさしてあげるから』

そこでふたりは町へ行きました。そして肉屋の店さきまで來ると、雀が犬にかういひました。

『ちよいとそこに待つといで、肉を一きれおとしてあげるから』

そして店へとびこんで行つて、だれも見てゐないのを見さだめて、窓の上につるしてあつた牛の股をつゝいたり、ひつぱつたりしてゐたが、たうとうしまひに敷石の上へおつことしてしまひました。

それを見ると、犬はすぐひつたくつて、隅の方へくはへて行つてみんな食べてしまひました。

それがすむと、雀はまた犬のそばへよつてかういひました。

『さァ、今度はほかの店へ行つて、もう一きれとつてあげよう、さうしたら腹一ぱいになるだらうから』

で、犬が二番目の肉を食つてしまふと、雀はまたかうたづねました。

『犬さん、もう澤山かね』

『あゝ、肉はもう充分だが、まだパンを食べなかつた』と犬が答へました。

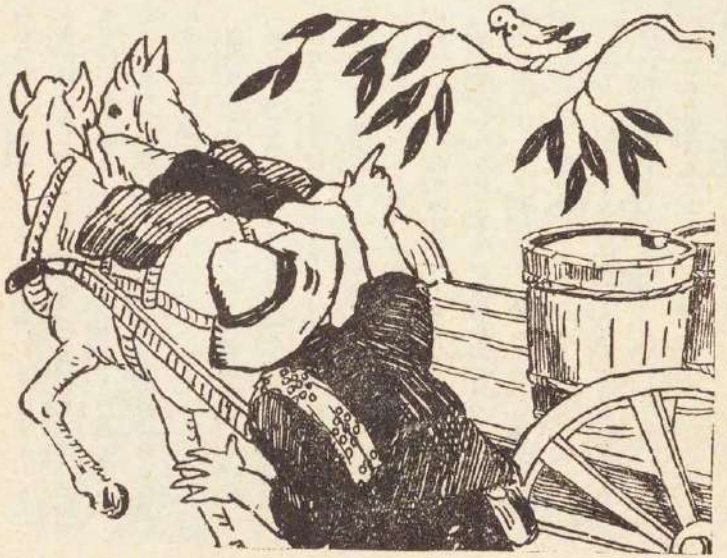
『ちやァ、一しよにおいで』と雀が言つた『パンを食べさせてあげるから』

かういつて雀はパン屋の店へとんで行つて、パンを入れた箱の中から、大きな塊を二つ啄きおとしてやりました。そして犬がパンを食べてしまふと、またほかのゞ

ン星へ行つて、もう二つおとしてやりました。
それから雀は犬に向つていひました。
『犬さん、もうこれで十分だらうね？』
『あゝ、もう十分だ！』と犬は滿足したやうにいひました。『これから少し町の外を散歩して見ようか？』
そこで雀と犬はつれ立つて街道の方へ出て行きました
けれどもその日は大へんにあつい日だつたので、少しばかり歩くと、犬はぢきにかういひ出しました。
『僕はくたびれたから、こゝで一ねむりして行きたいなア』
『いゝとも』と雀は答へた。『そこで一ねむりおしよ、僕は枝の上へとまつて番をしてゐるから』
犬は往來の眞中へ長くなつて、いゝ心持にぐう〳〵とねてしまひました。

（二）

暫くするとひとりの運送曳が、三頭曳の荷馬車へ、酒樽を二つ積んでやつて來ました。雀は運送曳が道をよけようとせずに、犬のねてゐる上をまつすぐに通らうとするのを見て、上からかういひました。
『馬車屋さん、犬をひかないようにおしよ、ひいたらお前を貧乏にしてやるから』
けれども運送曳は口のうちでつぶやいた。
『なんだと、おれを貧乏にする！』
いひながら、ピシヤンと鞭をくれて、馬をまつすぐに走らせたので、馬車はガタリと一ゆれゆれて、そのまゝ犬をひき殺して行きました。
それを見ると、雀は木の上からかう叫びました。
『馬車屋さん、お前は僕の兄弟をひき殺した、その代りにお前は馬をなくすだらう』
『なんだと、馬をなくすつて？』と運送曳がいつた。『へンお前つちになにが出來るんだい？』かういつてすんずん行つてしまひました。
すると雀はパッと馬車の上へ下りて、ヒョイと車のほろの下へとびこんで行つて、一つの酒樽の栓のところをコッ〳〵とつゝいてゐましたがたうとうしまひに栓がぬけて、運送曳の知らない間に、酒がみんな流れ出して



しまひました。
少したつて運送曳はひょいとうしろを向くと、車から酒かたれてゐるので、樽をしらべて見ると、一つの方が空になつてゐた。
『おや！』と運送曳はびつくりしたやうな聲を立てた。
『こりやァなんたうに貧乏鬮を引いちまつたぞ！』
すると頭の上で、
『もつと貧乏にしてやるよ』
といふ聲がきこへたかと思ふと、雀がパッと一頭の馬の頭の上へ飛びおりて來て、馬の目玉をつゝきはじめました。
運送曳はそれを見ると、いきなり煉瓦のかけをひろつて、雀へ投げつけたが、雀がパッと木の上へ飛んでしまつたので、煉瓦は馬の頭へぶつかつて、馬を殺してしまひました。
『おや！』と運送曳はびつくりしたやうに叫んだ。『こりやァいよ〳〵貧乏鬮をひいちまつたぞ！』
すると又頭の上で、

『もつと！〳〵貧乏にしてやるよ！』
と雀がいひました。そして運送屋が二頭の馬に車を曳かせて行くあとから、雀はまたほろの下へとび込んで行つて、もう一つの樽の栓を抜いたので、中の酒はみんな流れ出してしまひました。
運送屋はそれを見るとまたかう叫び出した。
『おや！　こりやァほんたうに貧乏になつちまつたぞ！』
けれども雀は頭の上でまたかういつた。
『もつと〳〵貧乏にしてやるよ！』
いひながら、パッと飛びおりて來て、二番目の馬の頭へとまつて、また兩方の目をつゝき出しました。
運送屋はそれを見てもう一度煉瓦のかけをひろつて、雀に投げつけたが、雀がパッと飛んだので、煉瓦は馬の頭へあたつて、馬を殺してしまひました。
『おや！　いよ〳〵おれは貧乏人だ！』と運送屋がなさけないやうな聲を立てました。
けれども雀はまたかういつた。
『もつと〳〵貧乏にしてやるよ！』

いひながら、今度は三番目の馬の頭へとまつて、また兩方の目をつゝきはじめました。
運送屋は氣ちがいのやうになつて、夢中に馬車の上から小さな手斧を取るや否や、雀に向つて投げつけたが、またやりそこなつて手斧は馬の頭へあたつて、たうとう一つきり殘つた馬を殺してしまひました。
『しまつた！』と運送屋はくやしさうに叫びました。『いよ〳〵種なしにしちつまた！』
『まだ〳〵』と雀が頭の上でいひました『さァこれからうちへ行つて、もつと貧乏にしてやるから』
かういつて、雀はパッと飛んで行つてしまひました。

（三）

運送屋は馬を三頭とも殺してしまつたので、仕方なしに馬車を往來へはうつておいて、ぷん〳〵と怒りながら、うちへかへつて來ました。そしておかみさんの顏を見ると、かういつた。
『あゝ〳〵とんだ目にあつちまつた！　酒はこぼしてしまふし、馬は三頭とも種なしにしてしまつた。』

するとおかみさんはそれには返事もせずにいひました
『まァあなた、ほんたうに憎らしい雀があつたものぢやありませんか。ありつたけの仲間をつれて來て、うちの麥畑へおりて、麥の穗を片つぱしから食つてるますよ。』
運送屋はびつくりして畑へ行つて見ると、幾萬といふほどの小鳥が、自分の畑へおりて、みんなして麥をたべてゐました。そしてその眞中に立つてゐるのは、見おぼえのあるさづきの雀でした。
『やれ〳〵！　これでたうとう食ふものまでなくなつてしまつた！』
すると雀はまた頭の上へ飛んで來てかういひました。
『また〳〵もつと貧乏にしてやるよ。お前の命もとつてやるよ。』
さういつたかと思ふと雀はパーッと飛んで行つてしまひました。
運送屋はなにもかも根こそぎなくなつてしまつたので、うちへはひると、臺所の隅ッこの、竈の前へほんやり坐りこんで、口もきかずに考へこんでをりました。

すると雀は窓の敷居へとまつて、外からかうさへづりました。

『馬車屋さん、馬車屋さん、お前の命もとつてやるよ！』

それを聞くと、運送曳はいきなり斧をつかんで雀に投げつけた。けれどもそれは窓へあたつて、窓ガラスを打こはしたゞけで、雀には傷もつきませんでした。

そのうちに雀はピョン〳〵とうちの中へとびこんで來て、今度は竈の上へとまつてまたさへづりました。

『馬車屋さん、馬車屋さん、お前の命もとつてやるよ！』

運送曳はいよ〳〵腹を立てゝ、また斧を投げつけたが、今度は竈をまつ二つに割つたゞけでした。

それからはまるで氣ちがひのやうになつて、ピョンピョンとうち中を逃げまはる雀のあとをおひまはしながら、斧をふるつて、鏡だの、椅子だの、テーブルを片つぱしからぶちこはして、おしまひには壁までもぶち落してしまつたが、雀にはさはりはしませんでした。

運送曳はやつとのことで雀を手づかみにしました。

するとそばにゐたおかみさんが言ひました。

『さア、あなた、早くひねりつぶしておやりなさいよ。』

『いゝや、そんな殺しかたぢやア、腹がいえない！』と運送曳がいつた。『うんと苦しませてやりたいもんだ、さうだ、おれがのみこんでやらう。』

と、雀を口へ入れてゴクリとのみこんでしまひました。

けれども雀は運送曳の腹の中でバタ〳〵と飛びまはつて、ちきにまた口の中まで飛びあがつて來ました。そして口の中から小つぽけな頭を突き出して囀りました。

『馬車屋さん、馬車屋さん、お前の命もとつてやるよ！』

それを聞くと、運送曳は斧をおかみさんの手へ渡してかういつた。

『さア、おれの口の中で、こいつの頭をぶち切つてくれ！』

おかみさんは斧をふりあげて、雀の首を切らうとしたが、ねらひがはづれて、御亭主の頭をきつたので、運送曳はばつたりと倒れて死んでしまひました。

その間に雀は口から飛び出して、どこかへパッと飛んで行つてしまひました。（をはり）

世界名作物語（その五）

馬鹿のイワン（ロシヤ）

山野虎市

（八）

イワンは森で切つて來た樹で兄弟達の爲めに新しい家を建てゝやりました。そして兄弟達は別々に住みました。

やがて村のお祭が來ました。

村の人々は廣場に集つて踊りを踊りましたがイワンもその中に雜じつて踊りました。

『どうか皆さん。今一ツよい歌をうたつておつくれ、するとお前さん達が見た事のない物を上げるから。』とイワンが、皆なに云ひました。女達は大笑ひをして歌をうたひました。

そこでイワンは、

『今、面白い物を持つて來るからナ。』と云つて籠をさげて森へ走つて行きました。皆なが笑ひました。

『何をするんだらうね、あの馬鹿が。』

森の中へ這入つたイワンは、先きに小鬼に教へられた通り、木の葉を手で揉んで金貨を澤山拾りました。そしてそれを籠に一杯に入れて歸りました。

『これを上げよう。』とイワンは云つて籠の中から金貨を掴み出して皆なの前にばら〳〵と撒きました。皆なは先きを爭ふて金貨を拾ひました。その爲め一人のお婆さんが危く押し潰ぶされて死ぬところでした。

『お前さん達は馬鹿だね！』とイワンは云つて、また盛んに籠から金貨を出して撒いてやりました。

『では、もつと面白いことを見せようかね。』

と金貨を撒いてしまつたイワンは納屋へ行つて麥束を一把取つて參りました。そしてそれを地面に立てゝ、先きに小鬼に教へられた通り、

おゝ麥束よ〳〵
命令ば下れり
一本の麥藁より
一人の兵士出づべし

と唱へますと、麥藁が一本づゝ兵士になつて、大鼓や喇叭が村中に響き渡りました。皆なは吃驚仰天して呆氣にとられて見てゐました。

イワンは兵隊を納屋へつれて行つて、元の麥束に變へて、自分は脛の中へ這入つて寢てしまひました。

× × ×

次の日、軍人のセミヨンがイヴンの所へやつて來て、イヴンに兵隊を造つてくれと云ひました。

『兵隊を造つてどうするのかね。』とイヴンは申しました。

『馬鹿。兵隊があれば何でも出來るのだよ。國を手に入れる事が出來るのだよ。』

『さうかれ、ではいくらでも拵らへて上げるよ。併し、兵隊をこしらへて其まゝ村に置いとくと、村中は一日の中に喰ひ潰ぶされるから、何處かへ連れて行つておくれよ。』とイヴンが云ひました。

セミヨンは兵隊を他へ伴れて行くと約束しました。そこでイヴンは納屋へ行つて、麥束を投げ出しました。麥束は皆な兵隊になりました。

セミヨンは大變喜んで、その兵隊を連れて戰爭に出て行きました。

間もなく商買人のタラスがイヴンの所へやつて來て、イヴンに金貨を造つてくれ、と云ひました。

『金貨を造つてどうするのかね。』とイヴンは申しました。

『馬鹿。資本があれば世界中の金を皆集めることが出來るのだよ。』

『さうかれ。ではいくらでも拵へてあげるよ。』

そこで二人は馬を連れて森に行きました。

イヴンは森の中の葉ッパを金貨に變へて、どつさり馬の背中に乘せてやりました。

タラスは大變喜んで、商買に出かけました。

セミヨンはイヴンに拵へて貰つた兵隊で戰爭をして一つの國を攻め取りました。タラスもイヴンに拵へて貰つた金貨を資本にして澤山のお金を儲けました。

ある時、この二人の兄弟がある所で出逢ひました。そして互に戰爭に勝つた話や、お金を儲けた話をいたしました。が軍人のセミヨンが、云ひました。

『私は戰爭に勝つて、兵隊が殖えたが、その兵隊を養つて置くだけの金がない。』

商買人のタラスは、

『私はお金は澤山出來たが、困つた事にはその金を番する兵隊がない。』と云ひました。

そこで二人の兄弟は相談してイヴンの所へ參りまして、セミヨンは金貨をもつと澤山造つてくれるように、タラスは兵隊をもつと澤山造つてくれるように頼ひました。併しイヴンは、

『私はもう、兵隊も金貨も造らない。』と云ひました。二人は怒つて、

『馬鹿。どう云ふわけかれ、それは……。』と問ひました。

『セミヨン兄の兵隊が人を殺ろしたからぢや私がこの間、畠で仕事をしてゐると、一人の女が棺桶を車で運んで來たから、誰れが死んだのかと問ふて見ると、その女は「セミヨンの兵隊が、戰で私の亭主を殺したのです」と云ふのだ。私は兵隊はたゞ樂隊をやるものとばかり考へてゐたのに、人を殺すのぢや。兵隊を拵へるのは眞ッ平だ。それから金貨を拵へるのも眞ッ平だ。タラス兄の金貨がハイロゲナの家から牝牛を取つて行つたからナ。と云ふのは、ハイロゲナの家に牝牛が一匹あつたが、子供迄はこの牝牛の乳を飲んでよく育つて居つたのだ。ところがある日タラス兄の番頭がやつて來て、金貨三ッをハイロゲナのお母さんに與へて、牝牛を持つて行つてしまつたのだ。そこで子供達は飲むものがなくて毎日困り切つてゐるのだ。私は、タラス兄は金貨を玩具にするのだとばかり考へて居つたのだが、牝牛を取つて行くとすると金貨は拵へて上げられないね。』

さうイヴンは云つて、兄達がどう頼んでも兵隊も金貨も造りませんでした。

そこで仕方がありませんから、セミヨンとタラスは相談して、セミヨンは兵隊を半分タラスに與へ、タラスはお金を半分セミヨンに與へることに決めました。

そこで二人とも兵隊とお金を澤山持つことになりました。二人はお金持ちの王樣となりました。

(七)

イヴンは家に居つて、毎日啞の妹と一緒に精出して百姓をしました。

或時、イヴンの家の犬が病氣になつて死にさうになりました。イヴンは可哀相に思つて帽子の中へパン屑を入れて犬に投げてやりましたが、先きに小鬼から貰つた帽子の隱しに入れて置いた草の根がパン屑と一緒に落ちました。犬はパンと一緒にその草の根を食べました。と直ぐ病氣が癒つて、犬は跳ね廻りました。

側で見てゐたお父さんとお母さんは大變に驚きましたが、

『私はどんな病氣でも癒る草の根を二ッ持つて居るのだが、今犬がその一ッを飲んだのです。』と云ひました。

さて、幾度其ころイヴンの國の王樣のお姫樣が病氣になりました。王樣は「姫の病氣を癒ほす者があつたら澤山の褒美を與へる。若し一人者の男であれば姫の婿にする」と云ふ布告を出しました。

そこでイヴンのお父さんとお母さんはイヴンに、

『お前はどんな病氣でも癒す草の根を持つて居るさうだが、早く王樣の所へ行つてお姫樣の病氣を癒してあげなさい。するとお前は一生幸福なんだよ。』と云ひました。

『いゝとも／／。』とイヴンは答へました。

イヴンは王樣の所へ行く爲めに「番い、番

物を着て出掛けやうとして、家の閾をまたぐと同時に片手動かない女乞食に遇ひました。

『お嬢さんがどんな病氣でも癒すと聞いたから來ましたんだ。この手を癒しておくれ。』と女乞食が云ひました。イヤンは、

『いゝとも〳〵、これをぐつと嚙み込むのだよ。』と云つて例の草の根を女乞食に與へました。女乞食がそれを嚙み込むと動かなかつた片手が、直ぐ自由に動くやうになりました。

これを見たお父さんとお母さんは大變怒つてイヤンを叱り付けました。がイヤンは厩へ行つて馬を引き出し王樣の所へ行かうとしました。

『馬鹿。どこへ行くのだい。』とお父樣は怒鳴りました。

『お姫樣を癒しに行くんです。』

『だが、お前ばもうお姫樣を癒す藥を持つてゐないぢやないか。』とお父さんは云ひましたけれどもイヤンは、

『いゝとも〳〵。』と云つて馬に乘つて王樣の所へ出かけました。イヤンが王樣の宮殿の閾をまたぐと一緒に不思議にお姫樣の病氣が癒りました。王樣は大變喜んでイヤンをお姫樣のお婿樣といたしました。

間もなく王樣が亡くなられたので、イヤンは王樣になりました。

かうして三人の兄弟は皆な王樣となつたのです。

（八）

三人の兄弟達は皆丈夫で國を治めました。

セミョンは澤山の兵隊を養ひ、自分に逆ふ者を打ち懲しました。そして何でも自分の欲しい物を持つて來させました。

タラスは人民からいろ〳〵の稅金を取つて金庫に仕舞ひ込みました。タラスはお金持ちですから、人民は何でもタラスの所へ持つて行くし、どんな苦しい仕事でもタラスの爲めにいたしました。

イヤンは王樣となりましてから間もなく、立派な王樣の服を脱いで、元の百姓の着物に着更へまして百姓仕事を始めました。

『私は退屈ぢや、身體は段々肥つて來る。ご飯は旨くない。夜は寢むれない。』とイヤンは云つて、父や母や嫂のマラニヤを村から呼びよせて、前と同じやうにお百姓を始めたのであります。

如し「針の行く所に糸は從ばねばならぬ」と申しまして、夫のイヤンに從つてお百姓になりました。

家來がやつて來て、役人に拂ふ金がないと申しましてもイヤンは、

『金なんぞ拂はなくてもよい。役人は勤めをやめて肥料を運んだらよからう。』と云ひました。

で人民も家來もイヤン王の馬鹿であることを知るやうになりました。

そして賢い人は皆なイヤン王の國から出て行きまして、たゞ馬鹿者だけが殘りました。

殘つた人々は誰れもお金を持ちませんでしたが、皆な丈夫でよく働き、自分を養ひ他人をも養ひました。

（九）

惡魔王は三匹の小鬼が三人の兄弟を滅ぼしたと云ふ報知が來るかと、毎日待つてゐましたが、小鬼共からは少しも報知がないので、自分で出かけて參りました。そして小鬼共が居なくて唯だ半分に切れた小鬼の尻尾と三つの穴だけが殘つてゐるのと、三人の兄弟達が皆んな王樣になつて居るのを見ました。これを見た惡魔王は、

『よし、已れが自分で仕事をしなければならん。』と云ひまして、將軍の姿に化けて先づセミョン王の所へ參りました。將軍に化けた惡魔王は巧くセミョン王に取り入つて、セミョン王を煽てゝ全國の若者を一人も殘らず兵隊にさせたり、一時に五百發の彈丸を打ち出す鐵砲を造らせたり、砲臺を一時に爆發させる大きな大砲を造らせたりしました。惡魔王を信用したセミョン王は一々惡魔王の云ふ事を聞いて大軍隊を造りました。

やがてセミョン王は隣り國に向つて戰爭を吹きかけました。そして惡魔王から教へられた新式の鐵砲で、忽ち敵兵の半分を、打ち殺しました。隣國の王樣は恐れて、降參し、セミョン王に自分の國を引き渡しました。

セミョン王は大變に喜んで、

『今度は印度王を征伐してやらう。』と申しました。

しかし印度王はこの事を聞いて、新式の小銃や大砲を備へ、若い男ばかりでなく女までも軍隊にいれました。そればかりでなく空の上から彈丸を豆のやうに撒くことの出來る飛行機をも發明しました。

で、いよ〳〵セミョン王と印度王との戰爭となりましたが、セミョン王の軍隊はすつかり敗けまして、兵士は一人も殘らず殺されて終つてセミョン王はたつた一生き殘つて命からゞ〳〵逃げ歸りました。そこで印度王は、セミョン王の領地をすつかり取つて終ひました。

惡魔王はセミョンの方がすつかり片付いたのを見て、今度は商人に化けてタラス王の所へ參りました。

商人に化けた惡魔王はタラス王の國内に商館を建てゝ金を使ひ始めました。惡魔王の商人は何でも彼でも非常に高く物を買ふので、人民は蟻のやうに、この商人の門に集りました。人民は商人から儲けた金でタラス王に稅金を殘らず納めました。そこでタラス王も益益金持ちになりました。

タラス王は新らしい御殿を造る爲めに材木や石を買ひ、人夫を雇ひましたが、商人はタラス王よりも高い金で材木や石を買ひ人夫を雇ひましたから、タラス王の所へは一本の材木も一つの石も一人の人夫も集りませんでした。タラス王は吃驚しました。

タラス王は花園を造らうとしましたが、人民は皆な商人の方へ行つてしまつて、王樣は花園を造ることが出來ませんでした。

タラス王はまた、黒貂の皮を買ひたいと思ひましたが、商人が皆な高い金で黒貂を買ひ占めましたから、タラス王は一枚も黒貂の皮を買ふことが出來ませんでした。

終ひにはタラス王の料理人も、馬丁も、召使も皆な商人の方へ行つて、終ひました。人民も皆な商人の方へ行つて終つて、誰一人王様の仕事をしようとする者もなくなりました。

タラス王の庫にはお金が有り餘る程積んでありましたが、王様は食べるにも困るやうになりました。

タラス王は怒つてその商人を國の外に追ひ出しました。併し商人は國境に商館を拵へて前の通りお金を使ひました。人民達は矢張王様を、そちのけにして商人の所へ參りました。

それ許りでなく商人はタラス王をも買ひ取ると威張つてゐる、と云ふ噂がタラス王の耳に這入りました。

丁度この時セミヨン王が參りまして、

『どうか助けてくれ、印度王に敗けたのだ』と申しました。がタラス王は、

『人を助けるどころか、私自身、もう二日間何も食はないのだ。』と云ひました。

（十）

惡魔王は今度は將軍に化けてイヴン王の所へ參りました。そしてイヴン王に國中から兵士を集めて大な軍隊を作る事を勸めました。

馬鹿のイヴンは、

『よし〳〵、ぢや軍隊を造つて上手に敵をうたせるがよい。私は歌を聞くのが好きぢや。』と申しました。併し人民は、兵隊になると殺されるかも知れないと聞いて吃驚してイヴンの所へ參りまして、

『兵隊になつたら殺されると云ふから、私等は兵隊になるのは眞ッ平です。』と云ひましたイヴンは、

『よし〳〵、兵隊が嫌なら兵隊にならなくともよいよ。』と云ひました。そこで惡魔王の計畫は駄目になりました。

今度は惡魔王はタラカン國の王様を煽動して、イヴン國を乘り取らせようとしました。

惡魔王の煽動に乘つたタラカン王は軍隊を率いてイヴン國に攻め入つて穀物や牛や馬を勝手に分捕りましたが、誰一人抵抗する者がありません。そればかりでなくイヴン國の馬鹿な人民達は敵國の兵士達に向つて、

『お前さん達は可哀想な人達ぢや。生活が困まるのなら、何故私達の國へ來て私達と一緒に百姓をしないのかね？』と申しまして、しきりに自分の國へ移つて來るやうに勸めました。

そこで兵士達は、戰爭をする張り合ひがなくなつて『これではまるで糠に釘だ。こんな所で戰爭は眞ッ平だ。』と云つて、王様の命令をも聞かないで、勝手に逃げて歸りました。

（十一）

戰爭でイヴンを敗かすことの出來なかつた惡魔王は、今度は一人の紳士に化けてイヴン國へ參り、タラスを征伐したやうに、お金でイヴンを征伐しようとしたのであります。

自分で働いて自分で食ひ、物と物とを代へ合つて、まだお金と云ふ物を見なかつたイヴン國の人民は紳士が持つて居るきら〳〵と美しく光る金貨を見て吃驚して、

『何て綺麗な可愛い物だらう！』と云つて、自分の品物と紳士の金貨とを代へました。紳士はタラスの國の時のやうに盛んに金貨を使つて「今度は巧く行くぞ。」と云つてにや〳〵笑ひました。

しかしイヴン國の馬鹿な人民は金貨が手に

入ると直ぐ頸飾りにしたり、銀の垂髪の飾りにしたりしました。子供達は金貨を玩具にして街路で遊びました。そして紳士の所へは誰れも品物を持つて來る人が無くなりました

紳士は腹が減つたから金貨を持つて店へ行つてパンを買はうとしましたが何所の店でも

「私の家では、もう金貨が三枚もあるから用りさせん。」とか「子供が玩具にしてますからナー。」とか云つてパンを賣てくれませんでした

そこで紳士は乞食のやうに家々を廻つて食物を貰つて歩きました。しかし働かない白い手をした人は食物の殘りしか貰へないといふのがイヴン國の規則でしたから、白い柔かい手をしたこの紳士はたゞパンの殘りを食べてやつとお腹を滿たしました。

ある日、紳士がイヴン王を訪ねまして啞娘からパンの屑を貰つて食べた後、紳士はイヴン王といろ〳〵話をいたしましたが、紳士は

『貴郎方は馬鹿だから、唯だ手や脊中で働くが、私は頭で働らく方法を知つてゐます。』といひました。イヴンは「頭で働らく」と聞いて吃驚しました。そこでイヴンは「明日、あの高い塔の下に、人民を集るから、貴郎は塔の上

に登つて頭で働らく方法を人民に教へてください。」と頼びました。紳士は承知致しました。

さて、次の日、人民は頭で働らく方法を聞く爲めに皆な塔の下に集りました。紳士は塔の上に登つて、下に集つて居る人民達に向つて、頭で働らく方法を大聲で演說しました。

紳士は三日間塔の上で演說を續けましたがイヴン國の人民には馬の耳に念佛でした。紳士は演說してゐる中にだん〳〵お腹が減つてきましたが、誰れもパン一片も持つて行きませんでした。と云ふのは紳士は頭で働くといふのだから、パン位は頭で製造するだらうと、人民達は考へたからです。

三日間喋り續けた紳士はもうすつかり疲れ切つて倒れました。そして頭をさかさまにして高い塔の段を一ッづゝ數へるやうにして落ち始めました。これを見た人民達は、

『さあ、いよ〳〵あの紳士は頭で働き出したわい。』といひました。併し塔の下まで落ちた紳士の姿は夕暗に消えて見えなくなりました。

次の朝、イヴンは塔の下に行つて見ましたが、誰れもゐないで、唯だ地面に穴が一ッ殘つてゐました。

『やー嫌な奴！此奴も惡魔だつたのか！』とイヴンは呆れて叫びました。

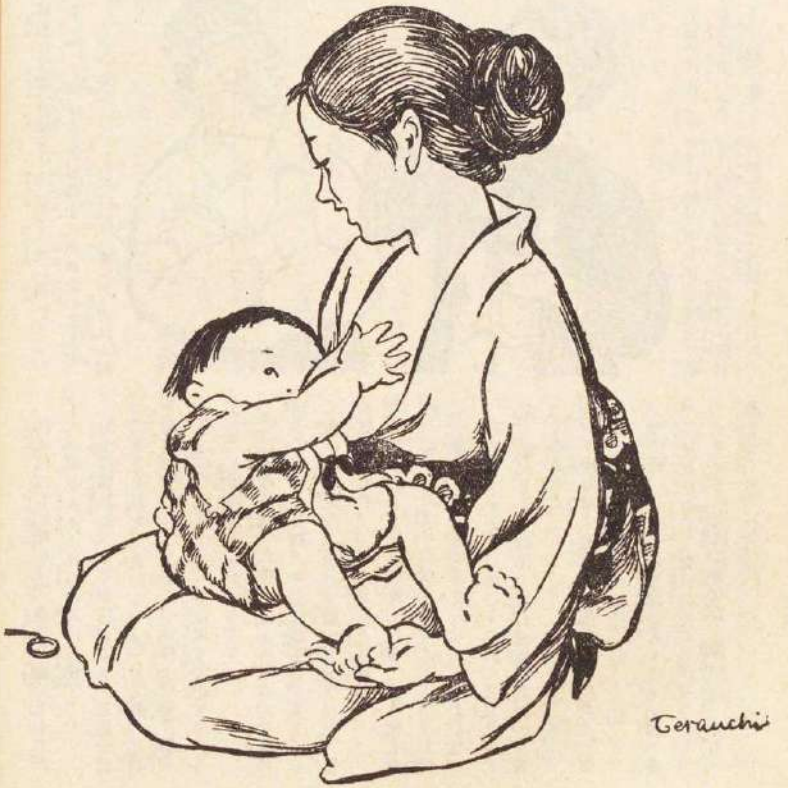
その後、イヴンの兄達二人もイヴン國へ參つてイヴンの家で暮はれることになりました

イヴン王の人民は皆なよく働いて、紳士よく暮しました。（なばり）

まきこさんのお乳

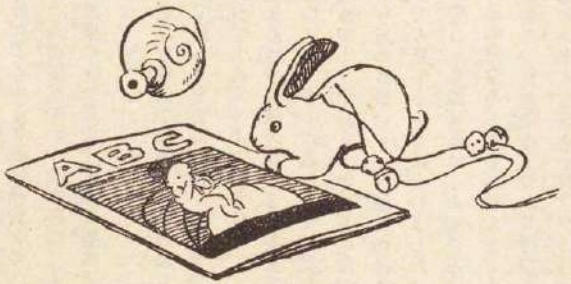
若山牧水

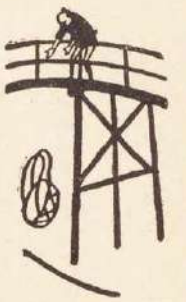
まき子さんのおべべの
わきのしたやぶれた
あかいおひもの
ちよいとよこやぶれた
おちちのむとき



おちちが見える
見えるおちちは
まき子さんのおちち
おちちのみましよか
まき子さんのおちち

名前はめい〳〵知つてゐる人の名前にして歌つて下さい





鼻利物語

秋庭俊彦

一

昔、兩國橋の近所に源兵衛と云ふ八百屋がをりました。或る夏、商買に行つて歸りに、橋の上へ籠を下して休んでをりましたが、籠の中には南瓜が三つと茄子が二十ばかり殘つてをりました。それを見ると源兵衛は、これから又晩方までそれを擔いで、暑い中をまはつて歩くのが堪らなく厭になりましたので、橋の欄干から殘つた南瓜と茄子を川の中へほかん〳〵放りこんでしまひました。そして源兵衛は獨り言を云ひました。

『さあかうして品物をみんな賣つたつもりにして、今日は早く歸つて休んでやらう。だが、毎日々々かうやつて青物を賣つてたつて、とても出世の見込みはなし、一生八百屋で暮らすんぢやこの世に生れた甲斐がないな。一そのこと、今日限り八百屋をやめて、何か大きなことを考へた方がいゝ。さうだ序でにこんな天貧棒や籠も川の中へ放りこんで了はう。こんなものがあるから、青物を擔いで出かける氣になるんだ。これさへ無ければ、きつと別ないいことを思ひつくにちがひない。』

かう思ふと源兵衛は、今度は天貧棒と籠を取り上げて、一思ひに欄干から川へ投げこんで了ひました。

家へ歸ると、源兵衛のお神さんは、御亭主の荷がないのにびつくりして、『おや、荷をどうしたんです。』ときました。

『荷は兩國橋から川の中へ投げこんでしまつた。今日から俺はもう八百屋は止めだ。もつと立派な商賣を考へるんだ。八百屋ぢやいつまで經つても出世は出來ないからな。』と源兵衛は云ひました。

『そんな事云つたつて、明日からどうして暮らしを立てゝ行くんです。氣でも狂つたんぢやありませんか。』

『まあ默つて俺のすることを見てゐろ俺にはいゝ考へがあるんだ。氣を大きく持つて、今から大金持ちになつたつもりでゐるがいゝ。』と源兵衛はまるで夢でも見てゐるやうに云ひました。

翌日から源兵衛は、お神さんにオムスビの辨當をこしらへさして、十兩ばかりあつたお金をすつかり持つて、何處かへ出て行きました。夕方汗みづくになつて歸つて來ても、お神さんには何にも話しませんでした。四五日さうしてゐる中に、或る晩、源兵衛は急にお神さんを前へ呼んで、今夜これから引越しをするんだから、荷物を片づけろと云ひ出しました。お神さんが呆れてまご〳〵してゐる中に、源兵衛は車を一臺借りて來て、少しばかりの世帶道具をつむと、さつさと出かけました引越先の家と云ふのは、日本橋通りの大きな呉服屋の前側で、店口が七間もあるやうな大きな家でした。源兵衛はそこへ入ると、その晩のうちに三河屋と染め出した古暖簾を買つて來て店先につるし、近いうちに何かの店開きでもするやうな樣子に見せかけました。

お神さんはまるで狐にでも化かされたやうにぴつくりするばかりでした。何をするつもりかと聞いても、源兵衛は『まあ、默つて見てろ』と云ふだけで、何が何だかちつとも見當がつきませんでした。

その翌日になりますと源兵衛は店口を開けひろげ、店先へ一人で坐り込んで、往來まで聞へるやうに大きな聲を出して、

『庄八、久兵衛、仙吉、喜助、疊屋はまだ來ないか。大工はどうした。早く直さなければ困るぢやないか。もう一度使ひをやつて呼んで來い。』と怒鳴り出しました。

『あなたはそんな事を怒鳴つてどうしたんです。こりやほんとうに氣狂ひになつたんぢやないか知ら。』とお神さんは泣き出さないばかりに心配してゐました。

『心配することはないよ。往來の人が俺の云ふことを聞くと、はゝあ、この店は奉公人を大勢使つてゐるお金持ちの商人だと思ふだらう。人からさう思はれるだけでもいゝぢやないか。だからお前も大勢の奉公人を使つてゐる、お金持ちのお神さんのつもりになつて氣を大きくしてゐろ。斯うやつてゐる中に俺は何かうまいことを考へ出すつもりだ。』と源兵衛は笑ひました。そしてまた大きな聲を出して、

『庄八、久兵衛、仙吉、喜助、疊屋へ使ひをやつたか。大工は何時來るんだ。』とさも景氣よささうに云ひました。

二

それから五六日たちましたが、源兵衛はもと〳〵何をするお金もないのですから、何にも店開きをする當はありませんでした。それでも一人で店先へ坐つて、

『庄八、久兵衛、仙吉、喜助、疊屋はどうした、大工はまだ來ないか。』と相變らず居もしない奉公人の名前ばかり呼んでをりました。そして煙草をぷか〳〵ふかしながら、何をしたらいゝかと考へてをりました。

すると、或る日のこと、眞向ふの呉服屋の前に何か貼札が出て、一ぱい人だかりがしましたので、何があるんだ

らうと源兵衛はそこへ行つて見ました呉服屋の店先には、金糸銀糸を織りまぜた、大さう立派な一枚の古布が付にはさんで釣るしてあつて、貼札に、

『この古布は何と云ふ織物か當店でも名前を知らないが、もしこの名前を知らせて下すつた方には五百兩お禮をさし上げます』とかいてありました。

ですから大勢の見物はがや〳〵騒いでをりましたが、誰れ一人その名前を知つてゐるものはありませんでした。

その古布は、その呉服屋一ばんのお得意の或るお大名の家に傳はつてゐる寶物で、名前が知れないので呉服屋へ聞きによこしたところが、呉服屋でも名前を知らない珍らしい織物だつたのでお金をかけて店先へつるしたのだと云ふ話でした。

『成る程見たこともない立派な織物だこの名前が知れゝば五百兩か。大さうな金儲けだな。』と源兵衛は思ひましたが、知らないものはどうしやうもありません。源兵衛は家へ歸つて、店口からうらめしさうに古布と人だかりとを眺めてをりました。

往來の人達は後から順ぐりに立停つて見て行きましたが、やつぱり誰れもその布の名前を知つてゐるものはありませんでした。古布は毎日店先につるされて、大勢の人を集めてをりましたところが三日目の午後、暑さのために大通りにもちよつと人影が絶えた時分に、眞黒な入道雲が空にムラがつて、今にも夕立が降つて來さうになりました。源兵衛は店口からぼんやり古布を

眺めてをりましたが、その時不意にごうつと云ふ音を立てゝ、物凄いやうな旋風が吹いて來ました。と、その拍子に、呉服屋の店先の古布がそれに一煽り煽られたかと思ふと、付ばさみからはづれて、くる〳〵と旋風に捲きこまれ、見る〳〵うちに空高く舞ひあがりました。源兵衛が驚いてその行衛を見つめてをりますと、古布は高いところでひら〳〵してをりましたが、する中にまただん〳〵下へさがつて來て、呉服屋の横側の倉の窓のところに出てゐる大きな打釘にひつかゝりました。

呉服屋の店では大騒ぎでした。お大名からあづかつた寶物の古布が失くなつたと云ふので、店のものが大勢通りへ出たり、物干へ登つたりして探してゐましたが、倉の折釘にひつかゝつてゐることは誰れも氣がつきませんでした。それを見ると源兵衛は思はずポンと手を叩いて喜びました。

そしてさつそく呉服屋へ出かけて行きました。

三

源兵衛は呉服屋の一番番頭に會つて古布のさらはれた見舞を云つてから、

『さて番頭さん、私の家には先祖から傳はつてゐる鼻利の法と云ふのがあるんですが、もしお頼みがあればその法を使つて、あの古布を探して上げても宜うございます。』と云ひました。

『鼻利の法つてどんなことをなさるんです。』

『たゞ鼻で嗅ぎ出すだけですが、五丁四方ぐらゐの中にあるものなら、その匂ひで大抵探しあてることが出來るんです。』

『へえ、そんな調法な秘傳を御存じなら一つお願ひしたいものですね。でもあの古布には何にも匂ひはありませんよ。』

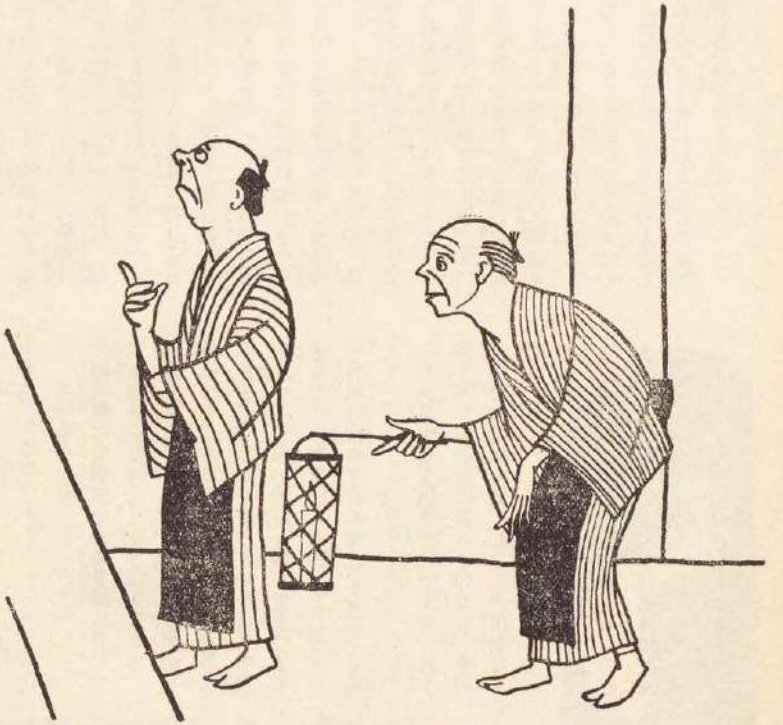
『ところが私が嗅けば、ちやんと匂ひがするんです。』と源兵衛はうけ合ひました。

そこでいよ〳〵源兵衛が古布を嗅ぎ出すことになりました。人が大勢つゐて來ては、人臭くて邪魔になると云ふので、源兵衛は一番番頭だけをつれて鼻をふう〳〵云はせながら、店から呉服戸棚、座敷、庭先、倉とだん〳〵にかいで行きました。

『いや、これはなか〳〵むづかしい。でも、どうやら食の二階から匂ひがするやうだ。』と源兵衛はわざとひまをかけて、首をひねつたり、鼻をびく〳〵動かしたりしてゐましたが、そろ〳〵と倉の梯子段を上つて、

『番頭さん、たしかにこの邊に匂ひがしますがね、倉の中ではなくつて、倉の外ですよ。』と云ひながら窓から外をのぞいて見て、

『おや匂ひが強くなつたぞ。あゝ、此處にありました、ほらこの通り。』と源



兵衛は自分でもびつくりしたやうな風をして、折釘から古布をとりました。

『あゝ、これです。成る程あなたの鼻利は大さうなものです。お陰樣で助かりました。有難うございます。』と番頭は源兵衛の鼻を不思議さうに眺めながらお禮を云ひました。

呉服屋の店では主人をはじめ大勢の番頭がそろつて出て來て、源兵衛を厚くもてなしました。そしてお禮に五百兩のお金を包んで源兵衛の前にさし出しました。源兵衛はすつかり御馳走になつてから、お金を貰つて大威張りで家へ歸りました。

源兵衛のお神さんは、御亭主の鼻利の話に驚いてゐましたが、何しろ急に五百兩と云ふお金が出來たので、今度はほんとうに疊屋を呼んだり、大工を呼んだりして店を直しました。そしてほんたうに四五人の雇人を抱えて、唐物屋を開きました。

四

鼻利の許判がそれから其れへ傳はると、一體どんな鼻付をしてるんだらうと大勢の人がわざ〳〵見物に出かけて來るほどで、源兵衛の店は忽ち繁昌しましました。中には、失せ物を嗅ぎ出して貰ひたいと頼みに來る人も澤山ありましたが、源兵衛は對手をい〻加減にあしらつて、

『私の鼻利は一生に二度か三度、大切な場合にしか使へないんですから、お氣の毒ですが』と云つて斷りました。

する中に、前の呉服屋の主人から、是非もう一度鼻利をして貰ひたいと云つて來ました。京都の本店のお出入り先になつてゐる二條關白樣が、源兵衛の鼻利の噂をお聞きになつて、その者を呼び寄せて貰ひたいと本店へお言傳けになつたと云ふのです。その譯は、京都の御所に傳はつてゐる寶物の鏡と定家卿の卷物とが何者かに盜まれて、その監視のお役目の二條關白樣が切腹をなさらなければならないやうな騒ぎになつてゐるので、それを嗅ぎ出せば褒美は望み次第だと呉服屋の主人は云ひました。

源兵衛はてんで鼻利の法なんぞ知らないので、これには困つてしまひましたが、

『へえ、宜しうございます、一つやつて見ませう。』と平氣でうけ合ひました。

これをい〻幸ひに上方見物をして來ようと源兵衛は思つたのです。あつちで匂ひがする、此方で匂ひがすると出鱈目を云つて、圓山、清水、御室、嵐山と方々遊んだ後で、あの寶物はもう京都には置いてない、何處か遠くへ行つてしまつたと云へばそれで濟むと源兵衛は考へました。

源兵衛は旅賃をたつぷり貰ひ、途中も上等な宿屋に泊つて、幾日かの後には京都へつきました。一晩休むと、さつそく二條關白樣のお邸へ行つて、直ぐに鼻利にかゝりました。

お金はいくらでも出して呉れますしどんな立派な御殿でも、お寺でも役人が連れてつてくれますので、源兵衛はあゝ、彼方で匂ひがする、此方で匂ひがすると云つては、毎日々々名所舊蹟を見物に歩きました。たゞ見物の出來ないのは、天子樣の御所の中だけでした普通の人ではとても見物の出來ない御所の中を、源兵衛は話の土產に一目でも見物したいものだと思ひましたので或る日二條關白樣の前へ出て、

『怪しいと思ふところは何處もみんな嗅ぎ歩いて見ましたが、何處にもございません。殘つてゐるのは御所の中ですが、どうもあすこから匂ひがするやうで御座います。きつと御所の何處かに隱してあるに違ひありません。』と云ひました。

ところが天子樣の御所の中へは、む

やみに普通の人を入れることが出來ません。從五位以上の位をもつてゐる人でなければ、御所の中を自由に歩くことは出來ないのです。そこで二條關白樣は外のお公卿樣達と御相談になりましたが、寶物の匂ひがすると云ふのですから仕方がありません。御所へ入つてゐる時だけ、源兵衛を從五位の待遇にすることにしました。そして從五位三河守源兵衛源 鼻利 朝臣と呼ぶことになりました。

五

從五位三河守源兵衛源 鼻利 朝臣は今度はすつかり冠と裝束とを身につけ手に笏を持ち、幾人かの仕丁につき添はれて、鼻をふが〳〵云はせながら、紫宸殿をはじめ、御所の中を隅から隅まで見物いたしました。それからお庭へ出ましたが、源兵衛はからだ中汗みづくになつて、暑くて暑くてたまりませんので、廣い泉水のふちを、まはりながら、

『これ〳〵仕丁ども、お前達が後からついて來ると、人臭くて寶物を嗅ぎ出す邪魔になる。向ふの林の中で寶物の匂ひがするから、私は一人で行つて來る。お前達はしばらく御殿の中へ退つてをれ。』と仕丁どもに云ひつけました

源兵衛は一人になると、こんもりした林の奥へ入つて冠をとり、裝束をぬいで、二疊敷もあるやうな大きな樹の切株に腰をおろしました。そこはまるで冷めたい椽側のやうに氣持ちがいゝので、先づ一眠して行かうとごろりと仰向けに寢轉んで、さつき御殿で頂いて來たお菓子を懷中から出してむしやむしややりながら、何の氣なしに足で切株の横側をとん〳〵と叩きました。すると、どうしたわけか、その音が地の下へごん〳〵と響いたので、源兵衛はびつくりしました。見ると切株の裏側から地の下へ大きな空洞が出來て、中が眞暗な岩屋のやうになつてをりました。もう一度足で切株の横を蹴つて見ると、鐘のやうにごん〳〵とその空洞へ響きました。

『こいつは珍らしい大きな空洞が出來たもんだ。悪者でも隠れてゐさうなところだな。』と源兵衛は面白いので尙ごん〳〵と叩いてをりましたが、その時急に下の方で何かごそ〳〵と動いた樣子なので、源兵衛は思はず跳びのきました。

その途端に、空洞の中から髪の毛のもぢや〳〵になつた人の首がひよいと現はれて、痩せて目のぎよろ〳〵した一人の男が這ひ上つて來ました。源兵衛の驚いたことは云ふまでもありません。でもぢつと氣を落ちつけながら、

『こら貴樣は何奴だ。大泥棒に違ひない。俺は從五位三河守源兵衛源 鼻利 朝臣と云つて、悪いことは何でも嗅ぎ出す術を知てる者だ。貴樣は盜人の匂ひがするぞ。』と源兵衛は怒鳴ました。

『恐れ入りました。實は私はもと此御所に勤めてゐた悪者に頼まれて、寶物の鏡と定家卿の巻物とを盜み出した泥棒でございます。そして一時此處に隠れましたが、見張りが厳重で外へ出ることが出來ず、今日で二十日ばかり食物もたべずにぢつとしてをりました。上から雷の樣な音がして、お腹に響いて恐ろしくつて堪らなくなりました。寶物は此通り此處に御座いますから、どうぞ命ばかりはお助け下さいまし。』と痩せてひよろ〳〵になつた悪者は、袖の中から鏡と巻物を取出しました。

『うん、貴樣は悪い奴だつ。しかし素直に白狀したから命だけは助けてやらう寶物さへ出れば貴樣なんぞに用はない今夜から見張りもゆるむだらうから、その際に逃げ出すがいゝ。さあ、この菓子をやるから、夜ふけまでこれを食べて力をつけて置け。』と源兵衛は云つて、寶物を受けとると、急いで冠と裝束とをつけました。

二條關白樣の詰所へ行つて、たうとう寶物を嗅ぎ出しましたと云ひますと關白樣のお喜びと云つたらありません源兵衛は關白樣のつき添ひで、天子樣の拜謁を賜はりました。そして何か望みがあつたら申すがいゝ、出來る事は何でも叶へてやると云れましたので、

『私は御所から出ましても、此儘從五位の身分にして置いて頂きたうございます。』と源兵衛は云ひました。

『よろしい、此度の功勞に依つて、その方の一生涯從五位を授けて置く。』と天子樣は仰しやいました。

源兵衛は從五位の位にお金を千兩頂きました。そして京都から江戸へ歸ると、從五位樣の唐物屋、三河屋の鼻利朝臣と云ふ大へんな評判で、お大名と肩を並べるほどの名高い男になりました。

（をはり）

ハンニバルの話

楠山正雄

ハンニバルがその軍隊を戰ひに向けるときには、いつもかういふ精神で訓練するのでした。しかしハンニバルにとつてたゞ一つの弱味だけは、どうすることも出來ませんでした。それは前にも述べましたやうに、ローマ軍がたゞ一國民から成立つてゐるのに反してカルタゴ軍は幾つかの種族の混合軍であるといふことです。

ハンニバルはこの異なつた人種を統一することに非常な努力をしなくてはなりませんでした。そして今又新しく味方に加へたゴール族は、勇敢で熱心ではありましたが、戰術にかけては全くの素人といつてもいゝ位でしたから、これを有力な軍隊として働かすといふことは並大抵の努力では駄目なことでした。その上、味方となつたとはいつてもこのゴール族は、ハンニバルの旗色次第でいつ彼を見捨てゝしまふかもしれないのでした。

かういふ頼りないといふよりは、むしろ危なつかしい味方を巧に使はうと苦心したハンニバルの智慧と才能には、全く驚かないではゐられない位です。土地不案内の伊太利半島をあちらこちらと戰つて歩いて、しかもその間たえずこのやうな人種の違つた軍隊を率ゐ、物資の缺乏に苦しみながらも、前後十六年といふ長い間、ローマ人の胸にハンニバルに對する恐怖の念を抱かせてゐたのです。

ある歴史家は言ひました。この戰爭は、一人の偉人と一つの大國民との戰であると。全くその言葉の通りでした。もしハンニバルがゐなかつたなら、カルタゴはどうなつたでせう。世界を統一しようとするローマの野心は、安々と完うされたことでせうに、たゞ一人のハンニバルあるために、ローマは却つて殆んど絶望に近い苦しみを味はなければならなかつたのです。

トレビア河に會戰したローマのスキピオ軍は、たゞ一戰でハンニバルに打破られました。それは紀元前二百十八年の十二月のことで、その時用ゐたハンニバルの戰術が、後には反對に敵の方でこれを用ゐて彼を苦しめたほどですから、いかに巧妙なものであつたか知ることが出來ませう。

ハンニバルはいつも、機會の來るのを待つてゐるやうなことはしませんでした。或は敵をその陣地から平地へおびき出すとか、又は伏兵をしてそこに相手を誘ひよせるとか、夫々その場合に十分信頼することの出來る戰法を考へ出して、その準備に對しては出來るだけの注意を怠りませんでした。糧食のことも、武器のことも、それから何よりも先づ軍隊全體の元氣といふことに注意を拂ひました。彼は傷付いた馬や兵士たちには、一々古い葡萄酒で洗つてやりました。

トレビア戰の後尙ほ數ケ月間を、ハンニバルはゴール族の領土に停つてゐていろ〳〵の準備をしました。彼は先づ、心なくもローマに服從してゐる伊太利の町々に使をやつて、「自分はあなた方と戰ふために來たのではなく、却つてあなた方のためにローマと戰はうとするものである」といふことをいはせて、同盟を結ばうとし、又一方では間諜をやつて、これから進んで行く途中の樣子を詳しく探らせたりしました。

かうしていよ〳〵ハンニバルは、トレビア戰の翌年こゝを出發して、南の方のローマへ向つて進軍し始めました。

イスパニア兵とリビア兵を先頭にして、その後に輜重隊を従はせ、信頼の出來ぬゴール兵は中央に、ヌミヂアの騎兵隊を一番最後にといふ順序で進みました。最早やこのときはいつも手をやかせる象は一匹もゐませんでした。みんな、トレビアの戰ひから後寒さのために死んでしまつたのです。

ハンニバル軍がアペンニネといふ山脈まで來る少し手前に、是非とも横切らなければならない廣い沼池がありました。カルタゴ軍にとつてこんな困難な行軍はありませんでした。沼地である上に雪溶けの盛んな頃ですから、そこを進む事はアルプス越えのときよりも困難で、この廣い地方を横切る間、夜が來てもうつかりとは眠ることも出來ませんでした。人も家畜も疲れ果てました。澤山の牛は寒さと苦しみのために斃れました。するとその倒れた中のまだ溫かい死骸の上に、疲れ切つた兵士たちが横はつて一寸の間まどろもうとするのでした。

かうした苦しい旅行を四日三晩もつゞけて、やうやくにして普通の土地をふむことが出來ました。そこにはアルノー河に臨んだ丘があつて兵士たちに久しぶりの休息を與へてくれました。

ハンニバルはこゝでいろ〳〵とローマ攻撃の計畫をして、先づローマの執政官のフラミニウスの人物を探らせました。そして彼がたゞ高慢な、戰爭に對しては經驗も熟練も持つてゐないことを知ると、彼は先づ南方にある肥沃な地方を荒すことによつて、そこにローマ軍をおびきよせやうと考へたのでした。

フラミニウスは果してハンニバルの策略にかゝりました。彼はたゞ名譽をうることに汲々としてゐて熟慮するところなく、見識ある部下の言葉を斥け、今一人の執政官の到着するのも待たずして直ちにアレチウムの陣地を出發してハンニバルの後を追ひました。

ハンニバルは敵を誘ひつゝ遂に、味方にとつて有利な場所に來ました。それはトラシメネ湖に接近したところで、コルトナの町からも程近い、あゝ山の中の葦の生ひ茂つた盆地でした。こゝから湖水の方へ狹い谷が出來てゐました。そしてこの谷が湖水のところに來ると、谷の兩側の小山は甚だしく接近して、そこは一度には五六人しか通れないほどに狹まつ

てゐました。

ハンニバルはこの湖の對岸にある險しい山の上に陣營を見せて、谷合ひの左右には夫々伏兵をおいてローマ軍を待ちかまへてゐました。その翌日やうやくフラミニウスは着きました。そして湖の向ふの小山の上の陣營を見ると今にも攻めかかるかと思はれましたが、そのときはもう暗くなつてゐたので、翌る日を待なければなりませんでした。

あくる朝は深い霧がかゝつてゐました。しかしあせりにあせつたフラミニウスは一氣に攻めかゝつて來ました。ハンニバルは思はず會心の笑を浮かべながら、十分ローマ軍の近寄つて來たのを見て、三方から一時に立つて打つてかゝりました。

古來歴史上にこれほどの急激な攻撃とこれほどの暇どらない戰ひがあつたでせうか。フラミニウスの軍は忽ち取り圍まれてしまひました。ローマ軍の方では霧のためにどの方向から敵が攻めて來るのか全く分りませんから、たゞ死者狂ひに戰ふ外はないのでした。司令官自身が度を失つてしまつたので、兵士たちに、どうしていゝか分るはづがありません。遂

には、地の中から湧き出て來るやうなカルタゴ軍の攻擊に堪へかねて逃げ惑ふばかりでありました。

この大激戰で、ローマ軍は一萬五千は斃されてしまひました。大部分の者は湖の中に追ひ込まれて、武裝した身體の重みのために溺死したのです。小山の方へ逃げ出して捕へられたものは降參して生命を助けて貰ひましたが、其他の者を併せて數千人ばかりのものが、辛うじてローマへ歸ることが出來ました。

朝霧の霽れた頃には戰も終つてゐました。ハンニバルは兵士をしてフラミニウスの死骸を探しにやりました。彼はこの敵將を厚く葬りたいと考へたからでした。昔の人は葬式といふことを非常に重んじてゐたのです。しかし兵士たちは彼の死骸を見出すことは出來ませんでした。このハンニバルの行爲を、その十二年後、ローマの將軍ネロがメタウラス河の岸で行つた事と考へ合せるとき、われ〳〵は何といふ異なつた感じを與へられるでせう。そのときハンニバルの弟ハスドルバルは戰に利のないのを見て眞一文字に敵陣に突進しました。そして彼が名譽ある死骸となつて地上に横はつたとき、ネロは、無慾にもこの勇敢なるカルタゴ人の首を刎ねて、ハンニバルの陣營の中へ投げ込んだのでした。これを思ふとフラミニウスの死骸を求めて葬むらうとしたハンニバルの奥床しさが慕はれるではありませんか。

逃げ歸つた兵士たちの報らせにローマ市民は、驚きのあまり靜りかへつてしまひました。一萬五千の兵は殺され、一萬五千の兵は囚へられた！　これを聞いて誰一人恐怖に震へないものはありませんでした。いつになつたらあの丘の頂からカルタゴの軍旗が見えなくなるであらうか？　市民の胸は不安の念で一杯になつてゐました。しかし國家にかういふ危機の迫つたときほど、その國民が強く團結するときはありません。ローマ市民はこの時ほど偉大な國民であつたときはないといふことも出來ませう。

街は忽ち防禦にかゝり、子供も年寄も、武器をとることの出來るほどのものは一人殘らず城壁に據つて、ハンニバルの侵入に備へました。チベル河に架けられてゐた橋は破壞されました。又意見の分裂を恐れて、政府では執政官を廢してただ一人の獨裁官を選び、六ケ月の間は絶對の權力を與へるこ

とにしました。

この難局に當つてローマを救ふために選ばれたものはクインタフ、ファビウスといふ人でありました。この人はもう可成の老人で、さして技倆のある將軍ではありませんでしたが、ローマ人特有の常識の點で、特に秀でゝゐる人でありました。そして彼の唯一の政策とするものはたゞ「待つ」といふことでありました。

ファビウスの考へでは、ハンニバルを攻擊する唯一の方法は、彼をその居るところに居らしめて、その軍隊が内部から壞れて來るのを待つといふことでありました。そこでファビウスは多くの反對の聲や卑怯者と叫ぶ同國人の侮蔑にも耳をかさず、あくまでたゞ、常にハンニバルの背後に軍隊をつけておくばかりで、機會の來るのを待つてゐたのでありました。

これは確かにハンニバルにとつて苦手な方法でありました。なぜならば、勝ちに乘じて攻擊するのならばいくらでも軍隊は緊張して來るのですが、いつまでもいつまでも無爲で暮すとなると、ハンニバルの編成する軍隊にとつては、何よりも恐ろしい分裂が來るかも知れないのですから。そこでハンニバルはあらゆる手段を盡してファビウスを戰ひに誘はふとしましたが、さすがにこの老將軍は如何なる手にも乘せられることはありませんでした。そこでハンニバルは別の方法を考へる外ありませんでした。

これよりさき、トランメネの戰のあとでハンニバルは、今率ゐてゐる兵力丈では到底ローマを征め落すことは出來ないといふことを考へて、本國に使をやつて援兵を求めてゐたのでありました。彼はそのために一先づアドリアチックの海岸地方へ出ることにしました。然しハンニバルの望みは遂に充たされませんでした。そこで彼は又急にアペンニネ河を渡つて西海岸のカムパニア地方へ出て來ました。そしてその地方で一番富んでゐるカプアを味方につけようとしましたが、ローマとハンニバルの力が何れが勝つとも決まらない時でありますから、なかなかハンニバルの申出には應じませんでした。

カムパニアに止まることの出來ないことを知ると、ハンニバルは今までに集めた糧食や分捕品を、アペンニネ河の東方の安全な地に運んで、冬の間十分に兵士達に休養を與へやうと考へました。

ハンニバルはファビウスに跡をつけられてゐながら、思ふところを行つてゐましたが、つひに又戰ふときが來ました。

ハンニバルの計畫を耳にしたファビウスは、カルタゴ軍が峽谷にさしかゝつたとき一度に襲ひかゝることに手配をしました。四千の兵隊を伏兵にして、自分は近くの小山の頂に大軍を率ゐて陣取りました。

長い間たゞハンニバルの行動を監視して、その背後からつけて行くばかりで決して戰はうとしなかつたローマの老獪裁官が、いよ〳〵カルタゴ軍を全滅させる時が來て、今はすべての準備をし終つたとき、彼の得意はどんなでしたでせうか。彼は、この一戰によつて全く今までのローマ市民の不平を沈默させることが出來ると信じたでせう。又恐らく彼が戰に勝つて市民に歡迎されるときの喜びも想像したことでせう。

ところがその晩、ハンニバルはかういふことをしてゐました。彼は部下に命じてせつせと樹を切らせました。そしてそれを割つて薪を作らせ、出來上つたものは陣營の外につないである二千の牡牛の近くに積み上げさせました。

さてその翌る朝は非常に早くまだあたりは眞暗な時分に、

兵士たちは皆ハンニバルに起されました。そして積上げておいた薪を一本一本牝牛の角に結びつけました。それがすむと薪には火がつけられて、牛は前方の丘をめがけて追ひ上げられました。ハンニバルは牛を追ふものゝあとから更に別の兵士たちに命じて、出來るだけ騒いで丘を越えさせるやうにしました。そこで默つて進軍してゐた兵士たちが一度にどつと叫び聲を上げると、牛は俄かに驚いて突進しました。

丘の下の狹谷にかくれてゐたローマの伏兵は、この叫び聲をきいて跳り廻る光を見ましたが、まだあたりは非常にくらくて、それが何であるか知る事が出來ませんでした。そして四千の伏兵は全部彼等の持場を捨てゝ丘へ昇つて來ました。事の眞相はそれでも分りませんでした。それで彼等はそのまま夜の明けるのを待つてゐたのであります。

ハンニバル軍の大部分はその暇に、伏兵の去つたあとの峽谷を易々と通りすぎることが出來ました。そして殘つてゐた軍隊と共に、一齊にファビウスの全軍に向つて打つてかゝりまたゝく間に打ち破つてしまひました。そしてハンニバルはそのまゝアプリアの方へ進軍をつゞけました。（つゞく）

鐵のお城へ

三宅房子

一

王樣に一人の王子がありました。

ある日、王樣は王子をお呼びになつて、

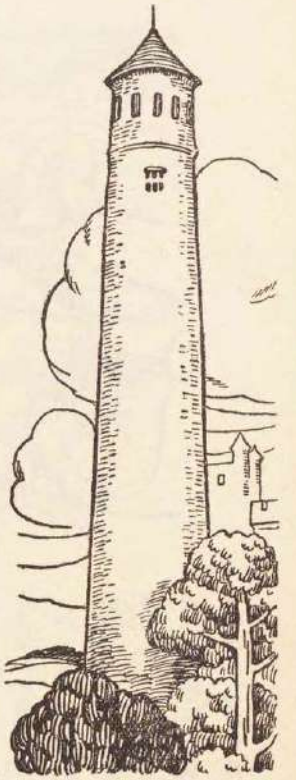
『私の髮の毛をごらん。もうこんなに眞白になつてしまつた。ちきにお日樣の光も見られなくなつてしまふのだらう。だから、私の死なない内によいお嫁をもらつて、私を安心させておくれ。』と、仰ひますと、王子は王樣の顏を見つめながら、

『お父樣、私はおいひつけには何一つ背かうとは思ひませんが、私にはお嫁にしたいやうな人がありません。』と、答へました。

王樣はその時、かくしから金の鍵をお出しになりました。そして、それを王子に渡しながら、

『王子よ、これを持つて眞直に塔のてつぺんへ昇つて行きなさい。さうして、そこへ行つたら部屋の中をよく見て、中で一番氣に入つた人を選んで來なさい。』と仰ひました。

王子には何の意味か解りませんでしたが、とにかく行つて見ようと思つて、高い塔を昇つて行きました。王子は一度もこの塔に昇つたことがなかつたのです。



王子は廻りくねつた塔の階段をずん〳〵昇つて行きましたが、いつまで行つても盡きないので、しまひには目が廻つて來ました。でも、我慢して漸く頂上までたどり着きますと、其處は廣い部屋になつてゐて、その一方に鐵の扉がありました。

王子は金の鍵で鐵の扉をあけて入つて行きますと、目もくらむやうな美しい廣間へ出ました。天井には黃金のお星樣がちりばめてあつて、きら〳〵光つてゐますし、床にはまるで芝生のやうにやはらかな綠色の絨氈が敷きつめてあります。黃金色をした十二の窓からはお日樣の光が射し込んでゐます。ふと、其時、窓ガラスの上を見ますと、美しい王女の姿が一つ〳〵描いてあるのです。しかも見て行けば行くほど、美しい王女の姿なのです。

王子はびつくりして、窓ガラスに描かれた王女の姿を見つめてゐましたが、どの王女も美しいので迷つてゐますと、その王女たちがふいに目をぱつちりさせて笑ひそうにするのです。おや〳〵魂が入つてゐるのかなと王子は思ひましたが、いつまで待つても何の解も

聞えて來ませんでした。その筈です、もともと繪に描いたものなのですから。

ふと、その時、王子は一つ殘つてゐる窓が白いカーテンで覆はれてゐるのに氣づきました。王子は何氣なくそれを開けて見ました。と中から美しい王女の繪姿があらはれました。その王女の美しさといつたらありません。朝の光のやうに美しいのですが、眞珠のきてゐて、銀の帶をしめ、眞白な着物冠をかぶつてゐるその姿は、何ともいひやうなく悲しさうで、まるでお墓を見るやうです。

王子は立止つて、その王女を見つめてゐましたが、王女の顏にあらはれた悲しい樣子を眺めると、自分の心までが、悲しくなつてしまふので、した。

王子は思はず叫びました。

『このひとを助けなければならない。』

王子がかう叫んだ時、王女は顏をあからめて、うなだれたやうに見えました。しかし、それは王子が一人でさう思つただけなのです。

年若い王子は長い塔の階段をかけるやうに降りて、お父樣のところへ行きました。そして、すつかりの話をします

と、王樣はびつくりなさつて、大層悲しさうな樣子をなさいましたが、その後で靜かにかう仰ひました。

『王子よ、お前は困つたことをしてくれた。かくしてあつたのを探出してしまつて。お前は大きな危險にぶつからうとしてゐるのです。その王女といふのは今恐ろしい魔法使の手に落ちて、鐵のお城の中で暮らしてゐる。大勢の若者たちが、これまでにも其の王女を助け出さうと行つたが、一人も歸つて來た者がない。しかし、どうしてもお前の決心を變へることが出來ないのなら、止むを得ないから、これから

行つて勇敢に戦つて來るがよい。丈夫で無事に歸つて來ることを私は祈つてゐる。』

しかし、王子はお父樣にお別れを告げました。そして、馬に乘つて王女を探しに旅に出ました。

二

王子はそれから元氣よく幾時間もの間馬をかけさせてゐますと、大きな森の中へ來てしまひました。これまで一度も來たことのない森だつたものですから、深い谷間で道がわからなくなつてしまひました。

王子はあせりましたが、駄目でした。一ぱいに驚つて聲えてゐる樹にかくされて、お日樣の光も射しこんで來ないのです。どつちが西で、どつちが南かさつぱりわかりません。王子はがつかりしてしまひました。もうかうなつてはこの危險な場處から脱れ出ようとする望みも、捨てなければなりませんでした。

その時、ふいに王子は、自分を呼ぶ聲を聞いたのです。

『もし〳〵。待つて下さい。』

王子が振り返つて見ますと、驚くほど背の高い男が、全速力で駆けて來るではありませんか。

『待つて下さい。待つて下さい。私も一しよに行かせて下さい。きつと後でくやむやうなことはありませんから。』

かういつて、背の高い男は、ハア〳〵いつてゐます。

『お前は誰だ。何が出來るのだ。』と、王子がきゝました。

『私の名はのつぽといふのです。私は自分の思ひ通りに自分の身體をいくらでも長くすることが出來るのです。御覽なさい。あの松の樹のてつぺんに鳥の巣があります。あれを樹に昇らずに取つて御覽に入れますから。』

さういつたかと思ふと、背の高い男は、すんすん背が伸びて行つて、ぢきに松の樹だけの高さになりました。そして鳥の巣をとつてかくしの中に入れたかと思ふと、ほんとにめばたき一つする間に、ひよいとまたもとの通り小さくなつて、王子の前に立ちました。

『成程、お前はなか〳〵偉い仕事が出來る。だが、私はそんな鳥の巣なんかほしくないが、この森の中から出してくれゝば本當にお前が役に立つ人間だと思ふよ。』

と、王子がいひますと、のつぽは、

『あゝ、そんな事わけありません。』といつてスル〳〵と伸びて行つて、森の一番高い樹よりもまだ高くなつてしまひました。

それからのつぽは周り中をぐる〳〵と見渡してゐましたが、

『森を出るには此方の方角を行かなければいけません。』といひました。そして、ぢきにもとの通りにちゞまると、王子の馬の手綱をとつて案内をして行きました。

間もなく王子は森を出る事が出來ました。前を見ると、見渡す限り廣い草原でした。

三

草原の眞中まで來た時、のつぽが王子にいひました。

『王子さま、向から私の仲間がやつて參りました。あれもお役に立ちますから、お伴れになつて下さい。』

『さうかい。では直ぐとお呼び、どんな男か見たいから。』

『しかし、あいつは此處までやつて來るのに容易か　つちやありませんから、一と走り行つてつかまへて來ます。』

のつぽはさういつて飛んで行きましたが、ぢきに其の男を背負つて戻つて來ました。

その男は實にぶく〳〵太つた男で、まるで樽のやうな男でした。

『お前の名は何といふのだ。そして、何が出來るのだ。』と王子がきゝました。

『王子さま、私の名はでぶと申します。私は自分の思ふ通りの大さにふくらむことが出來るのです。』

『さうか。では、やつて見て御覽。』

『王子さま、ためしに出來るだけ速く駆け出してごらんなさい。そして、森の中にかくれて見て下さい。』

でぶはさういつて、もうぶく〳〵ふくれ始めてゐます。

王子は何のために駆け出せといふのかわかりませんでしたが、見るとのつぽがどん〳〵駆けて行くものですから、自分もさうしたらいゝのだらうと思つて、駆け出さうとしますと、ぶ――と俄かにでぶの身體がふくれて來て、王子も馬もでぶの身體で、壓しつけられてしまひました。でぶはそこら一ぱいの大さになつてゐるのです。

やがて、でぶは、身體を一ぱいにふくらしてしまつたので、今度はちゞめやうとしてふ――と息を吐きはじめましたが、それが驚くほどの番を立てゝ、廣い森の中がビリ〳〵とふるえ出しました。その後ででぶは、漸くもと通りの大さに戻りました。

王子はでぶが偉い力を持つてゐるのに感心して、これも一しよに伴れて行くことになりました。

そこで三人はつれ立つて廣い野原を進んで行きますと、途中で目が片方繃帶した男に出遇ひました。

『王子さま、これも私の仲間です。この男も

おつれになれば必ず役に立ちます。』と、のつぽがいひますので、

『お前の名は何といふのだ。どうして目を片方繃帶してゐるのだ。それぢやアよく見えないだらう。』と王子が尋ねました。

『いゝえ、王子樣。その反對です。私が目に繃帶をかけてゐないとあんまり物がよく見え過ぎて困るのです。ですから、皆なが私のことをはや目といつてゐます。』と、繃帶をかけた男が答へました。

『さうかい、そんなに偉い力を持つてゐるのかい。それでは早速お前に頼みたいのだが、私たちがこれから行かうとしてゐる「鐵の城」はこれからどの位あるのだらう。それから其處では今どんな事が起つてゐるか、それを聞かしておくれ。』

すると、はや目は答へました。

『もし王子さまが一人で旅をなすつたら、先づ大丈夫一年はかゝりませう。しかし、私どもがついてをりますから、今晩中に其處へ着きます。今お城の中では皆なが夕飯を食べてゐるところです。』

『お城には一人の王女がゐる筈だが、それも見えるかい。』

『ハイ、見えます。魔法使が高い塔の上に押しこめてゐて、出られないやうに鐵の扉がしまつてゐます。』

『あゝ、その王女だ。どうか皆な助け出しておくれ。』

王子は我を忘れて叫びました。

三人は、必ず救ひ出しますと約束しました。

それから王子たちはどん〳〵廣い原を越して行きますと、高い山があつたり、川があつたりしましたが、丁度日の暮れ方に鐵の城の塔の見えるところまで辿りつきました。

もう太陽は地平線の下へ沈まうとしてゐる時です。その時王子たちは、お城へ通じるお漆りの橋を渡つてゐました。その橋も鐵で出來てゐますが、日が沈んでしまふや否や、ぎーとひとりでに上の方へあがつてしまつて、それと一しよに門も閉つてしまふのです。もう誰も中へ這入ることが出來ません。

王子たちは幸にしてお城へ入ることが出來ましたので、すん〳〵進んで行きますと、お城の各部屋には美しいあかりがついてゐて、まるでお客でもあるやうなのです。王子たちは構はず中へ入つて行きました。すると、どの部屋にも立派に着飾つた人達が大ぜいゐますが、それが皆な石になつてしまつてゐるのです。王子たちは驚きました。でも構はずに

いくつもの部屋を通つてすん〳〵進んで行きますと、大廣間に出ました。

そこにはあかりが晝間のやうについてゐて、テーブルの上には御菊酒や果物が四人分きちんと並んでゐます。王子たちは今に誰か出て來るのだらうと思つて待つてゐましたが、いつまでたつても誰も出て來ませんでした。その内にみんなお腹がへつてゐるので、構はずむしや〳〵食べはじめました。

四人の者は御馳走を食べてしまふと、どこか寢る場所はないかと探しはじめましたが、丁度その時、ふいに扉が開いて、魔法使が這入つて來ました。

魔法使はお爺さんで、せむしでした。頭は禿げてゐて、灰色をした髭は膝のあたりまで垂れてゐました。そして不思議に美しい處女の手をひかれてゐるのですが、その處女は白い着物を着てゐて、腰には銀の帶をしめ、頭には眞珠の冠をかぶつてゐました。しかも、その處女の顏は眞青で、まるで死人のやうなのです。

王子は一と目見た瞬間に、その處女が誰であるか知つてゐましたので、ハッと思つて、おもはず進出ようとしますと、魔法使は口を開かせる暇も與へないやうに、すばやく、

『わしはお前さんが此處へ來たわけを知つてゐる。よろしい。もしもお前さんがこれから三晩の間、この王女がどこへも行かないように護ることが出來たら連れて行つてよろしい。その代り、もしそれに失敗したら、お前さん達四人の者の命は、これまでに來た大勢の者と同じやうに、石になつてしまふものと覺悟してもらひたい。』といつて、王女を置いて行つてしまひました。

見れば見る程美しい王女でした。

王子は話しかけて見ましたが王女はそれに答へもしません、笑ひもしないのです。たゞぢつと大理石のやうに坐つてゐるばかりです。王子はその晩、王女が何處へも行かないやうに寢ずの番をしようと決心して、王女の傍に腰を下しました。なほそれだけではまだ安心が行かないので、のつぽは部屋の周り一ぱいの大さになつて、わなのやうな形になつて横になつてゐますし、でぶは戸口のところに坐つて身體をふーとふくらませて、鼠一匹でも中へ入れないやうにしてゐますし、はや目は部屋の眞中の圓柱によりかゝつて、目を光らせてゐました。

ところが、一時間もたゝない内に、忽ちに皆な不思議な眠りにかゝつてしまつて、その晩中ぐつすり寢込んでしまつたのです。

さて、その間にどんな出來事が起つたでせうか。（次號をお待ち下さい。）

チヱラール中尉の冒險談

牢破り

（長篇童話）

西條八十

前號までの梗概　英國軍のためにダートムーアの牢獄につながれた佛國騎兵チヱラール中尉は、牢を破つて出ようとした所が、その時になつて相棒の砲兵少尉のボーモントといふ男が俄かに聲を擧げて騒いだので、たうとうボーモント少尉を殺してしまつたが、その聲を聞きつけて番兵が駆けつけて來やしないかと恐れながら待つてゐました。

五、銃劍の光

諸君！　僕はすつかり覺悟して寢臺の上にチッと腕を拱んだなり、番兵のやつて來るのを今か今かと待つてゐた。

ところが一分、二分經つても、聞えるのは床の上に氣を失つて倒れてゐるボーモントの荒い息づかひだけで、どこからも靴音ひとつ聞えて來ないぢやないか！

『では暴風雨の音に消されて、奴の今の大聲は誰にも聞えなかつたのだらうか？』

はじめのうちは、それは覺束ない希望に過ぎなかつたが、次第に確かに思はれてきた。廊下にも何の音も聞えず、窓の外にも音がしなかつた。僕は額の冷たい汗を拭いた。さうしてこの次はどうしたものかと考へた。

なにしろこの床の上の男は生かしては置かれん、と僕は思つた。このまゝにして置いたら、牢の外へ出るか出ないうちにまたぞろ大聲をあげるかも知れない。

僕はマッチを擦る勇氣が無かつたから手さぐりで彼の身體をさがした。と、何にやら濕つたものが手に觸つた。たしかに彼の頭に違ひなかつた。

『よし一打ち』と僕は例の鐵棒をふりあげた。が、諸君、僕はその時なぜかその手を下すことが出來なかつた。

戰爭で夢中になつてゐる最中には、僕は何十人の人間を殺したか知れない。しかも自分に對して何一つわるい事をしたわけでも無い連中をだ。ところがこの場合、自分に對しこれほどの憎い裏切りをしたボーモントを僕はどうしても殺し切れなかつた。これは多分その時自分の氣持がすでに軍人を離れて、普通の紳士に還つてゐたからだらうと思ふ。

とは云ふものゝ、奴の息づかひの荒いのを聞いてゐると、今にも息を吹き返しさうでならない、そこで僕は奴に猿轡を喰ませ、毛布をビリ〳〵に裂いて、それを細引代りに、奴の身體を寢臺に括りつけた。

これでまづ逃出すまでは安心だ。だが、次に湧いて來た困難は、ボーモントの肩車で塀を乘越えやうとした最初の企畫が、これでまんまとつぶれてしまつたことだ。僕はそれを思ふと今迄の元氣も何も消失せて、ぐんなりそこへ坐つたなり眼には絶望の涙さへ浮べた。

が、その時、急に眼の前に現はれて來たのは、故國の母親の顔と、畏れ多くも皇帝ナポレオン陛下のお顔だつた。二人の顔が僕をかう勵ました。

『しつかりしろ！　他の者ならともかく、おまへはエティエンヌ・ヂエラールぢやないか！』

『よし！』

僕はこれを見て電氣にかけられたやうに躍り立つた。僕はボーモントの敷布と自分の敷布とを細く裂いてこれを縒り合せ、結構丈夫な一筋の繩を作つた。さうしてその繩の片端に例の鐵棒を結びつけた。それを持つて僕はもう一べん窓から戸外へもぐり出た。戸外はますゝはげしい雨と風だ。

運動場の廣庭へ飛び下りると、僕は蝙蝠のやうにピタリと牢屋の建物の羽目にくッついて、ソロ〳〵石塀の方へ進んだ。嵐の夜の暗さ、自分の手さへ見えない位だ。これなら何としても番兵に見咎められつこは無い。

やつと第一の石塀の下まで來ると、僕は手の鐵棒を投上け

た。するとうまい工合に、一度でそれは塀のてつべんの鐵の杙の間に挾まつた。そこで僕は繩をたぐつて塀に攀り次に繩を引上げ、今度はそれを頼りに向側へと下りた。

おなじ方法で、僕は第二の石塀へものぼることが出來た。さうしてまさにそのてつべんの鐵杙を跨がうした時、僕は足下の暗の中に何かキラ〳〵する物を認めた。

それは番兵の銃劍の光であつた。第二の塀は第一の塀よりも心もち低かつたので、この場合僕が俯伏せになりさへすれば、造作なくその銃劍はもぎ取れるのだつた。何をしてゐるのかと見ると、番兵は鼻唄をうたひながら、塀に倚掛つて、身體を溫めてゐるのだつた。奴さん、まさか自分の頭の上にはこんな死にもの狂ひの男がゐて、下手に動いたが最後自分の劍で生命を奪られようなどとは、夢にも知らなかつたらう！

愈々塀下へ下りようと身構へをした時、僕はその番兵が何か呟きながらもう一べん銃を肩にして歩き出すのを聽いた。バシャッ、バシャッ、かれの足音は泥の中をだん〳〵向ふへ遠ざかつて行つた。

僕はスルスルと繩につかまつて、首尾よく第二の塀の外へすべり下りた。さうして繩は塀に吊げたなりで、トットと暗の中を駈け出した。

駈けたとも駈けたとも、僕はどの位暗の荒野を駈けつゞけたらう。風は直向から僕の顏をうち、何度か窒息しさうになつた。雨は骨の髓まで冷たく浸み通り、耳の孔まで流れ込んだ。駈けながら僕は幾度か穴ぼこへ落込み、茨に足をとられた。息は切れ、服は裂け、手足は血みどろになつた。舌は鞣皮のやうにカラ〳〵になり兩足は鉛のやうに重く、心臟は太鼓のやうにドンドン鳴つた。

それでもかまはず僕は駈けた、駈けた、駈けた。

六、目についたのは外套

だが諸君！　さうは駈けながらも、僕は決して夢中では無かつた。何もかもチャンと目算を立ててやつてゐたのだ。一體これまで牢を破つた連中は、どれもこれも定つて海岸の方へ逃げたものだ。だから僕はそれと反對にひとつ山手の方へ逃げてやらうと思つたのだ。ことにボーモントにも海岸へ行くやうに話してあるからなほさうだ。僕は北の方へ逃げて、さうして英國兵たちには南の方を探させてやるつもりだつた。ところで諸君は、そんな暗夜にどうして南北がわかつたかと訊くだらう。それはかうだ。僕は風の工合で方角を知つたのだ。僕は牢獄にゐる間に、風が北から吹いてゐることを知つた。だからその風に眞直に向つて行きさへすれば間違ひなく北へ行けると思つたのだ。

さて、そんな工合にかまはずドン〳〵駈けて行く中、僕はふと前方に二點の黄ろい灯影を認めた。僕は思はず立止つた。さうしてどうしたものだらうと思案した。なにしろ僕は佛蘭西騎兵の軍服をソックリ着込んでゐるのだから、差當つての要件は變裝するための着物を手に入れることだ。で、もしあの灯がどこかの家から洩れてゐるものだとすれば、そこへ行けば何か着換の一枚位在るに相違ない。それにしても、肝心の武器の鐵棒を置きぱなしにして來たのは、返す〴〵も殘念だつた。さう口惜みながら、僕はいよ〳〵その灯の方へ近寄つた。

併し、直きに僕はそれが家で無いことを見てとつた。黄ろい灯かげは一臺の馬車の兩側に吊つたランプから射してゐるのだつた。さうしてその灯で、僕は自分が今廣い街道を歩いてゐるのだといふことを知つた。

先づソッと、叢の中に蹲んで樣子を窺ふと、それは二頭曳きの馬車で、少年の馭者が何やらひどく困つた風で下りてウロ〳〵してゐた。見るとかれの足下には、馬車の輪が一つ轉げてゐるのだ。

諸君！　今でも僕にはその夜の光景がハッキリ眼に浮ぶよ。湯氣を立ててゐる馬ども。その轡に手をかけてさも當惑した風を見せてゐる少年。三つの車輪しきや無くて、雨にひかつてゐる大きな黑い幌馬車。――――

すると僕が眺めてゐるうちに、馬車の窓が明いてなかゝらボンネットをかぶつた可愛いゝ女の顏がのぞいた。

『ねえ、お前どうしようねえ。』

と、女は、さもさも心細さうな聲で馭者を呼びかけて、

『旦那樣はキット途に迷つておしまひなのだよ。ことによるとわたしたちは、今夜一晩この野原で明さなけりやならないかも知れないよ。』

これを聞いた僕は、持前の男氣がムラ〳〵と湧いて來て、たまらず、だしぬけに聲をかけた。

『奥樣、なに僕が手傳つてあけますよ。』と云ひながら、僕は叢からノソ〳〵這ひ出て灯のそばへ進んだ。

藪から棒に妙な男が出て來たので、その婦人は思はず『キャーッ』と云ふ驚きの聲をあげた。少年の馭者も危く腰をぬかすところだつた。

もつともこれは驚くのが道理だつた。なにしろ土砂降りの眞暗闇をサンザ駈けて來たのだから、軍帽は破ける、顏は泥まみれ、軍服は茨でズタ〳〵になり、おまけに手足は血みどろと來てゐる。どう見たつて僕の姿はよる夜中、野原の直中で平氣で會へる人間ぢやない。

だが一時は驚いたものゝ、その婦人は僕の言葉つきや態度からして、別に心配になる人間では無いと直ぐに見てとつたらしかつた。それは彼女の眼色でわかつた。そこで僕は、

『どうもだしぬけにお驚かしてすみません。が、僕はいま偶然あなた方お二人のお話を立ち聞きしました。さうして何かお手助けをしてあげたいやうな氣がして參つたのです。』

と云ひながら、婦人に向つて恭々しく敬禮をした。

諸君！　われ〳〵軍人の敬禮と云ふものは、婦人連にとつて大した效目のあるものだ。見る間に婦人の顏色は和いで、その鈴をふるやうな美しい聲がかう云つた。

『それはご親切、ありがたうございます。わたくしどもはテーヴィストックを發ちましてから、ひどい暴風雨の中を參つたのでございますが、たうとう終ひに馬車の輪が外れてしまひまして、この野原の眞中で困つてしまつたのでございます。で、主人のチャールスが誰か手傳ひの人を探して來ると申して最前出かけたのでございますが、どうやら途に迷つたらしく、今もつて戻らないのでございます。』

これを聞いて僕は重ねて一言二言、何か慰めの言葉を婦人に向つて云はうとした。すると、その途端、僕は婦人の腰かけてゐる側に、アストラカン羊の襟をつけた旅行外套が置いてあるのに目がついた。自分の軍服姿を匿すにはこれは屈竟な品だと、僕は思つた。かう云ふ料簡を起した僕を、諸君は泥棒根性だと咎めるかも知れない。けれどもこの他にどう手段があらう？　必要の前には掟も無い。それに自分は今敵の國に居るのでは無いか！

そこで僕はだしぬけに婦人に向つてかう云つた。

『奥樣。失禮ながらそこに在るのはあなたのご主人の外套だらうと思ひます。實はこんなこと甚だ申しにくいのですが、僕はぜひとも目下それが欲しいので……』

と云ひざま、僕は窓から猿臂をのばしてその外套をムンズと攫んだ。（つゞく）

八面大王

大塚靜也

有明山は日本アルプスといふ大きな本陣を後ろに控へて、番兵のやうに立つてゐる信濃の山です。その高さは、富士山のざつと半分位しかありません が、形がよく似てゐるので、俗に信濃富士といはれてゐる有名な山です。面白いことには、此の山の頂上にも、富士山と同じやうに、金明水、銀明水といふ二種の水が湧き出てゐて、神水だとして登山者に珍重されてゐます。

さて、この有明山を四千尺ばかり登つた、丁度山のお腹のところに、中房といふ温泉場があります。今ではよく日本アルプスへ登る人達や、さうでなくとも登りいゝ山ですから、女の子供でも此の温泉へ出かけて行きますので春から夏へかけてなどは、なかなか賑やかになつて來ましたが、その中房に、間口が二間で奥行が三間、疊を敷くと、十二三疊もあらうかと思はれる大きな岩窟があります。その岩窟の上には、今では小さな觀音樣が建つてゐますが、中は眞ッ暗で、奥まで入つて行くのは、一寸氣味が悪い位です。

この岩窟は、皆さん、一體何だとお思ひになりますか。

むかし、桓武天皇の御代に、信濃に魏石鬼といふ恐ろしい名の鬼がゐました。或る日のこと、この鬼が、有明山へ登つて行きますと、丁度そこに温泉が湧き出てゐるのを見付けました。

「これは好い處だ、此處こそは、俺がいつまでも棲んでゐたいところだ。」

と、餘程温泉好きな鬼だつたと見えまして、魏石鬼は、多勢の乾分の小鬼どもをこゝへ集めて、自分は八面大王と名乘つて、たいそう威張つてゐました。

八面大王だなどといふだけに、この鬼の大將は、なかなか力が強かつたばかりでなく、不思議な魔力を持つてゐたものですから、自分勝手に雲を捲き起したり、霧を降らしたり、飛行機のやうに空中を飛び歩いたりしました。

たゞさうして山の中で暴れてゐるだけなら構はないのですが、大江山に棲んでゐた鬼と同じやうに、時々は、手下の鬼共を連れて、山の下の人里へ出かけて行きます。そして、お金や喰べ物を奪ひ取つたり、或はまた女や子供をさらつたりして、悪戯ばかりしたものですから、信濃の村村の人達は、八面大王をこの上なく恐れてゐました。

「何とかして退治してやりたい。」

さう思ふのですがお百姓達には、とても力が及ばないので、仕方がなく泣き寢入りを續けてゐました。それで、八面大王の方では、それをいゝことにして、そこらぢうを荒し廻つてゐました。

が、或る年のこと、皆さん日本歴史で習つたでせう、あの有名な坂上田村麿といふ豪い將軍ね、あの人が東の方にゐる悪い賊どもを平げようと、丁度信濃まで來ました。その時に、この中房の八面大王のことを聞き込んでしまつたのです。

『よし、きつと鬼共を一匹殘さず退治して見せるぞ。』と、坂上田村麿は、一日も早くみんなを安心させてやらうと決心しました。早速、副將の藤原緒嗣といふ人や、その他の部下達と、有明山の下の矢原莊といふ處へ陣取つて、

『今か、今か。』と好い機會の來るのを待つてゐました。

ところが、こちらは八面大王の方でも早くもそれを知つたものですから、なかなか油斷もすきも見せませんでした。

田村麿は、二度も三度も、山の中へ斥候を出して、敵の樣子を探らせましたが、何しろ八面大王は、恐ろしい魔力を持つてゐるので、たやすく近づけさ

うにもありませんでした。

そこで田村麿は信濃の國中の神樣に、『一日も早く鬼退治の出來さすやうに……』と、お祈りを始めました。近頃はスケートで有名な諏訪湖の傍にある諏訪神社や、今では松本市外の筑摩神社といはれてゐる八束の八幡樣へも、わざ〳〵お詣りしてお祈りを籠めました。そして、八面大王の方へは、わざと油斷をしてゐるやうに見せかけました。

すると、或る晩のこと、田村麿が八束の八幡樣の御堂でお祈りをしたあとで、休んでゐますと、そこへ白い衣を着た、品のいゝ一人のお爺さんが現はれました。そして、

『田村麿よ！』と呼びかけました。

田村麿は、その神々しい姿を見るとひとりでに頭を下げてしまひましたが、お爺さんは、透き通るやうな、力の籠つた聲で、

『田村麿よ、有明山の八面大王を退治しようと思ふなら、先づあの魔術を破つてしまはなければいけない。それには、山鶏の羽で作つた矢を使ふが宜いぞ。』と、いひました。

『はあ、有がたうございます。』

といふ自分の聲に、田村麿は、はつと目を覺ましました。見ると、そこには、誰ひとり人はゐませんでした。

『さては、八幡樣のお告げであつたか。』と、田村麿の喜び勇んだことは、云ふまでもありません。

早速、部下の者達と野山を獵して、長い〳〵尾の山鶏を何羽か射止めました。そしてその羽根で澤山の矢を作つて、それを部下にも分けてやつて、いよ〳〵八面大王退治に、有明山の岩窟へ向つて陣を進めました。

『ひゆう、ひゆう』と、恐ろしい勢ひ

で飛んで來る山鶏の矢面に立つた八面大王は、すつかり不意打ちを喰つたので、もう魔術を使ふ暇もありませんでした。手下の小鬼どもゝ俄にあわて出して、一生懸命に防ぎましたが、とうとう山の中で田村麿の軍勢と、大合戰を始めました。が、流石に威張つてゐた八面大王も、田村麿が力一杯に射つた八幡樣お告げの山鶏の矢に當つて、難なく射殺されてしまひました。

『大將が殺された。』と思ふと、手下の小鬼どもは、蜘蛛の子を散らしたやう、ちり〴〵ばら〳〵に逃げ出しました。そこで田村麿は、鬼の棲んでゐた中房の岩窟を隈なく探し、山の奥へ逃げた奴までも追ひかけて行つて捕まへて、その中で強さうな鬼三十匹ばかりは、みんな斬り殺してしまひました。

それから、その他の小鬼の雜兵どもゝそのまゝにして置くと、いつまた村の人達に惡いことを働くかも知れないと思つたので、懲しめのために、片ッ端から耳朶を削つてしまひました。

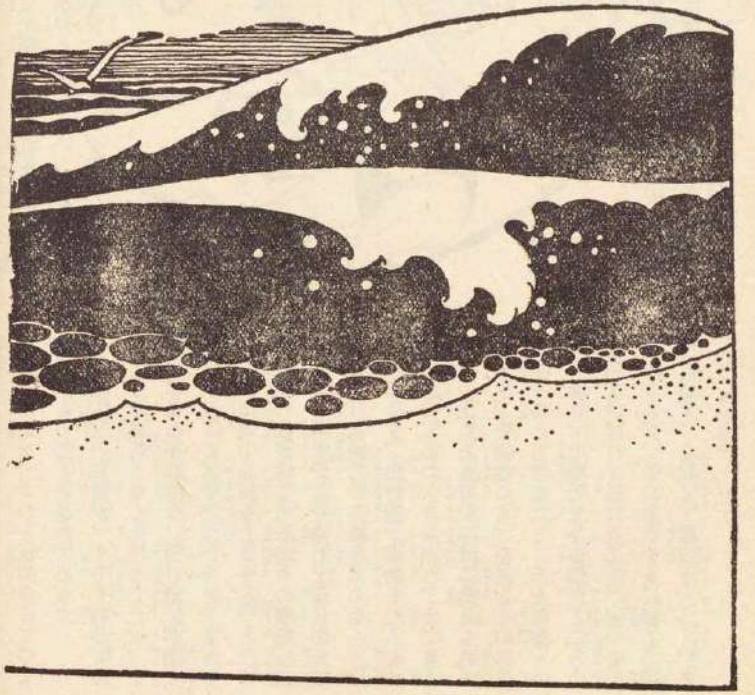
それからといふもの、この有明山にはもう鬼も山賊も出ず、山の下の信濃の村々は穩やかになりましたが、中房温泉として有名な今の温泉場は、この八面大王が見付けたところで、鬼どもが開いた道を、ずつと後の世になつて直したものだといはれてゐます。

八面大王の岩窟が、今でも殘つてゐることは前にも申し上げましたが、その傍にある不動堂は、田村麿の不動堂といはれてゐます。ついでに、もう少しこの土地のお話をしますと、そこには、田村麿が建てた石造りの藥師如來があり、兩軍が入り亂れて最後の合戰をした合戰澤といふ場所もちやんと殘つてゐます。田村麿が奉納した八面大王の持つてゐた大きな劍は、今でも有明山の上にある有明神社に納められてゐます。その他にも、小鬼どもの耳朶を削り落して埋めたところを耳塚といつて居り、山鶏の矢を作つたところは烏羽といはれて居たりして、遠い昔の出來ごとが、手に取るやうに詳しく殘つてゐて、なか〳〵面白うございます。（をはり）

佐渡が島

野口雨情

海に海鳥
鷗鳥
海の遠くは
どこの國



あれは越後の
佐渡が島
波々打つな
波打つな
佐渡は越後の
離れ島

鈍栗山（第八回）

沖野岩三郎

前號までの梗概。「定丸郎先生」と「赤瓜巾」といふ名のついた二疋の猿は、ロンドンへ行つてイギリスのビクトリヤ女皇樣の前で「お染久松」や「辨慶牛若五條の橋」などのお芝居をやつて女皇樣を感心させたので、御褒美に勳章と大禮服をいたゞきましたが、この二疋の猿が水兵さん達につれられてロンドン塔を見物に行きますと、そこで四國猿に出逢ひました。この四國猿から人間たちが詐欺ばかりやつてゐることを聞かされました。この話をチョンから傳へ聞いた山猿たちは、自分たちも一つ人間のまねをしてやれと思つて、裏山のお稻荷さんへ油揚だのお振りだのを奪りに行かうと相談をきめました。

お供物

鈍栗山の麓に、小い杜があつて、其所にはお稻荷さまの社が祭つてありました。

或日の朝はやく、法性院は姪の小一條院の局を呼んで、

『小一條院、すまないがネ、私は今朝少しお腹の工合が惡いから、あの稻荷の杜へ行つて、女圍梨を取つて來てお呉れ。』と申しました。

小一條院の局は伯父さまの言ふ事だから、直ぐ承知して、麓の方へ枝から枝を傳つて降りて行きました。

行つて見ると、社の屋根の上に枝を伸した大きな女圍の梨の樹がありました。で、小一條院はその一の枝から二の枝へ、二の枝から三の枝へと攀ぢ上つて、一番旨しさうな實を伯父さんに取つて行つてあげようと思つて、枝のあちら、こちらを見廻してゐるうちに、人間の話聲が聞えたので、見つかつては大變だから、急いで枝と枝との間へ身體を隱してゐました。

『此の宮は私のものです。』と言つたのは、頭に黑い烏帽子を被て、身體に眞白い着物を着た神主さんでした。

『いゝえ、これは私のものです。』と言つたのは、頭を眞白く剃つて、身體に眞黑い着物を着たお坊さんでした。

神主さんと、お坊さんとは、稻荷大明神の前まで來て、こんな事を言つて爭つてゐました。

小一條院の局は枝の上から、面白い喧嘩が始まつたぞ、人間の喧嘩は、矢張り吾々猿共のやうに、引搔合か知ら？　と思つて、おつと見てゐると、神主さんは、

『稻荷大明神といふのは、山城の憑の森に御本社があつてこれは其の末社です。山城の稻荷大明神は官幣社で、日本のお宮さんです。佛教のお寺ではありません！』と言ひました。するとお坊さんは、

『いゝえ違ひます。稻荷さまと申すのは、印度の吒枳尼天といふ佛樣です。吒枳尼天といふ佛樣は狐が大變お好きですから、いつも狐が玉を銜へて、其のお側に居るのです。』と言ひました。

『いゝえ、違ひます。稻荷樣は宇賀の魂、或は御食津の神と申す神樣で、素盞男の尊の御子樣です。それを印度の佛樣な

ぞと、失敬千萬な事を言ふものではない！」

神主さんは、さう言つて白い着物の袖をまくりました。すると、お坊さんも黑い着物の袖をまくつて、

『さういふなら、僕の方にも言ふ事がある。稻荷樣には必ず狐を一緒に祭つてあるぢやないですか。今から一千百十年の昔、平城天皇の大同年間に、弘法大師が京都で東寺といふ寺を建てゝゐる時、その門の前に現はれた稻荷大明神のお姿は、稻を荷つて、手に鎌を持つたお爺さんぢやありませんか。あれが宇賀の魂とか御食津の神とか云ふお方でせう。だから宇賀の魂は狐をお供につれてはゐません。所が印度の吒枳尼天は狐に乘つてゐます。狐は吒枳尼天のお使です。』と言ひました。

『だつて、日本中何所へ行つても、稻荷大明神には、赤い鳥居と狐とが必ず付物になつてゐるぢやないか。この馬鹿奴！』と神主さんは呶鳴りました。

『違ひます。昔、神佛混合といつて、日本の神樣と、印度の佛樣とを一緒に祭つてあつた頃、吒枳尼天樣が大變よく流行るので、稻荷樣が、御食津の神といふ名である所から、それを『御狐の神』だと云つて、吒枳尼天の狐を自分の方へ持つて行つたのです。あなたは日本の神樣の神主でありながら、天照皇大神の甥御に當らせ給ふ、御食津の神を、『御狐の神』だなんて云つて、狐にしてしまつても善いと思ひますか。』

お坊さんも呶鳴り返しました。

枝の上に居た小一條院の局は、二人の喧嘩を面白いと思つて聞いてゐました。

『理窟を言ふな。何といつたつて、稻荷大明神は正一位の位があるんだ。內閣總理大臣よりも、陸軍大將よりも、もつと偉いんだぞ。印度の佛樣なんか、勳八等も貰へないや。お釋迦樣は從八位か從九位か、そんな位もありやァしないだらう。』

神主さんは握り拳をお坊さんの前に突出しながら言ひました。

『私は喧嘩は大嫌ひです。だから殿り合ひは御免蒙りますが、あなた方は金毘羅さんを金刀比羅とごまかしたり、吒枳尼天の狐を『御狐の神』だと云つて横取りした事だけは、默つてゐませんよ。』

『默つてゐないでも善いや。人間といふものは馬鹿な者が多いんだから、金刀比羅でも金毘羅でも、稻荷でも吒枳尼天でも、そんな事はどうでもいゝんだ。金ぴかの立派な宮さへ建てりやァ、有難がつて拜むんだ。お坊さん、あなたは口惜しいか知れないが、日本中の神樣で、讃岐の金刀毘羅と、伏見の稻荷樣とが、一番澤山のお賽錢があがるんだよ。金毘羅だの吒枳尼天だのつて、そんな印度の佛樣は、さツさと印度へ歸つて行けばいゝぢやないか。』

神主さんは、又た拳固をお坊さんの鼻のさきへ突きつけました。お坊さんは餘程口惜しかつたと見え、

『それ程日本の神樣が偉いお方なら、何も狐のやうな獸をお弟子にしないでも善いでせう？』と言ひました。

『うん、稻荷大明神は官幣社だぞ。狐なんか無くつても大丈夫だ。欲しけりやァ、持つて行き給へ。』と言つて、神主さんは、稻荷大明神の前に祭つてあつた二疋の瀨戸燒の狐を攫んで、地べたへ思ひ切り投げつけました。

『さうですか、では私はこれを貰つて歸つて、私の寺の庭に祭つてある吒枳尼天の前へ飾つて置きます。』

お坊さんは土まぶれになつた二疋の狐を拾つて懷へ入れて、西の方へさつさと歸つて行きました。

面白い事になつて來た……と思ひながら、小一條院の局は枝の上から下を見てゐますと、神主さんは、歸つて行くお坊さんの後姿を睥みながら、ぶつ〳〵言つてゐました。

其所へ十七八歳位な美しい着物を着た娘が風呂敷包みを抱えて來ました。小一條院の局は產れてこのかた、まだ一度も見た事の無い美しい人間の娘を見ましたので、心の中で、

『まア、何といふ美しい人間でせう！』と感心してゐますと、其の娘は風呂敷の中から、旨しさうな小豆御飯のおにぎりと、豆腐の油揚とを小い箱に一ぱい入れて、それを稻荷大明神の前に供へようとしたが、

『おやく、このお稻荷樣には、狐さんが祭つてゐないぢやないの？　これはお稻荷樣ぢやア無いのか知ら？』と言つて、社のぐるりを見廻しました。

すると、女圃の梨の幹に凭れて、默つて娘のすゐ事を見てゐた神主さんは、

『お孃さん、あなたは其の御馳走をお供へになるのですか。』

と訊きました。

『えエ、私の所は今日から酒屋を始めましたの。ですから成るべく多勢のお方が、お酒を飲んで、へべれけに醉拂つて下さるやうに、此所の狐樣にお願ひ致さうと思つて、お參り致しましたのですが、狐さんが居なさらないから、町のお寺に祭つてある吒枳尼天樣へでもお供へ致しますわ。』

娘は折角風呂敷包から出したおにぎりと油揚とを、又風呂敷に包まうと致しました。

それを見た神主さんは、少々周章てたやうに、

『お孃さん、其の御心配はいりません。このお宮には瀨戸燒の狐だの、木彫の狐などは祭つてありませんが、本當の生きた狐が祭つてあるのです。御覽なさい、此所に圓い穴がありませう。此の穴の中に白と黃と二種の狐が居ます。だから其の御馳走を此所へお供へなさいまし。』と云ひながら、床下の板に切り拔いてある圓い穴を指さしました。

『さう？　では此所へお供へしますと、狐さんはそれを召し上るんですネえ。』

『えエ〳〵、皆な召し上りますよ。そして、あなたのお願ひは何でも聞いて下さいます。』

『まア、嬉しい。私、少々お金が欲しいんですの。』

『では、さう言つてお願ひなさい。屹度大金持になりますよ。』

『有難うございました。』

娘は穴の側へおにぎりと油揚と、一錢銅貨一つとを供へて、頻りにほしやく〳〵と願ひごとをしてゐました。

『さア、お孃樣、御一緒に歸りませう。』

と言つて、神主さんは鳥居の方へ娘さんと一緒に出て行きました。

それを見た小一條院の局は、

しめた！

と思ひながら、女圃の梨の枝からとび降りて、其の小い箱に入れた、お握りと油揚とを皆な引つ攫んで、山の方へ逃げて來ました。

一町ばかり來たと思ふ時、ふり返つて見ますと、神主さんは穴の所へ戻つて來て、頻りにあちらこちらを見廻してゐましたが、又た鳥居の所へ走つて行つて、

『お孃さま、お孃さま！』

と呼びました。

呼ばれた娘も走つて來て、穴の中を覗き込んでゐました。

小一條院の局は、

『馬鹿な人間共だ。私が持つて來た事を知らないで、本當の狐が食べたのだと思つてゐるんだ。』と思ひながら、一生懸命に鈍栗山へ走つて行きますと、法性院は小一條院の局の歸りが、あまり遲いので、大へん心配して、待つて待つて待ちくたびれてゐました。

『伯父さん、女圃の梨よりも、もつと〳〵旨しいお馳走ですよ。』

と云つて、おにぎりと油揚とを出しますと、法性院は吃驚して、

『これは、どうしたのかい？』と言つて、小一條院の局の顏を覗き込みました。

そこで、小一條の局は、神主さんとお坊さんとの言ひ爭ひのことを詳しく話しますと、法性院は、腹を抱へて笑ひながら、

『そいつは面白い、さア、明日の朝から。毎朝々々御馳走が

食べられるぞっ』と言つて喜びました。

そこへ青蓮院が來て、

『もう、チョン君の講義を聽きに行く時間です。』と申しましたので、其の御馳走をチョンの所へ持つて行つて一々說明しつ貫ひながら食べようと言つて、法性院はそれを小一條院の局にもたせて丘へ出て行きました。

行つてみると、もうチョンは岩の上に坐つて皆なの來るのを待つてゐました。

法性院は小一條院の局から聞いた話を詳しく話しますと、チョンは、

『それは屹度人間達の大喧嘩の原因になるにきまつてゐます。』と云つて笑ひました。

法性院は其の御馳走を皆なで、少しづゝ分けて食べながらチョンに說明を賴みますと、チョンは、一々叮嚀に

『其の赤い色のが小豆で、白いのが米です。米といふのは、あの稻から取るので、生の時はブリ〳〵する堅いものだが、人間は何でも火で煮たり燒いたりするから、こんなに軟かくなるのです。』と說明しましたが、豆腐の油揚は、どうして作るのだかそれは知りませんでした。

御馳走を食べてしまつたあとで、法性院は、

『チョンさん、あなたは今、人間達が大喧嘩をするだらうと云ひましたが、それは全體どんな事ですか。』と尋ねました。

『それはネ、かうです。毎年此月の廿二日に、あのお稻荷さんと、村の吒枳尼天とのお祭りがあるのです。今まで毎年毎年、其の祭日になると、神主さんの方では、吒枳尼天は印度の佛樣だ。稻荷樣は日本の御食津の神樣で、正一位の位があつて、陸軍大將よりも、內閣總理大臣よりも偉いんだと言つて威張るし、吒枳尼天の方では、稻荷樣は、御食津の神樣と云ふ名であるのを幸ひに、吒枳尼天のお使の狐を盜んで行つて、御狐の神樣だと云つて、ごまかしたのだと言つて罵るのです。所が今年は稻荷樣に狐が無くなつたので、吒枳尼天が流行ります。すると稻荷樣の方では默つてゐません、御覽なさい人間達が大喧嘩を始めますよ。』

チョンの說明を聞いた法性院は、にこ〳〵笑ひながら、

『私は日本の神樣の稻荷大明神の味方をしてあげます。』と云ひました。

『さうとしなさい。人間共の喧嘩だから、人間同志にさせて置くがいゝでせう。』とチョンは手を掉りながら云ひますと、法性院は、

『實はかうするんですよ。』と言つて、チョンの耳の所へ口を寄せて囁きました。

『さうですか、それは面白い。やつて御覽なさい。』とチョンもそれを賛成しました。

其時チョンは着てゐたチャン〳〵コのポケットから小い箱を取出しました。

『これはマッチと云ふものです。人間はこれから火を出して、いろんなものを燒いたり煮たりするのです。』

かう云つてチョンは、其の一本を擦つて、パッ！　と火を出して見せました。

『そいつは面白いものを持つて來た。さア、今日は定丸郎先生や、紅頭巾君の話は止して、其の火を柴にたきつけて、ゆつくり溫まりませう。』と青蓮院が申しますと、一同は大賛成で、枯枝を折り取つて來たり、枯ッ葉を集めて來たり、大騷ぎをしました。（つゞく）

アラビヤン・ナイト號豫告

═秋季增大、十月號═

『金の星』は春と秋には、世界で最も有名な童話作家の作を集めて增大號として發行することになつてゐます。これは『金の星』の一つ誇でありまして、いつもすばらしい歡迎を受け、數日ならずして賣切になる有樣です。

で次號の十月號には、その作者は何人であるかは知られて居りませんが、千年の昔から語り傳へられてゐるアラビヤの物語りで、世界中にこれ程面白いお話しはないといはれる程有名な『アラビヤン・ナイト』を紹介することにいたしました。

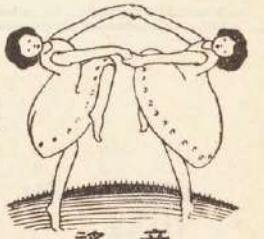
全くこれ程面白いお話はないといつて差支へありますまい。アンゼンセンのお話でも、グリムのお話でも到底この『アラビヤン・ナイト』には比べられない程、何れも不可思議な面白いお話ばかりです。一名『千一夜物語り』ともいはれて居るもので、アラビヤの王樣のお妃が、千と一夜の間この面白いお話をしたので、そのために殘忍な王樣の心が改まつて、此のお妃がすつかり氣に入つてしまひ、殺するのみ止めたといふ傳說のある物語りです。

原作は非常に澤山お話の數がありますが、その中から特に傑作ばかりを集めました。しかしどれも長篇でありますから、話の數を澤山に出すことが出來ませんので、特に代表的なものばかりを集めました。

九月十一日に發行になりますから賣切れませんうち、いち早くお求め下さい。これまでにない多い頁數で、しかも定價は四十錢です。

（主なる讀物を擧げますと、凡そ次の通りです。）

□シンドバツドの航海……小島政二郎
□化石島の話……中島孤島
□漁師と惡魔……秋庭俊彥
□ペルシヤの王樣……西川勉
□アリババと四十人の泥棒……三宅房子
□阿螺田と不思議なランプ……山野虎市
□魔法の馬……水谷まさる
□商人と魔の話……霜田史光
□磁石島へ行つた坊さんの話……齋藤佐次郎



童謡

選 野口雨情

（大人篇）

晝の月

東京市北山伏町　金原　五郎

昨夜の桑は
何食べたろか
しまひ忘れた
かたわれ月が
電信柱に
かゝつてる。

子供子供
みんなではねろ
わすれたわすれた
かたわれ月が
電信柱に
かゝつてる。

お星様

名古屋市北鷹匠町　大空　夏子

硝子窓から
見えますの
蚊帳の中から
見えますの
たつたひとつの
お星さま。

まあ、よく光る
お星さま

三本杉

仙臺市名掛町　賞野　迷雀

三本杉は　西の山
夕やけ小やけの
ねるとこだ。

日暮

山口縣吉田村　佐野　操

お家へかへろか
まちましよか
寂しい日暮の
並木路

街へ出て行た
父さんが
お馬でかへるを
待ちましよか。

八百屋のお鳩

下關市　金子　すゞ

おやゝ鳩子ばと
お鳩が三羽
八百屋の軒で
クックと啼いた。

茄子はむらさき
キャベツはみどり
いちごの赤も
つやつやぬれた
なあにを買はうぞ
しろいお鳩

八百屋の軒で
クックと啼いた。

けんくわ

神戸市外西灘村　十河わたる

「やーいやーい
米屋の三ちやん
はけあたま
南京豆六つの
はけ頭」

「心配〳〵
すーるない
鐵鐵玉の
傷あとだい。」

柿の實

松本市幅上町　小川　勝太

姉さん死なれてまる一年
裏のお背戸の柿の木に
あーかい實ばかり
なつてるる。

お倉

東京市豪徳町　吉川こういち

お倉の　白壁
はけちよろけ
お窓は　蜘蛛の巣
ごみだらけ

しりきれとんぼも
そつと來て
へのへのもへじに
止ーまつた。

河の石なげ

仙臺市荒町　大友　喜助

良い子の石は
とん〳〵はずむ
意地惡子どもの
石ころは
なけてもなけても
みな沈む。

ほたる

新潟縣中蒲村　杉山　たつを

ほう〳〵螢の
豆提灯
ほう〳〵螢の
夜廻りさん
暗い夜中を
火の用心。

小作家の雨

朝鮮馬山鮮　中村　燭

濱の草ほこ
小作と小草　小雨はらはら
鹽辛い雨
麥時は麥ばかり
稗時は稗ばかり
濱の草ほこ
小作と小草　小雨はらはら
鹽辛い雨。

夕燒田圃

廣島市陽野校　岡田　義祐

夕燒田圃に
風が吹く
蛙はコロ〳〵
ころけてる

お百姓三人
泥の足
鍬を擔いで
歸つてく。

小さいマヽさま

北海道美唄炭山　小玉由紀子

青いおめゝの御人形さん
青いおべゝを着せましよか
赤いカーミの御人形さん
赤いおべゝを着せましよか
小さいマヽさま、君ちやんは
くびをまけ〳〵考へた。

バラ〳〵雨

東京市宇田川町　川崎　夜雨

雨に降られて
皆が逃げる
カン〳〵坊主に
手をあてながら
駒下駄バタ〳〵
鍵チヤンも逃げる
雨に降られて
皆が逃げる
大きな鞄を
小脇にかゝへ
鞋ドシ〳〵
郵便屋さんも逃げる。

お歌

東京市上根岸　新井アサ子

お歌もうたへ
高う低う
銀のお雨が
一本、二ほん

お歌をうたへ
高う低う
泣いてる子供が
ねんねする

お歌をうたへ
高う低う
鳴かないお蟲も
ねんねする。

（子供）

とり

茨城縣若柳校　粟野　福二

とりがとやの上へあがつて
ねむつてる
くびをだらりと
ねむつてる。

遠足

山梨縣鳴沢校　齋藤　繁雄

雨がふつて
遠足でな
雨がふらねばよいがな
晴て日本晴
雲がなきやよいがなあ

今日とあしたと
てればよい
雨がふらねばよいがな。

初夏

香川縣水田校　石丸　滿行

麥のほが黃色に
なりかけた
子供がはだかに
なりかけた
ねこが日なたぼこを
やめかけた。

カナカナ蟬

東京市武蔵校　池戸キヨ子

お寺の前の松の木で
カナカナ蟬が
ないてゐる
カナカナぜみの
なくこゑを

お小僧さんも
きいて居る
カナカナ
ひぐらし
日がくれる。

みの蟲

高知縣中村町　岡澤芙美子

みの蟲かさ蟲
顏を出せ
西のお町が
火事さうな
お山の向ふが
眞赤だぞ
みの蟲かさ蟲
顏を出せ。

こばと

横浜市北方町　久保　末子

屋根のうへの
ゴロッポこばと

日さま入つたと
ゴロッポ鳴いて
石段かぞへて
ポッポとおりる。

月夜の晩

長野縣長塩校　山田　廣重

月夜の晩に
蛙がないた
なく子に聞かせて
ねむらせやう
けこ〳〵こと〳〵
蛙がないた
なく子も聞いて
ねんねしな。

しずかな晩

白藤校　八幡　房夫

竹藪もうごかない靜かな晩に
たれかが口ぶえをふきながら

どこかの戸をあけた。

猫

青山師範附屬校　秋山田鶴子

猫がのびした
せのびした
うーんとのびした
せのびした
あと足後に前足前に
猫がのびした
せのびした。

とーしみとんぼ

大阪市　田島　政信

こんぺいとうの草に
とーしみとんぼ
ほそいからだで
とまつてる。

ほたる

熊本縣飯東校　藤崎アキミ

山から出てきた
ほたる來ひ
草から出てきた
ほたる來ひ
みんなそろつて
とんで來い。

あめ

靜岡縣沼津校　大竹　弘

雨こんこん
ふつたらば
お庭のすみの
ほうづきに
ほつんほつんと
おちてきて
下のアリさん
くびかしけ
しんぱいさうに
かんがへた。

教室の窓

埼玉縣山口校　雨宮伊三郎

教室の窓から
みたら
青ぞらを
飛行機三だい
とんでつた。

ながせ雨

香川縣十河校　神田ミツエ

ながく〳〵つゞく
ながせ雨
毎日く〳〵
ふりどうし
天の川が
かやつたのか。

車井戸

愛媛縣郡井校　飯野　芳夫

から〳〵ころ〳〵車井戸
くるりと廻つて一ぱいくんだ
ころ〳〵廻つて二はいくんだ
から〳〵ころ〳〵車井戸。

雀のおやど

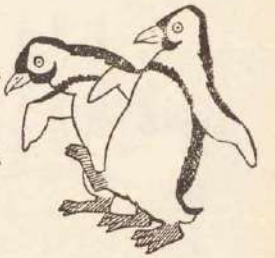
香川縣水田校　堀上常太郎

雀のおやどは
どこじやいな
かはらのあいだの
すみのほうで
かあさん一所に
ねてゐます。

世界をまはつて

東京府蒲田校　永野　ツル

私も男であるならば
汽車のうんてんしゆになつて
父さん母さんお客樣に
世界をまはつてみたいなあ。



幼年詩

若山牧水選

苗屋（賞）

東京西巣鴨町時習校高一　岡添喜久子

向ふから苗屋が
苗を
賣りに來た。

評、すつきりとして面白い。（牧水）

かくれんぼ（賞）

大阪府泉南郡谷川校尋三　北川國一

かくれんぼして
僕がすすきのまん中でにこ〳〵して
かくれてゐたら
たあれも
しらなんだ。

評、青いすゝきのまん中でにこ〳〵してゐたあなたの眼。（牧水）

雨（賞）

和歌山縣東牟婁郡明神校尋四　山木千代治

今日の天氣は
やつぱり雨か
母さん傘は
どこにある
おえんのすみに
たてゝある。

評、雨降りの日の氣持も景色もよく出てゐる。（牧水）

母さまのお仕事

岩手縣水澤校尋六　小林信子

母さまお手手はつかれない
そんなにお針をうごかして
私が上手になつたなら
お針の手つだひ致しませう
母さまお手手はつかれない。

評、優しい心と優しい調子。（牧水）

せみ

山梨縣北巨摩郡村山西校高二　山本みや子

どての向うのあの山に

綴方

編輯部選

しんだつばめ（賞）

愛媛縣越智郡波方校尋六　瀬野トキヨ

私が朝おきておもてへ出たときは、まだうす暗かつた。みかんの木のところまで行つて戸口へもどるとバタ〳〵と音がしたので下を見ると、つばめが下へ降りて、そこらをとび廻つてゐた。これはおかしいと思つてよく見ると、そのそばにもう一匹のつばめが、息をせはしさうにしながらころがつてゐた。私はびつくりして『あら――』と叫ぶと内からお母さんが『やかましい』といつた。『さうじやけんどすゞめじやない、つばくろがしんだやうにしてころけておるのに』といふと、『えゝどこい』といつてお母さんもたまげて出て來た。『ころん〳〵』とそのつばめの方を指すと『おやねや、われがさはぐはずよ』といつた。よく見ると尾のあたりから黄色いものを出してゐた。わたしらがねき（そば）へよると、とばうとしてもヂタバチするが、足も折れてゐるのか立てない。あせるとあせる程よけつらさうにする。一匹のつばめはやつぱりそこらをとび廻つてゐる。『あれが親かおんかじやないかな』といふとお母さんは『はなれとつてん』といつた。二人は遠方から見てゐると、そのつばめはしんだやうにしてゐるつばめのそばに下りてきた。するとしんだやうなつばめは又とばうとしたが、いよ〳〵つらさうに見えたので、かはいさうに猫でもくうたらいかんからと思つて、わらで巣のやうにこしらへて二階のやねへもつて行つてやつたら、『ぬくもつたらとぶわい』とお母さんもいつた。學校へきても、あのつばめはどうしておるだらうかと思つて氣になつてならなかつた。かへるとすぐにお母さんに『いきたかな』とたづねると『たうとうしんでしまつたいや』といつたのでそのつばめをよく見ると、くもの巣が羽に一ぱいついてをつたので『くもにすはれたんじやらうか。』といふとお母さんも『まだこじやけんねや。』といつた。私はそれをみかんの木の下へ埋めてやりましたが、あのつばめはどうしてしんだのだらうかといつも氣になります。二階のやねにはその巣がまだある。

植木買（賞）

香川縣木田郡氷上校尋六　鈴本薫

朝から青天だ學校で、始終市の話をしてゐたが授業がすむと走つて歸つた。そして僕とおとうさんと弟と三人で植木買ひに行つた。

見せ物小屋で鳴らす鐘やかるわざの樂隊等の音が聞えてくると急に氣が浮き立つて來る。老人も小供もぞろ〳〵と歩いてゐる。其中を酒を飲んで眞紅な顏をした人がふら〳〵わけてくるので僕は急いでよけた。三人は人込の中を通りぬけてやう〳〵植木を賣つてる所へ來た。

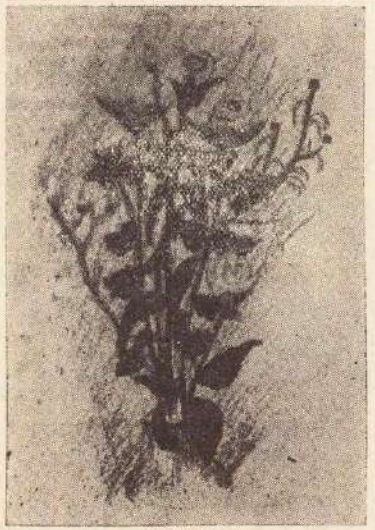
南手から見て行きはじめ、だん〳〵見て行つて今度は北側へ廻つた。ふとお父さんが止つて、

『この松は幾らか』

と尋ねると、賣つてゐる人は、

『これは三圓……どうです買ひませんか』

『さあ高いわ』『ではいくらに買ひますか』と言つてたもとに手を入れた。『そりや分らん』とお父さんは言つて次の所へ行つた。そこには大



花の生活（賞）

名古屋市五尋校　藤井清

昨日はせみが鳴いたけど
今日は鳴かない雨が降る。
評、この調子も自然で楽かい。（牧水）

ありこの町

山形縣山邊校尋五　笠原　いし

ありこの町は
にぎやかだ
石のあいだのありの町
行つたり來たり
ありの町。
評、蟻の町とは面白い。（牧水）

鳥指し

東京市赤坂區青山校高二　庄司　英晃

こんもりと繁つた
森の間から
鳥さしが一人
もち竿を持つて
耳をすかしながら
出て來た。
評、少し氣どつた所がある。（牧水）

きなもみじがあつた。おとうさんは、『このもみじがよい』と言つてゐると其所へ二人の人が來てしきりにもみじをながめてゐたが、『おいこのもみじは何程だ』と言ふと東の方で買つてゐた人が來て『二圓五十錢、そうかそりや高い。まつとまけておけ、さうでないとお前の損だ。雨が降るかも分らんぞ』と言ふと賣る人はじつと考へてゐたが手を打つて『ではまけて二圓。』と大聲で言つた。『二圓は高い一圓十錢ぐらゐにまけておけ』『そりやまかりません』『ではまけんのだな』『へい』木賣は小聲で答へた。すると二人は東へ行き出した。木賣は『おーい〳〵ではまけておきます』と言ふと二人は又あとへ引きかへした。そしてそれを買つてどこかへ行つた。僕等はづつと東の方へ行つて、細長い木はいくらかとお父さんが言ふと、『これは三圓』と言つた。『これはきれいなけれど高い。』と言つてそれも買はなんだ。空は曇つてゐるので黑く見える。そして所々に星が光つてゐる。もう夜である。其へんをぶらついてゐるとうす寒くなつた。そしてしまひにざくろの木を二三本買つて歸つた。歸つて見るともう夕飯がすんでゐた。

先生へ

朝鮮大邱本町校尋六　中山　貞子

先生、今何をしてゐらつしやいますの。先生がいらつしやつてからといふもの、嘘の一ぺんも私達は愉快な日を送つた事はありません。私は先生がお立ちになる二三日前の事を思ひ浮べては、一人で涙ぐんでゐるのです。刀水園へ連れて行つて下さつたり、達城公園へ連れて行つて下さつたりして、色々と私達をなぐさめて下さつた先生のお心を、ほんたうにありがたく思つてゐます。あの時は、私は先生がお行きになる事を忘れてしまつて、樂しく、愉快に、舟をこいだり、デッドボールをしたりして遊びましたわ。そして晩に音樂會へ行つて、海老名さんの上手なピアノや、矢追さんのきれいな歌を聞いて家にかへり、ぐつすりねこんでしまひました。夜が明けて目がさめると、お母さんが、『先生が今日おたちになるんでせう』とおつしやつたので、初めて氣がつきました。それでしたくもそこ〳〵に飛んで家を出て、驛前までくると、永井さん達はもうきてゐて、私の方を見て、『中山さんおそいね』といひました。私は笑ひながらそばへよつて行きました。空までが悲しさうに曇つてゐました。先生が、私達の前に來て『皆さんさよなら』とおつしやつた時、私は涙を出すまいと思つてゐましたが、思はず涙が流れました。空からも雨がおちました。先生は皆の涙に送られて、安東へいらつしやいましたわね。ほんたうにあの時は悲しいお別れでした。もうおあひすることもできないでせうね。ですけれど、いつまでたつても、教へていただいた時のやうに思つてゐて下さいまし。夏休みが來たら　ぜひおいで下さいまし。お宿にいつでも致しますから。お待ち申してゐます。去年の夏休みは、あまりうれしかありませんでしたが、今年は夏休みがうれしくてたまりません。待ちあこがれる心をおししづめて待つてゐます。では、どうぞ御用心なさいませ。さよなら。

牛乳びん

水戸市上市神崎町　青山　豐

僕の牛乳びん
小さくて
かあいゝな。
評、ほんとにかあいゝなア。（牧水）

さかなやさん

不明　山川　貞

こんちはとやつて來たさかなやさん
ことはられてきのどくだ。
評、きのどくげな君の顏。（牧水）

自轉車

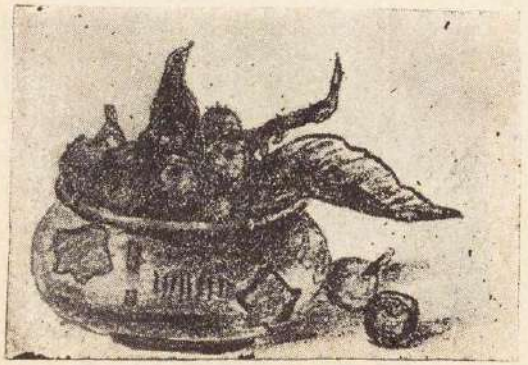
茨城縣滿蹉郡若柳校尋四　佐口　春一

おれそばを
自轉車が
通りぬけたら
着物から風が出た。
評、鼻からは何が出た。（牧水）

雨上り

香川縣木田郡氷上校尋六　白井　文一

小さい木



靜物（賞）

名古屋市熱田校高一　橋本　久雄

雨が上つて
露ばかり。

あやめ

茨城縣稻敷郡
鳩崎校尋六　川崎とみい

植物園の
あやめの花
姉さんの
帶のやうに
きれいだ。

ある時

東京府王子町
第二校尋六　渡邊　光子（てる）

上手に出來た　寫生
妹が家を切りぬいちやつた
妹ぶつて、泣いちやつた
妹と二人で泣いちやつた。

お月夜

東京府野方村
上高田一〇一　堀　耕三

お月夜の町は淋しいね
貝がらみたいな家ばかし
青々白く光つてる。

ねえさんの顔

千葉縣東
金校尋四　篠原　平介

ねえさお顔はどこ行つた
遠い遠い千葉行つた
ねえさんお顔は見えぬけど
ねえさん着物を見た時は
頭の中へ見えて來る。

夜

千葉縣東
金校尋四　猪野　芳雄

森のくさ木はみなねむつた
この時自動車が一だい
いせよくはしつた
ほしはぴかぴかひかつてた。

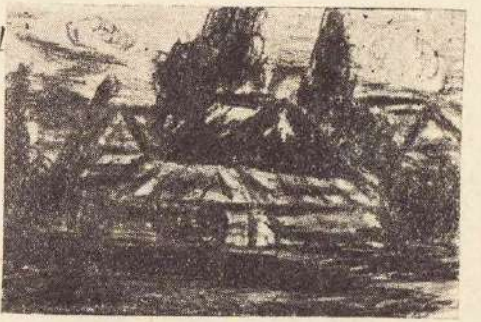
雨

和歌山縣東牟婁
郡田原校尋五　荒木　克代

雨がよこになつた
つばめが
すにかくれた。

ひよこ

京都府熊野郡
川上校尋五　野村良之介



家（賞）　香川縣
氷上校尋六　田中　文八

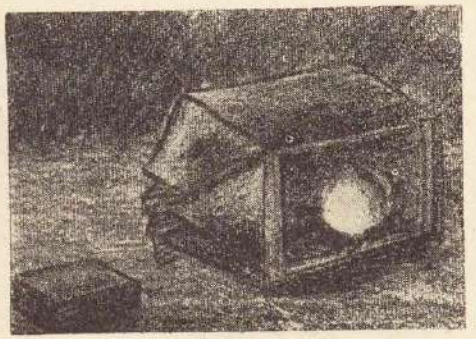
妹に『人形さんの着物をやるさかいさうじしてんか』といつたら妹が『きつとおくれや』といつて、さうじをしてくれましたので、私は着物をやつたら、妹はお母さんの所へ見せに行つたので、私はしかられた。

赤い花

東京府岩淵町赤
羽岩淵校尋五　稲垣よし子

丁度お母さんが亡くなる二日前すつかりお庭があれ果てたので、姉さんと私は奇麗に掃除しました。するとあんなに汚なかつた庭が見ちがへる樣になりました。草を取つたり、ごみを取かたづけしたため空地だらけになつてしまつたのでお母樣が、『あいてゐる所は草花の種をおまき。』とおつしやつたので、二人は大きな百合の樣な花と、ぼたんのやうな美しい花と、小さな花咲く種を買つてきてまいた。そして垣根をしたら大變春らしくなつたので大喜びでした。それから二日たつた神武天皇祭の朝、『あしたは摘み草に行かうね』と前の晩まで語つてたお母さんが、のういつけつで口をきくことが出來ないで口から泡を出して、死んでしまひました。死んだ顔はまるで、佛樣のやうにやさしかつたので、私達が解をたてゝ泣きましたが、返事はありませんでした。

もう二月もたつて、いくらか淋しさもなれた今頃になつたら、私達が喜んで まいた草花がめを出して可愛いい花が 咲きました。誰もかまはずホーつておいたので草も、草花も、ゴチヤ〳〵にまじつた中に咲いた花は、それはそれはみじめでした。あんなに大きく咲く花が、まるでまつかな小さいつゝじのやうでした。莖はヒヨロ〳〵して何時も弱かつたお母さんの樣でした。『佛樣に上げやうかしら』と私が言つたら『どうぞ上げて下さい』といふやうに、ジヨンボりとうなだれて居たので、たつた一ツの花を佛樣に上げました。お母さん〜きつと喜んで居るでせう。



マツチ（賞）　山梨縣奥野田校尋五　雨宮　竹男

みいちやん

東京府西巢鴨
庚申塚林方　日向　桃子（十三歳）

お母さんと私とおし事をしてゐるとみいちやんが紙切をいぢりながら、お部屋に入つて來た。そして、私のそばにすわつて『おじいちやん泣き泣きごはんたべた』と一人言をいつてゐる。私はお母さんに『なんでせう、泣き泣きごはんたべたつて』ときいたらお母さんが『この間おじいさんのこじきがきた時、花やと見にいつたんですつて。その時そのおじいさんが誰かにもらつたごはんをたべながら泣いて居たのですつて。その事でせう』とおつしやつた。『まあかはいさうなおじい

ひよこが一羽しんじやつた
ちんぱひいてたのがしんじやつた
お書頃にしんじやつた
足をながくしてしんじやつた
足をそろへてしんじやつた
目をつぶつてしんじやつた
かわいさうにひよこがしんじやつた。

東京西巣鴨時習校尋三　岡添梅

なつ

なつが來て
野原の草が
あを〳〵してる。

茨城縣眞壁郡若柳校　富岡正明

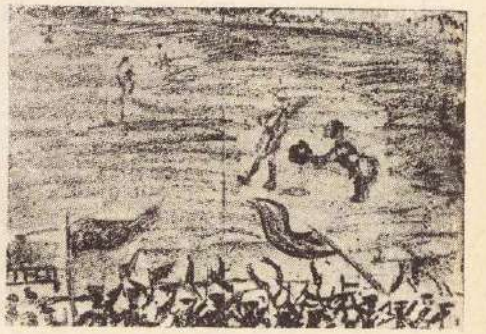
大根

車につまれた大きな大根
町へいつて買はれるよ。

茨城縣眞壁郡若柳校尋五　霜村榮

花

天氣の日にはふじの花に
蜂がぶん〳〵



きんれ』といつたら、みいちやんは『あたまが火じみたいだつたのよ』といつた。私はなんのことかと思つて、笑ひながら『火事みたいなの』ときくと、みいちやんは『えゝ火事の時カンカンでなるでせうあの火事』と、せつせと答へる。お母さんが『あたまがどんな風になつてたの、みいちやんや』と云ふとみいちやんは『つる〳〵して赤いのよ、だから火事なの』といつた。私とお母さんはおかしくつてまた笑つてしまつた。みいちやんはお母さんにドロップをいただいて又外へ遊びにいつたみいちやんは今年五つで時々おかしい事をいひます。

名古屋市五尋校俵　水尾隆彦（賞）

日曜の日

千葉縣安房郡平群校高二　若林芳雄

僕はこの間の日曜に初めて、田うなへ(田を耕す事)をしました。母が『芳雄をつれて行つてすこし田うなへを教せてやれよ』と兄さんに云はれた。もう十五になつたから、やらなければいけないと思つたけれども、やつぱりいやだつた。着物を取換へたら急に麥が變つたので、くすぐつたい樣な氣がした。

『さあ行かうよ』と兄は出だした。僕は兄の後について行つた。田へつくと兄は先づ畦の草を刈り始めた。僕はその間畦に立つて居たけれども、大そう持ちどうなので、思ひ切つて一足田の中へ入つて見た。兄が、ふりかへつて見て、『まあ待て』と云つたので、泥だらけになつた脚引を見つめながら立つて居た。

兄はやうやく刈り終へて『さあうなへよ、水が深いからそろそろと三尺縞位に、向ふへとうなうだ』と云つた。初めのうちは、水が頭にはねてこまつた。兄は僕のうなつた跡をうなへ直した。すこしたつと兄が『はあ餘程うなへるは』と云つて、それから僕のうなつた跡をうなはなかつた。その時分にはもう手がいたくなかつたのでよく見ると、手に肉刺が出來て居たので『肉刺が出來たは』と云つたら、兄は『半時間ばかりうなつて、はあ肉刺が出來たんか』と云つて笑つた。

三時間程うなつてからでした。饅が出たので二人で大騒ぎをして捕まへました。そして僕が家へ持つて行きました。

東京市之校五尋　山川享　清ちやん（賞）

お湯は入り

長野市外田所町　持田叙

『叙やお湯がわいたよ。』と裏の湯殿からお母さんが、座敷を通つて表まで聞えるやうな大聲で、お湯のわいたのをしらせました。私は手拭を持つて裏へまはりました。櫻の木にモズが七八羽來てゐて、ぢきに熱す櫻んぼを早く食たさうにキーキーと喰いておりました。湯殿の障子を開ひて中へはひると、うすい白煙と湯氣とがいつぱいこもつて、ぼんやりとしておりました。お母さんはお隣の君ちやんと信ちやんと一郎さんを、お湯におはひりとむかひにまゐりました。まもなく三人は、小さな手拭をふりまはしてやつて來ました。君ちやんと信ちやんとは私より下の女の子で、一郎さんは私と同じ年です。皆な樹つて着物をぬぎました。一郎さんはまつさきにお湯にはひつて『あつ、まだあつい』と云ひました。『私水を入れてあげるは』と信ちやんは中が白くてそとが青いタライ水を桶からくんでお湯の中へざつと入れました。やつと皆がはひれるかげんにお湯がなると、皆一しよにはひりました。皆な子供ですから四人ぐらゐは樂にはひれました。

雨ふる日には
ひつてりしてるふじの花。

千葉縣安房郡平群校高二　若林芳雄

月夜

のき下の石が
半分白い。

和歌山縣東牟婁郡明神校尋四　宮本シマノ

てう

せんだんの木に
てうがとんできた
はなもないのに
何しにきたの
せんだんの木も
なにしてよんだ。

長野縣下伊那郡神稲校尋六　西垣うめ

寒い晩

寒い晩にとなりの人が
湯はひりに來て
寒いのを忘れて
話をきいてた。

通信

自由畫選評

山本鼎

今度は澤山ありました。此頃は色の繪が多い。色の繪は多く色がごちや〳〵して居てたなく感じるやうなものばかりです。――もつと一色で描いた繪が見たい、デッサンの佳いものが見度い。

×

△雨宮竹男君の『マッチ』。落付いたいゝ描寫です。少し全體にざら〳〵して居て其感じが惡いが、それは紙が惡いからです。クレイヨンには、木炭紙は合ひません。もつと肌目の細かい紙がよい。

△水尾隆彦君の『野球』。野球場のスケッチですね。ピッチャーの姿勢はうまいが、打手は倒れさうだ。

△小川亨君の『蒲ちやん』。よく描けて居る。丸味があるいゝデッサンです。唯バックの線がいけない。こんな出たらめな線は無い方がいゝ。

△田中文八君の『家』。勢ひのいゝ、そして調子のいゝクレイヨン畫です。たゞ少しぞんざいだ。

△橋本久雄君の『枇杷の圖』。無鉢がなくそして、しつかりとかけて居る。――白い線は鉛筆のあとでせうね、摸寫の線ではないでせうね。

△藍井清君の『花の寫生』なか〳〵うまい。リズムをもつたいゝデッサンだ。バックの線もじやまにならない。（七月六日）

幼年詩選評

若山牧水

本號には、行數の都合で選外にしたのに惜しいのが澤山ある。

夕ぐれがたは
さびしかろ
さむしかろ
いそいでかへる
人と馬

少し大人びてはゐるが、捨て難いものだ。

ひよ子とられたその夜さは
家がしんとしてました
とやの前に行つた時
急に悲しくなりました

前の二行がことに佳い。その他、

麥田の上に
陽がさした
蝶々がお宿を
さがしてる

これは後の二行がいゝかも知れぬ。最も前の二行があつてからの面白さだけれど。

野原の風は涼しく
蛙の聲が遠くひびく
蛙はほんとうやかになく
道に立つてゐても地がひびく樣だ
地が響く樣だは面白い。

その他にも佳作がたくさんあつた。

綴方の選後に

齋藤佐次郎

▽いよ〳〵暑中休暇が來ましたね。一年中で皆さんの一番愉快な時です。かういふ時にはきつと綴方も澤山出來るでせうから、どしどし面白いものを作つて送つて下さい。

▽さて今月も相變らず澤山集りました。しかし、長いものが多かつたので入選作の數が少くなりました。その代り入選作はどれもこれも似たりよつたりのいゝものが集りました。すぬけていゝ作もない代りに、どれを賞にしたらいゝか迷ふ位によく似た出來でした。

▽最初に入賞の瀬野トキヨさんの『しんだつぱめ』に就て述べますと、私はこの作を讀み乍ら感動を與へられました。

まつたく感動を受けずには讀めない氣がしました。決して上手な作ではありません。しかし、まじめに正直にその時の見たこと、感じたことが書いてあります。しかも、キヨ子さんは愛情のこもつた眼で見、愛情のこもつた心で出來事を受容れてゐるのでそれで私たちに感動を與へるのです。小蕪のあはれな死よりも、可愛いゝ子供のために泣き悲しんでゐる親鳥の姿が一層よく書けてゐます。そのあはれな姿が忘れられません。

▽鈴木薫さんの『植木買』は上手ですね。なれ切つたもので、樂々と書いてあるので、いい氣持ちで面白く讀めます。植木賣と買手とねだんをいひ合ふ所など申分ありません。

▽中山貞子さんの『先生へ』は此の手紙を送られた先生から投書されたもので、かりに作つたものでないだけ生き〳〵としてゐるのが目をひきます。自分の思つたことをよく自由に書き表すことの出來たのと、この作者が一つ〳〵出遇ふことに深く感じる力を持つてゐるのを賞めたいと思ひます。

▽牧野とく子さんの「私」はその書き方が一番目をひきました。餘計なことは一切ぬきにして書かうと思ふことをポンと書いたのが愉快です。きび〳〵とした元氣な作風は胸がスキます。普通の書き方だつたらダラ〳〵と前置きを澤山に書くところですが、それを何にも書かずにすぐと『足のふみばもない。私の勉强室は本、ちようめん、ざつし等いろ〳〵の物がほりちらかしてある。』と書いたのが氣に入りました。この調子でおしまひまで通したので、言葉數は少いのですが、はつきりと頭に殘ります。氣持ちのいゝ作だと思ひました。

▽稻垣よし子さんの作は三つ程ありましたがどれもそれ〳〵面白いものでした。中で「赤い花」を選びました。おしまひの方が大變にいゝと思ひましたから。花のヒョロ〳〵してゐる有樣が弱かつたお母さんに思へたり、佛樣に上げやうかしらと思ふと、花があげてくれといつてゐるやうに思へたりするあたり、本當に美しい氣持ちがあらはれてゐるではありませんか。一家に大きな不幸があつたために、折角作つた花圃がめちや〳〵になつてしまつたといふことも、私ども大人には大きな暗示を感じます。

▽日向桃子さんの『みいちやん』は上手な作で、クス〳〵笑はせる力を持つてゐます。可愛いゝことをいふ「みいちやん」もよく書けてゐますし、「みいちやん」を圖んだ家の中の有樣が一層よく書けてゐました。

▽まだこの外に思つたことを述べたいと思ふ作がありますが、誌面がないので略します。大層いゝ作であると思ひながら都合で出せなかつた作に新井アサ子さんの『小蟻』宮澤健二郎さんの『寫生に行つた時』白井巖さんの作伊藤東吾さんの『石盤つき』菊川松美さんの『よもぎつみ』その他一三の作があります。

童謠の選後に

野口雨情

△その後、私は、私の主張の「童謠教育」の講演のために、各府縣の教育會や青年會、婦人會等へ、引き續き出かけてゐましたため久しい間、童謠の選後感を怠つてしまひました。それについて愛讀者の皆さま方より、是非選後感をとの通信が澤山來てゐます。ほんたうに皆さま方に相すまないことを致しました。これから毎號、選後感を書きます。

△さて、童謠の調子のことについて、皆さま方へ一言御參考までに申上げて置きたいことがあります。尤も、このことについてはこれまでにも屢々申上げてはあつた筈ですがよくお呑み込みにならないお方もあるらしく聞きましたから、重複をいとはず申上げます。

△一體、童謠に調子の大切なわけは、童謠は單に讀んで內容の筋を味ふだけのものでなく歌ふなり、又は歌ふのを聞いてなり、音樂的に美感を受味するところに童謠の存在があるからであります。

△ところが、調子と云ふと、すぐ七五調とか五七調とかしか無いもののやうに考へてゐる人のあるのは、大變な間違ひです。七五調とか五七調とか云ふのは、字足のことであつて、私の云ふ調子とは、字足のことではありません。音樂的旋律のことであります。字足は七五でであらうと、七八であらうと、自由でよろしいのであります。歌ふことの出來る、言葉と言葉の響き合ひ、これを私は交響的音律とも名づけて居りますが、それが私の云ふ調子の意味なのです。そして、その調子の優れてゐればゐるほど、優れた童謠と云ふことも出來るのです。又、それと反對に、調子の整はないもの、つまり、歌ふことの出來ないものは、完全な童謠とは申されません、たとひ、內容は童謠の世界であつても、直に、それを童謠とは申されませんのです。皆さま方に特にこの點の御注意を願ひます。

童話選評

齋藤佐次郎

▽先月は注目される作品はありませんでしたが今月はかなりにいゝ作がありました。

▽土橋さんの『老人のお禮』はねぎんでていい作でした。スキのよい、どつしりした作風は、この間のゴツ〳〵した骨と皮ばかりのやうな感を與へる時代を通り越して、立派な肉を得て輝いて來ました。推薦に値する作です。

らしいたど〳〵しした（しゃし味のある）書き方と、子供らしい構想とが氣に入りました。

▽兒玉角郎さんの『うそ話』は、どこかにアカ抜けのした味のあるところを面白いと思ひますが、しかし、うそ話をうそ話らしく讀ませたので面白くないのです。うそ話しみうそ話とわかつてゐながらも、うそ話しらしく書かないので面白くなるのです。

▽沓中鳥さんの『馬盜人を捕へた話』よく聞く話ですが、前半に作者の工夫があると思ひました。本間一郎さんの『王樣と月』作の持つ暗示には新味はありませんが、詩味の豊かな點に心をひかれました。簡潔な美しい文章も忘れられません。

▽大友喜助さんの『二つの魂』はいゝ暗示を持つた作です。童話らしい味の乏しいところもありますが、健實な作風と、題材をしつかりとつかまへてゐる點には敬服します。また話としての面白味もなか〳〵ありました。

△久米紘一さんの『彦六の運勢』は、やはりか味を持つた點には注目されますが、もう一といき作に充實味があつたら效果が多かつたでせう。面白い話でありながら、何處か力拔けの感があります。

▽一ノ瀬幸三さんの『王樣の皆惡役』は子供

▽尚、これ等の作の外に、中村龍王さんの『但馬毛生』富岡登久郎さんの『桶屋の小僧』新井アサ子さんの『卷物を探しに』久保一馬さんの『お猿の失敗』岡村菊堂さんの『青い光の丘をこえて』など、それ〴〵いゝ作でした。

▽今月は『老人のお禮』『二つの魂』『王樣と月』『彦六の運勢』の四篇を推薦候補作に擧げます。

『金の星』誌友募集

『金の星』の誌友を募集いたします。誌友にはいろ〳〵の特典がございますが、先づ第一に童謠童話及兒童創作の研究雜誌『小馬』に毎月投稿の特權があります。尙この外にもいろ〳〵の御便宜がありますから、本社宛に誌友規則書をお申込み下さい。早速お送り申上げます。

『金の星』新誌友名簿

佐藤　錠二樣（北海道）
丸山己代治樣（栃木）
金井やま子樣（新潟）
額原　八郎樣（朝鮮）
山田　重吉樣（仙臺）
角野　嘉藏樣（福島）
稻垣よし子樣（東京）
岡本　壽雄樣（神崎）
兒玉　角郎樣（廣島）
中川　皎樣（和歌山）
岡添信次郎樣（東京）
恩地　淳樣（大阪）
牧野　博樣（千葉）
有田　松彥樣（長野）
中野　衞樣（長崎）
小川平八郎樣（京都）
山口　光子樣（青島）
伏木　良三樣（北海道）
福田　常子樣（大阪）
遠山　利半樣（三重）
中村　銀子樣（福井）
根本　泰司樣（長崎）
田端　好子樣（大阪）
山縣　哲三樣（官崎）
多賀今朝春樣（靜岡）
月島　仁作樣（京都）
奥平　太一樣（德島）
植原　榮一樣（崎玉）
大場　悅子樣（福岡）
丸山己代治樣（栃木）
金井やま子樣（新潟）
額原　八郎樣（朝鮮）
山田　重吉樣（仙臺）
角野　嘉藏樣（福島）
稻垣よし子樣（東京）
岡本　壽雄樣（神崎）
兒玉　角郎樣（廣島）
中川　皎樣（和歌山）
岡添信次郎樣（東京）
恩地　淳樣（大阪）
牧野　博樣（千葉）
有田　松彥樣（長野）
中野　衞樣（長崎）
小川平八郎樣（京都）
山口　光子樣（青島）
伏木　良三樣（北海道）
福田　常子樣（大阪）
遠山　利半樣（三重）
中村　銀子樣（福井）
根本　泰司樣（長崎）
田端　好子樣（大阪）
山縣　哲三樣（官崎）
多賀今朝春樣（靜岡）
月島　仁作樣（京都）
奥平　太一樣（德島）
植原　榮一樣（崎玉）
佐藤　錠二樣（北海道）
丸山己代治樣（栃木）
金井やま子樣（新潟）
額原　八郎樣（朝鮮）
山田　重吉樣（仙臺）
角野　嘉藏樣（福島）
稻垣よし子樣（東京）
岡本　壽雄樣（神崎）
兒玉　角郎樣（廣島）
中川　皎樣（和歌山）
岡添信次郎樣（東京）
恩地　淳樣（大阪）
牧野　博樣（千葉）
有田　松彥樣（長野）
中野　衞樣（長崎）
小川平八郎樣（京都）
山口　光子樣（青島）
伏木　良三樣（北海道）
福田　常子樣（大阪）
遠山　利半樣（三重）
中村　銀子樣（福井）
根本　泰司樣（長崎）
田端　好子樣（大阪）
山縣　哲三樣（官崎）
多賀今朝春樣（靜岡）
月島　仁作樣（京都）
奥平　太一樣（德島）
植原　榮一樣（崎玉）
佐藤　錠二樣（北海道）
金丸　榮子樣（長崎）
米澤　永鍵樣（北海道）
岩崎さと子樣（東京）
小笠原庄三郎樣（新潟）
大友　喜助樣（仙臺）
淺田　倫子樣（東京）
奥田　直子樣（北海道）
寺島貞次郎樣（東京）
木舟　廣次樣（兵庫）
木内　益衞樣（東京）
佐川　五一樣（青森）
椋木繁三郎樣（愛知）
菊川　道雄樣（山口）
森山　融子樣（大分）
春木　敏夫樣（埼玉）
前川　誠一樣（長野）
松本　梅子樣（富山）
山田　秋子樣（群馬）
田所　順造樣（福井）
伊藤　秀夫樣（岩手）
人見　六郎樣（群馬）
春日　英六樣（鹿兒島）
花泉　貞子樣（香川）
依田　健二樣（兵庫）
大川　三郎樣（宮崎）
後藤　光子樣（上海）
辻　五郎樣（東京）
（以下次號）

自由畫掲載外佳作

佐藤　清一（香川）　桑原　達郎（長野）
矢野　伊之助（京都）　井上　キミヨ（長野）
寄田　靜夫（香川）　白井　巖（香川）
宮崎　秀一（香川）　橋　節彥（香川）
平松　信夫（和山歌）　早野茂喜之助（福井）
武藤　仲三郎（福井）　永濱　幸夫（京都）
大野　カネ子（大阪）　川村　稠（京都）
小林　武雄（名古屋）　河島　清（京都）
深谷　達也（福島）　山下　忠行（山梨）
萩原　里治（山梨）　小野　猛八（山梨）
山形　恒明（山梨）　衣川　美津代（山梨）
保坂　光惟（山梨）　藤井　浩（名古屋）
井原田正能（廣島）　水尾　隆彥（名古屋）
齋藤　やよい（名古屋）　五味　ヨシ子（山梨）
宮澤　健二郎（山梨）　千ヶ崎　英三（山梨）
福田　ハツ子（橫濱）　白沼　一郎（豐橋）
林　茂夫（東京）　赤澤　尙枝（豐橋）
千ヶ崎　一郎（山梨）　長野　重雄（下ノ關）
庄田　英晃（東京）

幼年詩掲載外佳作

十河　チヨ子（香川）　富岡　正明（茨城）
日向　桃子（東京）　小尾　ゆき子（山梨）
金子　孝平（神奈川）　栗野　俊三（山梨）
伊藤　登良男（東京）　寒竹　進（東京）
霜村　貞夫（茨城）　稻田　勳（和歌山）
寶田　孚子（千葉）　河住　和一（千葉）
佐野　七郎（香川）　川村　稠（京都）
加藤　堯己（和歌山）　穴吹　春子（香川）
瀧林　芳雄（千葉）　藤田　正一（茨城）
石丸　滿行（香川）　小河　桃江（香川）
程塚　正一郎（茨城）　野村　良之介（京都）
松本　利市（香川）　植松　巽（香川）
新井　アサ子（東京）　松本　宮子（香川）
宮　ヒサエ（香川）　水尾　博子（名古屋）
櫻井　久雄（橫濱）　星野　初江（東京）
木川　キヌ（神奈川）　田中　亮（和歌山）
山本　正雄（京都）　安達　久男（京都）
新田　一男（香川）　シゲ（香川）
澁谷　經子（東京）　三好　節子（東京）
澤　ぬい子（茨城）　阿部　入倉　あさみ（香川）
赤荻　ことし（茨城）　江田　久吾（茨城）
亀田　花子（大阪）　福家　弘（東京）
四市　東厚（千葉）　高橋　正夫（千葉）
清水　マス子（香川）　兒島　ハルミ（香川）
溝渕　トミエ（香川）　佐藤　清子（香川）
高知尾　正明（千葉）　井口　シヅエ（香川）
安室　武（橫濱）　澤部　キク（茨城）
寄田　靜夫（香川）　山本　みさへ（山梨）
河田　政直（香川）　福田　琴子（橫濱）
池　春榮（福井）　新田　正雄（香川）
片岡　正治（千葉）　戸村　喜哉（千葉）
四市　東厚（千葉）　花澤　長吉（千葉）
佐々木　綾子（香川）　江田　久吾（茨城）

綴方掲載外佳作

保坂　忠信（山梨）　白澤　いちろ（豐橋）
矢野　春吉（東京）　井上　新造（福井）
杉本　寺好（山梨）　佐口　房吉（茨城）
菊川　松美（愛媛）　伊藤　東吾（福井）

新しく出た本

◆**童謠教育論**（野口雨情先生著）童謠界の第一人者野口先生が、童謠は兒童の世界の宗教であり、兒童の生活を最も正當に導き得る唯一のものである、との主張を、理論と實際の上から說いて、童謠と教育の關係をわかり易く、叮嚀に論じてゐるのがこの本であります。この本は僅かに六十頁の小册子でありますけれども、童謠と教育に關するいろ〳〵の問題に就いて考へてゐる人々には、この上ない導きとなります。童謠及び、童謠教育に興味を持つてゐる人々や、特に、兒童の教育に直接關係してゐられる學校の先生方に、この本を是非おすゝめいたします。本書の序文に野口先生は童謠の定義を下して「童謠とは童心を通じてみたる物の生活を音樂的旋律のある今日の言葉で言ひあらはされた藝文である」と、說いてゐられます。（四六版六六頁。定價金六拾錢。東京市神田區錦町一ノ一來本書店發行。振替東京五二三三九番）

◆**赤いマント**（佐野正明氏著）秋田の町から生まれた童謠集であります。著者は眞面目な教育者であり、童謠の熱心な研究者であつて、同時に美くしい自然詩人であります。可愛いパンフレットであつて、氣品の高い、純な詩が二十許り集められてゐます。序文は野口先生で、裝幀は蕗谷虹兒先生です。（小形版五〇頁、定價三拾錢、秋田市柳町一二詩星社發行。）

瀬野 ヨソコ（愛媛）　白井 巌（香川）
宮澤 健二郎（山梨）　小林 武繼（名古屋）
岩淵 榮（新潟）　増田 武志（長野）
松江 智穂美（長野）　堀 耕三（東京）
南須原 静也（東京）　井手 貢（愛媛）
吉川 タカ（茨城）　福永 ヨネ（福井）
大津 美津（福井）　近江谷 健美（東京）
鳴原 信雄（東京）　笠原 イシ（山形）
渠井 正二（秋田）　小出 隆一（新潟）
柴田 美緒（岐阜）　稲垣 秀子（東京）
栗野 武政（茨城）　栗野 トメノ（茨城）
田藤 一（新潟）　稲谷 晃英（石川）
伊藤 保一（京都）　千々崎 英二（長崎）
川村 稠（京都）　糸井 一郎（京都）
篠原 英男（長野）　菅野 迷雀（仙臺）
松永 幸子（静岡）　山口 延一（東京）

――童話佳作――

（大人篇）

久保 一馬（鹿児島）
和田 莊三郎（千葉）　横山 照波（横浜）
小川 勝平（長野）　大下 勝巳（長野）
井上 一郎（東京）　庄田 英晃（東京）
富岡登久三郎（東京）　泉澤 マサエ（東京）
新井 アサ子（東京）　遠藤 二郎（名古屋）
岡村 菊堂（朝鮮）　久保 末子（横浜）
小林 龍之助（神戸）　中村 直光（東京）
岡添 信次郎（東京）　寒竹 進（東京）
伊藤 三千夫（山口）
長野 久治（鹿児島）　本間 一郎（東京）
岩下 克巳（東京）　岡本 壽雄（東京）
平井 淳雄（廣島）　藤山 義雄（鹿児島）

（小供篇）

桑野 敬三様（豐前）
逸見 小鳩様（埼玉）
吉本喜三郎様（兵庫）
小林 柳原様（茨城）　清様（山梨）
岡村 菊堂様（朝鮮）　横浜
福井 勝秋様（東京）
山崎長四郎様（東京）
稱本 洋一様（栃木）
神崎みのる様（滋賀）
野中 新市様（奈良）
富岡登久四郎様（東京）
草山 幹枝様（福岡）
平松 信夫様（和歌山）
田尻ゆきた様（熊本）
寺本 和孟様（東京）
銀田美之介様（東京）
武田よし夫様（横浜）
恩地 淳様（大阪）
多賀 金次様（東京）
石橋 宗雄様（福岡）
伊藤登良男様（東京）
横手ひで子様（札幌）
潮 囚 榮様（東京）
鈴木エイ子様（東京）
梶谷千代吉様（北海道）
鈴木正五郎様（仙臺）
中村 飯積様（千葉）
伊藤三千夫様（山口）

（大人篇）

岡崎 英子様（熊本）
天満カズエ様（香川）
小林 清様（山梨）
戸塚 静江様（横浜）
奥村 光夫様（東京）
藤本彌一郎様（山梨）
南波しず子様（新潟）
拓上美代子様（東京）
安藤 肇様（福岡）
松井 純三様（東京）
松本ヲメ子様（東京）
糸井 次作様（京都）
藤川 武子様（愛媛）
程塚 武美様（千葉）
伊藤 保一様（京都）
市川 龍次様（山梨）
千葉 悌様（宮崎）
加藤 勇様（東京）
堀 耕三様（東京）
大野カネ子様（大阪）
今田 作二様（千葉）
井崎 進様（岐阜）
平戸 郡治様（茨城）
高久 忠様（東京）
程塚 久吾様（茨城）
遠藤 洋風様（名古屋）
今泉 仁藏様（福島）
吉川たみ子様（茨城）

◆純黄謠傑作集影繪のお國（童午社編）この本は、藤森秀夫、北原白秋、三木露風、西川勉、野口雨情、西條八十、山村暮鳥、青木實三郎、青柳花明の諸氏の約五十名の童謠の中から傑作を擇んで集めたものでありまして、さま〴〵の作家の詩風に接するには最も便利な本です。なほ、本居、中山兩先生の作曲が附せられて居り、終りの附錄に「最近に出版せられた童謠に關する雜誌書籍の一覽表」は研究者には非常に便利なものであります（四六版二〇〇頁　定價金壹圓貳拾錢、東京市神田區錦町一ノ一　米本書店發行。振替東京五二三三九番）

◆處女アデイナとイエス（門馬榮苑氏譯）この書はエヂプトに住むユダヤ人の娘が、イエスの最後までを親しく見て、イエスの人柄と其行ひ、故郷の父に通じた手紙體の物語りです。一つのキリスト傳でありまして、西洋では大變よく賣れた本です。著者は博い學問と、豐かな想像とによつて、極めて趣味多くキリストの生涯を述べてあります。キリスト教界の文士にして雜誌「神と人」の主筆である門馬氏はやさしいそして力强い筆を以てこの立派な本を見事に譯されました。少年少女諸君がこれを讀まれたら、童話を讀むやうな興味のうちに易くキリストの傳記を知ることが出來ます。又此本には其頃のユダヤの地理や人情や風俗がよくかかれてゐますから、大人でもキリスト信者でも、之れを讀めば敎へられる點が多いと思ひます。（四六版四四〇頁定價二圓、京橋區尾張町春陽社　振替東京五五三）

大懸賞傳説物語募集

◇特に少年少女を主人公としたもの◇

日本は傳説に富んだ國です。島國だけに世界のどの國に比べても、傳説の澤山ある事ではまけないと思ふ程です。私どもが子供の時にお父さまやお母さまや、又お祖父さまお祖母さまから聞かされたお話を思出して見ても、その中にはなか〳〵すぐれた立派なお話のあることを思ひます。

しかし、惜しいことには是程澤山に優れた傳説があるにも拘らず、少年少女が讀まうとしても適當に集められた本がありません。まことに殘念なことではありませんか。

そこで、『金の星』はこの度日本全國の愛讀者の方々から廣く各地に傳へられてゐる傳説の中で特に少年か少女かを主人公としたものを募集することにいたしました。皆さんが幼い時にお聞きになつたお話でも結構です。或はその土地に傳へられてゐる有名なお話でも結構です。面白い、そして優れたお話でさへあれば結構です。どし〳〵御投稿下さい。投稿者は少年少女に限らずどなたでも差支へありません。規定は左の通りです。

當選の各篇は十一月號の『少年少女傳説物語號』に掲載して賞金を呈します。尙十一月號には『金の星』のおなじみの諸先生の傳説物語りを滿載いたします。

□賞　金。一等（一篇）金參拾圓。二等（二篇）金拾五圓。三等（三篇）金七圓。
（尙選外の佳作に對しても掲載の分には稿料を呈します。）

□締　切。八月二十日。

□原稿枚數。二十字詰二十行の原稿紙拾枚迄。

□選　者。神野岩三郎先生、野口雨情先生、齋藤佐次郎先生。

讀者だより

諸先生樣。常夏の國の此の地にも、今日此頃は、夏らしい感じをおこさせます。七月一日から、學校は休暇になりました。かうして私たちが休息してる間も先生方には「金の星」の爲にベストをつくしていらつしやるかと思ふと感謝致す外はありません。先生方の熱心な御奮闘と讀者の熱心との結果は一段金の星を輝させるので御座いませう。及ばずながらもバナナの香をかぎながら南國の月をみて「金の星」の隆盛と先生方の御幸福を祈つてやみません。(臺北みちる)

▼記者樣お變りありませんか。私は右腕の骨二本共折つてしまつたのです。字が書ける樣になる迄は今月一杯かゝるさうです。此の頃左手で字を書き始めました。それから私の名を敬めましたから今迄の「守一」を「靜雄」としたので。す以後宜しく。(東京　漆靜雄)

▼「金の星」には規定以外の童話又は童話劇を載せていたゞけるでせうか。規定以外と云へばつまり規定の行數を可成り突き拔けたと云ふ意味ですが。(大ども生)

◇童話劇の事は考へて置きませう。なるべく規定の行數をこさないでください。(記者)

▼金の星にも(作曲)募集部を拵へて載けないでせうか。私は「金の星」に出てゐる童謡の中で作曲すればよいやうなものがたくさん見ます。(京都　糸井一郎)

▼私は水島先生の特色のあるしつかりした畫が大好きです。水島先生の畫を澤山入れて下さい。八月號の水滸傳の畫なんかほんとによいと思ひました。(岡山　諸方精一)

▼記者先生驚んで下さい。僕の友達の友野君も「金の星」の仲間に入りました。私はこんどからうんと投書しますよろしくおたのみ申します。(長野　河村起)

▼此の間怪我をしたのでごぶさたしました。川原で石が落ちて來て其の下になり、左手の小指と無名指とも切りました。無名指は小指ほど大した事はありません。小指はおほん頃までほれて居るとの事です。きゞは大した事もありません。私の幼年時は夢がとうたがひました。私の童話が大人篇となつて居ました。どういふまちがいでせう。これから皆子供篇大人篇と書いて送るとまちがはぬでせう。それは大へんな御災難でしたね、一日も早く御全快を祈ります。(長野縣飯田町　山田照華)

◇童話も童謡も大人篇小供篇とお書き下さると結構です(記者)

▼記者樣。私は今度はじめて「金の星」の愛讀者になりました。童謡はいやになるほどありますからどん〳〵お送り致します。野口先生このあつい〳〵夏をお丈夫にお暮し下さい。(新しい愛讀者より)

▼沖野先生がわざ〳〵我が甲州にお出でになられて面白いお話をして下さいました。お土産に「金の星」の美しい繪葉書を下さつたりして僕は本當に嬉しうございます。いつまでも記念としてとつておくつもりです。(山梨　山下亮)

▼面目一新した「金の星」をお祝ひ申あげます。これまでの「金の星」もいゝとは思ひましたが八月號からのは本當にびつくりする程です。ことに口繪の「王女と魔法使」は何といふ美しい畫でせう。寺内先生のお畫は私はじめて拜見するのですが、すつかり好きになつてしまひました。(三日月さん)

▼「金の星」に「靜雄」樣の「ふ童謡の畫や扉の畫など一として好きでない畫がありません。記者樣。毎月寺内先生の畫を澤山出して下さい。私の兄さんも大好きだといつてゐます。(神戸　山田靜子)

▼七月號の若林芳雄樣の綴方「別れた友に」を讀んで、私は胸に何かをぶつけられた樣な大きな感激に打たれました。繰返し〳〵讀ますには居られません。あゝ若林樣は何といふ立派な御心なのでせう。あの丘での尊い御心持が永久に消えない樣願ながら御祈り申します。本當に友を羨ます、清い百姓として自然を愛し自然に生きて下さいませ。そして田園詩人あの「パーンス」の樣な御心で詩に文に永遠に輝いて下さいませ。失礼ながらあまりの感激に記した一筆、御許しを——。(大空夏子)

▼「金の星」の發展を祝します。表紙が目がさめるやう美くしくなり、内容も充實した八月號を手にとつて、私はホントに嬉しく思ひました。(「金の星」が益々よくなるやうに祈ります。(福島　羽田敬治)

▼先日は可愛いゝ繪葉書を澤山お送り下さいましてありがたう御座いました。早速、私の受け持ちの幼い者達に分配致しました。みんな掴きしめて喜んで居ました。「父樣」も只今着きました。こんな

片田舎にゐて幼い者達を相手に暮して居ます私は、この綺な美しい人達を、自由に延びる丈延ばしてやりたいと思つてゐます。ではお禮丈申上げます。(山梨　土屋梅枝)

▼こんど蕗・虹兒先生が「金の星」の表紙に麗筆を執られたことは私共誌友の最も大きい誇りの一つに加へなければなりません殊に八月號の「愛らしい王子」は何かしら遠いバルシヤあたりの王城の夏の夜を想はされました。王子は多分紫色の夜空に出た星を眺め乍らひとりベランダの上で童謡でも唱つて居るのでせう。蕗谷先生どうぞ毎號憧れの童話の國をおかき下さいお願ひです。(大阪市一誌友より)

▼先生、私のつたない童話を一度ならず二度までも佳作に入れて下さり何ともお禮の申し樣もございません山本先生、自由畫は水さい畫でもよいですか。(信州生)

◇水彩畫でも結構です。(山本鼎)

▼先生、僕の家は今度細島に移りました。當地は淋しくて、大變不便ですが綺麗な所です。毎夕五百噸位の小さな汽船が「ポーツ」、さけびながら入つて來る時などは實に愉快です。(宮崎　海の子)

▼「金の星」の合本を作られるとの事結構な事と思ひます。それにつきお願致すのですが、合本用の表紙だけをわけて戴きたいのです。如何でせう。(長野　矢下喜藩詩)

◇きまつたゞけの數しかこしらへてありませんから、何れ餘分をこしらへましてお分けいたしませう。(記者)

▼諸先生、入梅ですね、お丈夫ですか。今日は隨分嬉れしかつたのです。——「金の星」がちやんと袋にはひつて來た事と、「小馬」の二號が來た事です。なほこの暑さにも負けないで、勇氣百倍して御奮闘をいのります。(齋藤武)

▼小說を讀む代りになる童謡童話を讀むやうに讀者の兄姉等に望む。(代々木　松村生)

▼誌友に入れて下さいまして有り難ふ御座います。昨日學校の歸りにはじめて「小馬」にある先生方のお話を讀みまして、大變ためになりました。いかにも研究雜誌なので嬉しく思ひましたからお手紙を書きました。(長野　小山美土子)

▼雨情先生の童謡は何時も涙ぐましい、そしてホームに歸る樣な氣持で拜誦致します。御寫眞を見て成程、素朴な方だと思ひました。(山口　伊藤三千夫)

▼記者樣お變りは？　月々に益々發展して行く「金の星」を見ると私は何だか自分の樣な氣がして嬉しくてたまりません。西條先生の「牢破り」馬場先生の「首無し僕人」大變面白く讀みました。あの樣なお話を澤山のせて下さい。これからうんと投書しますよろしく。暑くなります、記者樣御身大切に。(東京　阿規羅)

▼記者先生、今度讀者大會を開いてくれませんか。それから僕の住んでゐる栃木にも「金の星」誌友がゐましたらおしへて下さい……さよなら(栃木　君島八智郎)

◇栃木にも澤山誌友がゐます、暇の時にゆつくりお知らせ申します。(記者)

▼金の星七月號に、原稿の〆切は六月の二十八日としてありました。そして發表は九月號としてありました。私は六月二十八日までに投書致しましたのですけれど八月號に童謡の佳作に出て居りましたと云ふわけなのでございますか。(東京　新井あさ子)

◇記者が間違つてあなたの分を八月號に入れたのです。御赦し下さい。尙童謡に關するあなたの御希望は相談して置きます(記者)

▼キーラキラ、キーラキラ金の星、空に光つてる金の星、而日くて、爲めになる金の星、天下に輝け金の星。(東京　赤木庸平)

▼愛讀者の皆さま御壯健ですか。金の星の發展と我等投書のポツにならない事を祈りません。野口先生の「朝鮮餡屋」はんとうにすきでした。私たちの村にも朝鮮あめやが來ます。一錢に一本です。私は仙臺におりましたが今はさびしい田舎にゐます。(宮城　北野牧夫)

▼樂しい夏が參りました。記者樣には御變りありませんが。私も「金の星」を一番の友達として暮してゐます。早く九月號が見たくてたまりません。(奮闘して下さい。(兵庫木船廣次)

▼此の頃、私の作がとんと掲載されないので、悲滅してゐます。私は蕗谷虹兒先生の繪は大好きです先生よい繪を澤山のせて下さい。尙、私の名「富岡雅秀」を(富岡たかし)と改稱しました。皆さんよろしく。(東京　富岡隆)

▼編輯部の方々お變りありませんか。私は早稻田中學の一生徒です。御誌を愛讀し始めたのは昨年の四月號からです。病の床についた時、私を慰めてくれました。併し何度投書しても本に出ません。毎號見てはがつかりします。南須原君の投書が何時も屢しく掲げられて居るのを見ても癪にさわります。始めて圖畫を投書しました。これも駄目かしら。編輯部の方よ。こんど駄目だつたら死んで祟りますよ。(東京　福家弘)

學校が始まります

……御用意は如何で御座いますか

永い間の夏休みも、もう殘り少なになりました、學用品の御用意は如何ですか、三越の四階には書籍、文房具を始め、學校で御入用な品は殘らず取揃へてあります、又小兒部には今年の新しい洋服、帽子、靴等が豐富に御座います、何と申しましても東京でのお買物は品が丈夫で値の安い三越に限ります

三越呉服店

◆東京市駿河町◆

懸賞創作募集

◆少年少女の創作◆

自由畫……山本鼎先生選

幼年詩……若山牧水先生選

綴方……編輯部選

〔注意〕課題は何でもかまひません。諸君の日々見たり、感じたりしたことや諸君のすきなものを、諸君のすきなやうに畫なり、詩なり、文なりにしてかいてください。一人で何題出してもかまひませんが、姓名は學校や學年（または住所と年齢）とともにおとさないやうにして下さい。用紙は自由畫はなるたけ畫用紙に、幼年詩や綴方はなるたけ原稿用紙（または半紙）に書いてください。よく出來た方には『金の星』特製の賞品を差上げます。次號締切は八月廿八日（その以後は次號へ廻る）發表は十一月號、宛名は東京市外田端三百五十一番地金の星社。

◆一般讀者の創作◆

童謠……野口雨情先生選

童話……齋藤佐次郎先生選

〔注意〕童謠は十五行以内、童話は二十字詰二百行以内、優秀な作品は「推薦」または「特選」として發表いたします。推薦の場合は童話には五圓、童謠には二圓づつ、特選の場合は童話には拾圓、童謠には五圓づつ賞金として呈します。但し少年少女の創作童話にして「入選」の場合は「金の星」賞を呈します。締切、發表、宛名は少年少女の創作と同じです。原稿には必ず住所姓名を記して下さい。原稿はお返しいたしません。

定價　壹册　參拾錢　送料　壹錢
三ヶ月分三册（送料共）九拾錢
半年分六册（送料共）壹圓八拾錢
壹ヶ年分十二册（送料共）參圓六十錢
但し四月號九月號新年號は特別號で四十錢ですから、御註文の節はこの分だけ必ず加へてお拂込み下さい。

振替口座東京五九五九六番

〔送金〕▽御註文は必ず前金で御拂込み下さい
▽送金は振替が一番便利で御座います
▽切手代用は（壹錢切手）一割増しです

〔注意〕▽第何卷第何號よりと書いてください
▽住所姓名ははつきり書いてください

廣告料は御照會次第お答へ致します

大正十二年八月六日印刷納本（毎月一回）
大正十二年九月一日發行（一日發行）

編輯兼發行人　東京市外田端三百五十一番地　齋藤佐次郎
印刷人　東京市小石川久堅町百八番地　大橋光吉
印刷所　東京市小石川久堅町百八番地　株式會社博文館印刷所
發行所　東京市外田端三百五十一番地　金の星社

振替口座東京五九五九六番
電話小石川五三八七番

佳い香、涼しい味！
齒を強く美しく
するそのきき目！
體をすこやかに心
をさわやかにする
そのちから！

ライオン煉齒磨は
僕の一等大好きな
齒磨です。